



征臺記事

下

リ 5  
1923  
24





征臺記事下





孫子兵法

第二十一回 99/119

○石門ノ事必下全ノ事  
○五月二十二日ニ於ケル  
小戦争ノ再説○日本人ノ勇猛ナルヲ  
○嚴格ニテ  
實効アル兵法ノ一  
○戦争ヲ止メントスルヲ嫌ヒ  
シ事○石峰ニ登ル党與ノ一  
○敵兵逃走ノ一  
○死  
傷人ノ數

借余輩ノ石門ヲ過キシ頃ハ幾ント正午十二時ナリシ  
カ熱々此地ノ形勢ヲ考ルニ天然ノ要害ニシテ金城湯  
池モ争テカ之ニ若カンヤ余ハ是ニ至テ始メテ其地理  
ヲ詳カニスル機會ヲ得タルヲ以テ更ニ日本人ノ此地  
ニホテ牡丹人ヲ逐ヒ散ラシ且ツ牡丹社人ノ常ニ勝利  
ヲ得タルヲ以テ此度モ亦之ニ勝タントシタルヲ日本



ノ兵士等一撃ノ下ニ之ヲ打テ却ケタル顛末ヲ説カ  
トス但シ前ニハ此戦争ニ於テ日本兵士ノ顯ハシタ  
ル精神勇氣ノ状ヲ餘リニ説キ過シタリト云モ是余ハ  
未タ此事ノ始ヲ見ス又敵人據ル所ノ地ヲモ知ラサ  
ルカ故ニ敵兵ヲ圍ニ伐タントスルニ如何ナル困難ア  
リシヤ固ヨリ言フヲ得サリシ所ナリ抑我兵ノ石門ヲ  
攻ムルヤ僅カニ一握ノ兵士ヲ以テ一瞬間ニ之ヲ取レ  
リ但シ近傍屯集ノ兵凡ソ一百七十五人アリレト云モ  
實ニ之ニ從事スルモノハ唯々數人ノミニテ畢竟敵兵  
防禦拙キニ出ルカ故ナリト云モ然レ氏亦日本兵士ノ  
勇悍強猛ナルノ致ス所感歎セスンバアル可ラス蓋シ  
牡丹社人ノ據ル所ハ實ニ要害險固ノ地ニシテ石門ノ  
左右ハ二箇ノ夫突シタル巖石ノ高坡ニシテ動モスレ

ハ絶壁ノ形ナニ似タルモノ汎々之アリテ一ハ其高サ  
幾ト五百尺一ハ幾ト四百五十尺ニシテ其間ノ廣サハ  
凡ソ三十尺ニテ急湍之ニ注キ怪石磊落トシテ其内ニ  
出波シ深サ甚タ一撮ナラズ其尤モ浅クシテ渡ルヲ  
得ベキトスル所モ猶ホ腰ヲ渡ス可キノミ蓋シ石門ノ  
左右ハ此ノ如ク峻崇ナルヲ以テ必死ヲ極メ危急ニ迫  
リ止ムヲ得サルノ人ニ非ラサレハ之ニ登ラントハ夢  
ニモ思ハレサル所ナリ其右ニ在ル石柱ノ頂ハ其夕尖  
銳ニシテ其形ナ恰モカモニ谷ノ針石ニ似テ但小十  
ルノミ而シテ殊更ニ敵兵ノ入ルヲ得サランガ為メ  
ニ設ケタルモノノ如シ然ルニ日本海軍兵ノ内ニ之ヲ  
攀シテ土蕃ヲ襲ハントセルモノ凡ソ二十人アリシト  
云フ



備又此事ヲ未タ為サル前ニ土蕃等ハ石門ノ右(我兵ヨ  
リ言ヘハ左ナリ)ニ粗造ナル高壘ヲ設ケ壘ノ内外ハ未  
タ其實ヲ詳ラカニセスト岳氏我兵ノ前隊ニ向テ少シ  
ク砲撃セシカ前ニ言フ海軍兵中ノ三人奮激シテ進ミ  
シガ故ニ敵ハ大イニ恐怖セシカ直ニ砲撃ヲ止メテ  
我兵ヨリ數十間ヲ隔テタル草莽亦石ノ間ニ身ヲ潜メ  
更ニ其形ヲ見ス思フニ此時敵兵等ハ果シテ我兵ヲ數  
百人虜ニセント思ヒシナランニ却テ已レノ破レヲ取  
リシハ憐ム可キナリ夫ヨリ時ノ移ルニ及テ日本ノ  
兵士又々此地ニ来ルモノニ十五六人ナリシカ敵ノ  
如何ニ心ヲ用ヒス只管何レノ處ヨリ溪流ヲ渡ラント  
ノニニ注意シテ打テ眺メ居タリシ程ニ敵兵ハ再び時  
ヲ得タリト思ヒシニヤ具距離四十尺前後ノ所ヨリ齊

シク砲撃ヲ始メ之カ為メニ日本兵士ノ内兩三人直ニ  
ニ打テ斃サレ其餘モ過半ハ悉ク重創ヲ被リタリシカ  
各々遶カニ川流ニ身ヲ投シ河底ヨリ突キ出テ巖石ノ  
後ニ身ヲ潜メ牡丹人モ亦同シク川上ノ巖石ヲ楯ニ取  
リ日本兵士ト相對シテ互ニ聲ヲ潜メ相隠ル、ナ數十  
分時ナリシ蓋シ此時士人ノ此ニ在リシモノハ余カ聞  
ク所ヲ以テスレハ凡ソ七十人ナリト斯ノ如キノ小兵  
ナリト岳モ其位置ヲ取ルテ甚タ險固ノ地ナルカ故ニ  
殊ニ大兵ノ力ニ敵スルヲ得タリト云フ  
斯クテ敵モ身方ニ互ニ相潜ミテ居リシカ日本兵士ハ  
又々外ヨリ来リ此險隘ニ入りテ正サニ身ヲ以テ後兵  
ノ楯ト為リ是ヲ以テ前ニ砲創ヲ被リタル兵士等ハ辛  
クシテ其地ヲ退クヲ得タリ之ヲ見ルヨリ牡丹人ハ又



又茅二ノ砲撃ヲ始メシガ終ニ久シク巖石ノ微  
ニ在ル能ハス立テ銃砲ヲ放タントスルヲ日本兵ハ今  
ヤ彼等ノ在ル所ヲ知リシヲ以テ得タリヤ賢シコク衆  
人齊シク砲撃セリ此時又日本兵士ノ内其意ニ乘シテ  
次第ニ敵人ニ近ヨリ終ニ敵ノ隠レタル所ニ到ルモノ  
數人アリテ敵兵ノ火ヲ付ケントセシ時突然其前ニ出  
タルヲ以テ敵人ハ其不意ニ恐ル、モノ少ナカラス斯  
クスルヲ互ニ殺時間ニシテ日本兵士ハ次第ニ悉ク敵  
人ニ迫リ近ツクヲ得タリト云モ進行甚々速ニ為ス  
ヲ得ス加之日本兵士ハ敵ノ為メニ劊ヲ被ルモノ殊  
々多キヲ以テ其將佐久間ハ喇兵ヲシテ速カニ退カ  
ンヲ令セシメタレ氏固ヨリ敢死ノ兵ナレハ此令ヲ  
聞クト云氏更ニ事トモセス曾テ英國ノ兵士等退陣ノ

暗号アリト云氏之ヲ見サリシカ如ク此時日本兵士モ  
亦此令ヲ聞クモ聞カサルカ如ク一步モ退クヲナカリ  
シ蓋シ此兵士ノ号令ニ従ハサルヲハ之ヲ黙許セサル  
ヲ得スト此時余ハ思ヒシカ果シテ彼等ノ内一人モ終  
ニ罪セラル、モノナシ日ヲ経テ此等ノ勇猛ナル兵士  
ニ其事ヲ尋ヌルニ當時進メシヨリ却テ退クヲ危難  
ノ様ニ見エタル故ニ終ニ退カスシテ戦ヘリ尤モ一時  
ハ其場ヲ立去リ中軍ニ結ヒ付キテ退リシカト思ヒ  
タレ氏我傍ニ我兵士ノ一人腕ト胃ノ臍ヲ打タルテ倒  
ル、モノアリシヲ以テ殊ニ止ムヲ得スシテ退カサ  
リシト云フ  
斯ク不規則ニシテ分捕ノ念ノ外ハ何ヲモ念ハスシテ  
日本兵ハ甚々勇マシク一時間程戦ヒ假令敵兵ニ近ク



一甚々時刻ヲ移スト虽比終ニハ其思ヲ遂ルヲ得タリ  
キ柳々此戦ハ水中ノ事ニシテ身伴意ノ如クナラサル  
ハ勿論ノヲナルニ其衝キ恰モ陸地ノ平野ニ於テ突然  
打テ出テ終ニ其効ヲ奏スルカ如クナリシ但シ其兵卒  
ハ半身水中ニ在リシカ水勢甚々強クシテ之ニ抵抗ス  
ルヲ実ニ大ニ氣力ヲ要セサルヲ得サリシヲ以テ其為  
ス所只ニ好機會ノ来ルヲ俟テ一ツノ巖石ノ後ヨリ他  
ノ方ニ轉シテ到ラン<sub>ト</sub>望ムノミナリシ佐久間ハ炮  
兵數人ヲシテ左ノ石峰ニ登ラシメ其頂ヨリシテ敵  
兵ヲ撃テ退ケン<sub>ト</sub>考ヘシニ因テ直午ニ之ヲ令  
セシカハ海兵凡ソ二十人程其命ヲ承ケ辛クシテ終ニ  
其頂ニ登リタリ柳々之ニ登ルノ事ハ實ニ非常ノ困苦  
ニシテ昨日ノ事ハ何レモ困難ナラサルハ無シト虽モ

之ヲ以テ茅一ト為ス可キ<sub>ト</sub>固ヨリ疑ヲ答レサル所ナ  
リ是唯ニ困難ノ三ナラス危險ハ此上モ無キ危險ニシ  
テ如何トヤトハ斯ル險隘ノ地ニ於テ戦フノ積ナラサ  
リシヲ以テ固ヨリ其用意モ無ク且ツ其石峰ハ至テ高峻  
ニシテ下ヨリ仰キ望メハ盡ク滑カニシテ光澤アル石  
ノ重リ<sub>シ</sub>如ク手足ノ踏ミ止マル處無キカ故ナリ渚水兵  
等之ニ其路ヲ付ケン<sub>ト</sub>セシ時登ル所ノ人々ハ恰モ匍  
匍虫ノ粘着スル世質ヲ以テルカ如ク更ニ人カニアラ  
カ<sub>ル</sub>様ニテ終ニ遠ヒ登ル<sub>ト</sub>始メタリ之ヲ見ルモノ  
大ニ驚キ且ツ思ヘラク必ス此事ヲ成遂ル能ハスト屢  
々疑ヒ止マサリシニ或ハ石ノ間隙ニ隠レ或ハ突キ出  
テタル石ノ蔭ヨリ頭レ隱見出沒セシ後<sub>ニ</sub>終ニ其頂上  
ニ登リ遠シ實ニ喜シキ形ナラ頭ハシ大聲ニテ勇ニシ



クモ叫ヒタリ其響山谷ニ鳴リ渡リ返響暫ラクハ止マ  
ナリナリ此時牡丹人ハ川下ヨリ沢茅ニ迫マラレ既ニ  
相接スルニ及ビシカハ今ヤ其據ル所ノ巖石モ特ニ難  
クヤ思ヒケン忽チ兩三人程其所ヨリ逃走セリ是ニ於  
テ石峰ニ登リ居タル水兵等ハ無ニ無三ニ發砲シタル  
為ノ遂ニ敵兵ハ相集リ一隊トナリ河岸ヲ指シテゾ奔  
竄セリ是ヲ此日ノ勝負ヲ決シタル勦キト云フ可ク此  
地ニ敵兵ノ斃レ在ルモノ實ニ六十人ヲ見タリ此六十  
人ノ内ニ先ニモ言ヘルカ如ク牡丹人ノ酋長アリテ其  
餘ハ重創ヲ被ルモノ數人アリト虽此之ニ付キテ何ニ  
モ言フ可モノナシ我兵ノ内ニハ即死スルモノ六人重  
創ヲ被ルモノ三十人此内全治スルモノ僅カニ一人餘  
ハ皆終ニ死シタリト云フ

石門ニ於テ日本人ノ甚々猛勇ナル小戦争ヲ為シタル  
事情ハ全ク右ニ言フ所ノ者ノ如シ然レ其困難辛苦  
ノ如キハ實ニ非常ノ事ニテ言語筆紙ノ能ク名状スル  
所ニ非ラサルナリ蓋シ戦争果ツルノ後此地ノ地勢ヲ  
捉影畫ト為シ以テ世人ニ此地天險ノ要害此ノ如キモ  
ノナルヲ示ス就テ見ル可シ夫レ日本兵士ノ此地ニ  
於テ其勇ヲ奮ヒ苦戦シテ敵ノ巢窟ヲ衝クモノハ抑々  
幸ナリ如何トナレハ日本兵士ハ他日又斯ル勇猛ノ舉  
動ヲ顯ハスノ機會ヲ得ズ加之土蕃等既此一挙ニ恐怖  
シ日後復日本人ニ對シテ斯ル事業ヲ為サンコトヲ企テ  
サルヲ以テナリ



第二十二回

石門ロヲ渡ル事以下全ク○自身思ヒ出ス下○日  
本將校ノ思慮深キ下○草一ノ發明アル下○害ニ  
遭フ琉球人ノ墳墓○山岳ニ攀ギ登ル困乏ノ下○  
遠方ノ小戦争○恐ル可キ障碍アル下○進行ヲ妨  
ケラル下○<sup>行</sup>ボード<sup>馬</sup>下<sup>柵</sup>内ニ一夜ヲ明ス下  
○兵士ノ品行善キ下

石門ロヲ渡ルノ事ハ假令此ニ一人ノ土蕃モ其通路ヲ  
妨ケサルト虽モ亦困苦ヲ要セストハ言フベカラス此  
渡リハ尚ホ稍々危険ニシテ之ヲ渡ラントスルモノハ  
悉ク其足ノ止ル處ヲ失ヒ忽然トシテ水中ニ倒ルモ  
ノ救ヲ知ラス幸ニシテ身命ノ害ニ及フモノナシト虽  
モ其險ナルト察ス可シ蓋シ此事ハ余ノ到着ノ前ニ在

リ余到着セル時ハ士官ノモ人共石門ノ左側ヨリ巖石  
間ヲ傳ヒホタ経験セサルノ險隘ヲ行ケリ之ヲ見テ余  
ハ其薄氷ノ險ナルカ如ク思ヒ覺エス戦々兢々たり然  
レ元之ヲ渡ラントスルニハ到底此ノ如クセサルヲ得  
ザルカ故ニ尋テ其後ニ從フ其状或ハ手或ハ膝或ハ足  
ヲ以テ巖石ヲ傳フテ行クナリ既ニシテ行ク下半途ニ  
シテ忽チ危険ノ甚レキヲ覺ヘ余ノ不経験ヲ以テハ所  
詮渡リ難キヲ惜リ夫ヨリ又々引キ返シ新ニ渡ル可キ  
可キ所ヲ水ノ再ヒ渡ラントラ試ミタリ斯クテ難ナク  
其川ノ半ニ及フヲ以テ心中私ニ其無難ナルヲ喜ヒ  
第ヲ留メテ待ミ居リシニ先キニ西郷都督ハ既ニ登リ  
タル山ヲ下リテ俄ニ命令アリ余ハ<sup>半</sup>少シク後ニ歸ラン  
ト思ヘリ蓋シ都督ノ命令ハ余ノ危キヲ見ル故人夫ヲ



シテ余輩ヲ救一ト令セシナリ掌舎官ノ士官ハ丁度余  
ノ前ニ在リシヲ以テ都督ノ此命ヲ聞キ余ハ大イニ喜  
ヘリ余ハ前ニ此人ノ立チ居タルヲ以テ為メニ前路ヲ  
妨ケラレ進ムヲ得ヌ中流ニ於テ甚固苦シ然レ氏斯ク  
テ果ツ可キニ非ラスト思ヒ僅<sup>兩三歩</sup>前ニ進ミシニ雨五歩  
流水甚タ深ク勢亦急ニシテ余ノ足カヲ以テハ逆モ水  
勢ヲ支ユル能ハス今ニモ押シ流サレントシテ進退コ  
、ニ谷リシ時幸ニシテ人夫ノ者早ク来リテ余ヲ救フ  
ニ遭ヘリ因テ余ハ此人夫ノ手ニ取り付キ漸クニシテ  
前岸ニ達スルヲ得タリ因テ思フニ先キニ都督ノ人  
夫ニ令セルモノハ全ク余輩ノ為メニシテ此人夫モ亦  
能ク其仁心ヲ奉シテ我ヲ助ケタルヲ感スルナリ右  
ハ甚瑣細ノ事ナルヲ以テ因ヨリ爰ニ記載スルニ足ラ

スト虽モ斯ル仁心ノ深キ人物アルヲ感スルヲ以テ聊  
カ爰ニ附記スルモノナリ

此川ノ流ハ甚タ隘狭ノ地ヲ通シテ石門口ノ外ニ凡ソ  
一里ニ及ッ案スルニ此川ハ社寮ノ北ノ方瑯瑯灣ニ流  
入マルモノナラン既ニシテ余輩ハ此川ニ沿フテ行ク  
下凡ソ流ノ半道ニ及ヒ夫ヨリ左ニ轉シテ再ヒ險ナル  
山路ニ上リタレ氏其前ニ此流ニ沿テ不毛ナル村落ヲ  
過キリタリシガ此村落ハ土蕃ノ住スル所ニアラスシ  
テ支那人ノ子孫ノ住スル所ナリ但シ土蕃ノ住スル所  
ハ是ヨリ遙カニ内地ニテ此村落ノ一ヲ過キタル時大  
イニ發明スル所アリキ土蕃ノ為メ害セラレタル琉球  
人ノ真ノ墳墓ヲ見出タセル是ナリ蓋シ日本人ノ此回  
此地ニ来レル所以ノモノハ此琉球人ノ害セラレタル



ヲ復讐センカ為メニ来レルモノニシテ思フニ日本兵  
士ハ牡丹社ノ入口ニ於テ斯ルモノ、在ラントハ固ヨ  
リ思ハサル所ナラント余モ亦大ニ驚ク所ナリ是ヨリ  
先ニ宮古島ノ人民ハ此地ノ前岸ニ於テ海濱ニ投セラ  
レタリシト聞シカ其海濱ハ此地ヲ去ルテ直徑七八里  
ナレ氏山路ヲ行ク所ハ大抵之ニ倍スルナラント又先キ  
ニ聞ク所ハ海濱ニ投セラレタリトノ由ナレ氏今此墳  
墓ノ碑名ヲ見ルニ其趣意ニ於テ少しモ疑フ可キニ非  
スシテ猶ホ種々ニ穿鑿ヲ為セシニ其證甚タ多ク曾テ  
瑯瑯人ヨリ聞クナリ若レ果シテ此言全ク真ナリト  
セハ其顛末左ニ載スル所ノ如シ難船シタル人々ハ牡  
丹ノ午ニ落タル時誤テ支那人ト思ハレ之ニ因テ牡  
丹人ハ其近隣ノ支那語ニ通スル人民ノ所ニ連レ到ラ

ントテ半島ヲ横キリテ引キ連レタレ氏是レ即チ仁愛  
ノ心ヨリ出テタル事ニアラスシテ全ク償金ヲ得シ  
テ思フテナリ支那人ハ之ヲ償ハシテハ嫌ヒント虽氏  
之ヲ海中ニ投センナハ亦承諾セサリシヲ以テ牡丹人  
等ノ曰ク若シ一百万ノ償金ヲ出タサバレハ此處ニ於  
テ速ニ之ヲ殺サント支那人ハ之ニ答ヘテ是吾等ノ知  
ル處ニ非スト云ヘリト又一説ニ從ハハ此時支那人ハ  
之ヲ殺サンコトヲ手傳ヒタリトモ云フ故ニ其説何レカ  
真ナルヤ未タ知ル可カラスト虽氏其害セラレタル人  
ノ巖骨此地ニ在ルヲ以テ其事情ノ實ナルコトハ知ル可  
キナリ

本日六月十二日午後三時ニ於テ險阻ナル山路ニ登ル  
ヲ始メシカ余輩ハ此岩石多ク所ニ来ル前ニ既ニ溪流



ヲ渡ルモノ凡ソ十二三ヶ所ナリ蓋シ此山ニ登ラント  
スルニ其困難ナルヲ恰モ「マンサル」ト「屋根」ニホテ「ハン  
タンゴ」<sup>各</sup>踊ノヲ踊ランヨリ一層困難ノヲナリ業スルニ  
此山ハ実ニ牡丹島仔角ノ領地ニ入ラントスルノ口  
ナリ其險難ナルヲ何ヲ以テ之ヲ譬ヘンヤ実ニ言語ニ  
盡ス可ラサルノ勢ナリ蓋シ此山ニ上ルノ險難ナルヲ  
ハ四時間ヲ往ルト虽氏僅ニ三里ヨリ多クヲ行クヲ  
得サルヲ以テ其險難ナル実情ヲ察スベシ午後勞五時  
ニ余輩ハ一ツノ高キ山脊ニ登ルヲ得此ヨリ下ヲ見  
ルニ是々深谷ニシテ其機頗ル寂寞タルニ白烟教道其  
間ニ起ルヲ見タリ既ニシテ亦砲聲ヲ聞ケリ此時余輩  
ハ其白烟也志等ハ何人ノ為ス所ナルヤ誰ニ就テ之ヲ  
正サントスルノ道ヲ知ラスト虽氏是果シテ我兵ノ既

ニ彼所ニ至リシヲ明カナリ既ニシテ先キニ土蕃ノ構  
一置キタル茅一ノ堡障ニ至リ之ヲ見ルニ大抵樹木ヲ  
伐リ倒シ或ハ其枝ヲ錯雜編成シテ作レルモノナリ但  
シ之ヲ破リテ通行スルハ甚々難カラスト虽氏若レ敵  
人ノ此處ニ在テ余輩ヲ防止スルヲアラハ之ヲ通行シ  
テ進マシテノ極ノテ困難ナルハ固ヨリ論ヲ俟タサル  
ナリ此堡障ヲ越ヘテ夫ヨリ進マシトセシニ斯ノ如キ  
モノアルヲ救ケ所ナリキ  
是ニ於テ兵卒等ハ一隊トナリ大ニ勇ヲ奮テ此ヲ進行  
セリ然レ氏兵卒等ハ漸ク疲勞ヲ生シ少シク怠慢ノ色  
アリ蓋シ初ノノ考ニハ此日ノ晡時ニハ牡丹社ニ入ラ  
ンヲ期セシガ最早已ニ夜ニ入り復鳥雀ノ声ナク寂  
々寥寥タル深山ノ中央ニ在リテ此地ハ何ノ處ナルヤ



誰一人モ知ルモノナシト虽モ獨り思フニ余輩ハ南ホ  
ルモサノ中央ニ在リト免前スル程ニ時刻モ追々押シ  
移リ既ニ七時モ過キ果テシ頃忽チ又々倭障ノアル處  
ニ至リ人々相押シ其所ニ近ク在ル人々ハ正ニ是朕等  
有奪願ル雜當シ覺エタリ偕此倭障ハ余ノ曾テ此島ニ  
ホテ見タリシ所ノ「バンヤン」樹ノ類ニテ其最モ大ナル  
モノヲ伐リ倒レシヲ踏上ニ横タ、置ク「教百守」ナリ  
故ニ之ヲ打テ越エ行カントスルニ大ニカシ勞シ時刻  
ヲ移ス「大凡一時半許」ナレ氏之ヲ越エ過キタル後チ  
ハ復々斯ル妨碍ノ在ルヲ見サリシナリ斯クニテ種々  
ニ精カラ盡シテ此道ヲ通り過キントシタレ氏今ヤ地  
理不案内ニテ殊ニ夜中ノ事ナレハ所詮之ヲ仕遂ルコ  
能ハス故ニ疲勞シタル兵卒等ハ谷々思々ニ場ヲ占メ

テ此夜ハ此ニ露宿セントシ水モナク食物モナクシテ  
草木密茂ノ間ニ眠ヲ求ム蓋シ兵卒ノ難渋此ノ如キノ  
有様ナリト虽モ此難渋ノ故ヲ以テ喃喃々不平ヲ鳴ラヌ  
モノ、曾テ一人モナシ其品行ノ正レキ實ニ感スルモ餘  
リナルナリ



第二十三回

傍近ニ女備地アリシ事○夜番ノ事○甘藷人保  
 應ニ會セシ事○アミヤ村ノ事○内地ニ住ス種族  
 ノ事○牡丹及ヒ雀仔角ヲ掠略セシ事○南北分隊  
 道ニ迷ヒシ事○諸將校再會ノ事○山中ニ宿セシ事  
 ○速攻ノ結局如何ノ事○琅琊ニ飯俸スル事○行  
 歩甚ク困苦ナリシ事○日本人礼節アル事

道路余リニ困難ナルヲ以テ今ヤ余輩ハ行歩モナシ難  
 ク終ニ此地ニ露降スルヲトテ決シタル氏此地ヲ見ル  
 ニ今三四丁モ辛苦ヲ忍ビ進行スルモハ飲水モ沢山ニ  
 テ食料亦餘リアルノ村落ニ達セシナリ但シ食料トハ  
 他物ニアラス即山園ニ作レル甘藷ニシテ隨意ニ之ヲ

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



堀り食フヲ得シナリ只都督西卿ノミハ其左右ノ人兩  
三名ヲ從ヘ能ク此村落ニ至リシト云フ蓋シ西卿ハ八  
時ニ近キ頃此兵ノ前部ニ至リ固ヨリ剛強ノ人ナレハ  
其艱苦ヲ忍フモ亦衆人ニ勝ルヲ以テ餘人ハ後ヨリ  
来ルヘシト思ヒ夫ヨリ猶ホ進行シテ幸ニ良地ニ到シ  
ナリ思フニ西卿ト云モ同ク是レ人ナレハ此險難ノ道  
路ニ於テ豈ニ其艱苦ヲ覺ヘカルコトアラシヤ余ハ之ヲ  
某人ニ問ク此時西卿ハ飢渴甚クシキヲ以テ竊カニ此  
山圃ノ甘藷ヲキツカテ掘リ採リ啗ヒ且シト云フ然  
レモ氏ノ行ハ違カニ其從者ヨリ優リシト斯クテ西  
卿ハ其地ニ於テ餘人ハ何等ノ故ヲ以テ今ニ此地ニ  
来ラカレヤト相俟ツコトク終ニ困苦ノ餘リ覺ヘス  
眠リヲ催シタリト云フ察スルニ此餘ノ人々ハ今少

シニテ斯ル処アリト知ルハ如何ニ困苦ニ迫マリシ  
ト云モ一層氣力ヲ勵マシ抔喜シテ此地ニ到ル可シ事  
テカ三四丁ノ道ニ堪ヘカランヤ然レモ不知案内ノ不  
幸ヲ以テ困難ノ露陣ヲ張リシナリ  
今夜幸ヒシテ天氣晴朗ナリシモ氣候甚ク寒冷ニテ殆  
シト肌膚ニ迫リシ是レ晴天ノ後山上ノ氣候ノ常ナ  
レハナリ斯クテ人々困苦セシヲ以テ頻リニ眠ハ催セ  
トモ屢々驚キ覺ルレカ故ニ甚ク熟眠ヲ得カリシナリ  
抑々此夜ノ景況ヲ語ランニ此地險峻ニシテ巖多ク深  
藁編ムカ如クニシテ實ニ難ヲ立ツ可キノ平坦空地ヲ  
見ス故ニ此進行ノ兵士等ハ凡ソ二丁程長ク連リテ夏  
夕杖キ山脊ニ於テ居並ヒタリ但シ此山脊ハ近日マテ  
樹木稠密ナリシカ今ハ伐ラレテ徑程ニ亂レ倒レ又此



山脊ノ兩側ハ殊ニ巖嶙峭トシテ禁ニ下ラントスル  
丁固ヨリ一大危險ナリ故ニ之ヲ下テ從テ便利ノ地ヲ  
求メントスル丁甚ク難シ斯カル有様ナルカ故ニ敵人  
ノ不意ニ襲ハンコト防ク丁亦得難ク一ツノ柵ヲ設ク  
ルコトモナク又一人ノ番兵モ置カサルコト固ヨリ許サ  
ルヲ得ナリシモ只兩三名ノ心アル人自ラ任シテ万  
事ヲ注意シテアリシ此夜第一時ニ及テ始メテ月光ヲ  
見夫ヨリ雲霧ヲ吹散ニ晴レタリト云モ幽谷深森ノ  
地ハ暗淡寂寞真ニ肌骨ヲシテ寒ムカラシメ兵卒等ハ  
既ニ眠ヲ求メ或ハ樹根ニ踞坐シ或ハ枯木ニ倚リ或ハ  
巖石ノ上ニ腰ヲ掛テ或ハ短艸ヲ藉キテ卧蓐ニ代ヘ  
或ハ些細ノ巖穴ニ伏シ或ハ足ヲ伴シテ卧スモアリ其  
状思ノマ、ニシテ寢ニドル辰ノ著セルコトビシトビ  
ト云フ局ニ見エタル画像ノ如キモノ數人アリ

善シ日本人ハ西洋人タル余輩ニハ如何ニモ不愉快ニ  
テ所詮為シ能ハサル位置ニテ休息スルコト得ルト云  
モ全ク勤メテ為スニハアラヌ固ヨリ斯ルコト平生ノ  
習慣ナルヲ以テナリ亞未利加人タル余輩ノ如キハ多  
少ノ勞ヲ費スト云モ今少シ復ナル地ニ移ラントテ欲  
シ勤メタリシカ先ニハ誤テ早ク他人ノ此所ニ在ルト  
思ヒシ山脊ノ家モ高キ所ニ於テ一ツノ稍ニ復ナル所ヲ  
得タリ此所ハ四方六尺許ノ所ニシテ石多ク甚ク高低  
アルニ得ニ此所ニ於テ余輩ハ眠リテ求メシカ夜モ更  
濁クテ衆星漸ク光ヲ減シ寒氣モ亦稍甚キ固勞モ亦薄  
ラキタリシト云モホレモサノ地ハ巖絶壁ノミ多ク  
進行甚ク困難ナレヲ以テ思ヘハ愈々真ニ好マシカラカ

九  
正  
官

九  
女  
官



ル所ナリト甚ク愚痴ニ似タレ凡此時殆ント歎息シテ  
 程ナク眠リニ就キシニ余輩ノ前ニ於テ初ニ草莽ヲ排  
 シ梢々トシテ望音ノ響アリ且ワ濛濛タル人影ノ漸ク  
 余輩ニ近ツキ来ルヲ夢ノ如クニ覺ヘ忽チ驚キ覺シテ  
 我ニ後レハ是即チ華人之我ヲ伺フモノニハアラスシ  
 テ我一士官ノ自ラ巡見スルニテアリケリ因テ一タヒ  
 ハ驚キタレ凡士官ハ更ニ之ヲ知ラス莞爾トシテ笑ヒ余  
 輩ノ傍ニ来リ坐シ閑々他事ヲ語り且ツ談シ大ニ此夜  
 ノ困難ヲ慰メタリ 且ツ懐ヨリニ本ノ巻袖中ヲ出シ余等ニ年一政垣セリ余ハ  
 固ヨリ之ヲ嗜マカレ凡余ハ之ヲ嗜ムヲ以テ目ヲ吸ヒ  
 既ニシテ天明ニ至ルニ天氣快晴温又一點ノ雲ナシ餘  
 リニ好天氣ナルヲ以テ又近日ノ雨ヲ醜サンコトヲ恐ル  
 ナリ斯クテ猶殘リタル寨柵ヲ亦チ越スルコト甚ク困  
 難ノ事業ナリト夢ニ之ヲ遂ケルハ後々ハ前ニ云フ所

ノ村落ニ至ルニ復妨碍アラカリシ是ニ於テ一月漸ク  
 饑餓ノ苦ヲ免ル可キノ所ニ至リシニ因テ異地ノ枯亦  
 枯枵ヲ拾ヒボク禁ク凡ツナニ之所夫ノ甘藷ヲ掘リ調  
 理シテ之ヲ食ヒ始メテ饑難ヲ脱シタリ此地ハ何レノ  
 地ナルヤ更ニ余輩ハ知ラサレハ兵卒ニ測シニ兵卒等  
 モ亦之ヲ知ラスト云ヒシ斯クテ此村落ヲ見ルニ此地  
 ニ住スルモノ一人モナク僅ニ雞豚ノ數足ラ見シ程ナ  
 リキ是ヨリ先キ余輩ハ海岸ノ殖民地ヨリ先導者數人  
 ヲ遣レ来リシカ此人々モ大ニ困窮セリ此人ニ就キ此  
 地ノ名称ヲ問フニ此地ハ牡丹ニモアラス篋仔角ニモ  
 アラスト云ヒシ此案内者ノ言ハ曖昧ニ似タルカ如ク  
 ナレ凡全ク彼輩ハ之ヲ知ラサルニ出タレナリ後ニ之  
 ヲ其地ノ住民ニ問クニ乃アリヤト云ヘ凡所ニテロポト



ノ小属地ナリ假令ゴプトヨリ大ニ隔ルニ全ク然リト  
云フ蓋シ此地ハ蕃族ノ堡砦ニ箇ノ間ニ在テ何レノ  
堡砦ヨリモヤント十五町許アリ然ルニ此地唯リ平  
坦ナルハ莫ム可キナリ余聞クアミヤ人民ハ南平  
島ノ各郡中ニ在リテ其性溫和ナルカ常ニ他族ノ  
為メニ駆役セラレ因ツ大ニ稟難蒙ラ受クルト雖  
モ唐ラ之ヲ以テ急トセザルハカノ微弱ナルニ因ル  
ナリ(一介ハ百六十七年セテラルルジヤドル氏嘗テアミ  
ヤ人民ノ勇丁ノ數ヲ算スルニ二百四五十人アリト云フ)  
余モ嘗テ某酋長ニ屢ニ相會セシカ其人年既ニ老ヒ性  
質頗ル溫和ナルナリ惟モ羊ノ如シ其両耳朶ニハ孔アル  
ナリ耳環ノ彼ノ支那ニ通シ居シカ其始メハ甚ク不  
都合ナリシト又此人ハ種々ノ強辯ヲ以テ蕃族ノ酋長

等ト爭論シ大ニ和睦ノ策ヲ謀メタリト云フ余ハアミ  
ヤ人民ハ必ク爾若ク受クル者ナリト思ヘリ此人今此  
地ニアリシナリハ大ニ其地理モ分明ナラント思ヘル  
ナリ

抑此アミヤノ景況ヲ尋ヌルニ此地石山連亘モテ西ニ  
赴キ遠ク海面ヲ望ム可シ臆測ヲ以テ考フルニ直徑西  
海岸ヨリ大約七里ニシテ東海岸ヨリハ五里ナリ而シ  
テ海面ヲ抜クナリニ三ノ尺ノ間ニ在リ土地甚ク寂  
莫ニシテ人家ハ僅ニ十二ニシテ其結構頗ル粗ニシ  
テ大抵地ニ八本ノ柱ヲ立テ上ニ縦横ノ梁ヲ渡シ之ニ  
艸葉ヲ葺キタルモノナリ余等ハ其中ノ一戸ニ於テ見  
事ニ製シタル烟艸數包及ヒ雞豚數頭アルヲ見タリ然  
レ此是等ノ物ハ其位人ノ用ニ奉ヘ置テ難ク常ニ牡



舟人ニ奪ヒ取ラシ、事ナラン其近傍ノ畑ハ重ニ畑  
ト甘藷トヲ作り其他ノ物ハ更ニ培養スルノ様子ナリ  
又田圃ニハ何メ用ニ供マレルヤ知ラサレヒ稻ヲ植エ  
ヲ見シナリ  
諸又此朝食ヲナシ終リテ各六十人許ヲ二組トシ敵ノ  
動靜ヲ窺ハシカ爲メニ一ハ北方ニ向ヒ一ハ南方ニ向  
テ発遣セラレタリ斯クテ北方ニ行キタルモノハ大凡  
一時程ニシテ一ノ大村ニ達シタリ人家四十戸ナリ可  
ク果然攝ハタク日光ヲ以テ乾カシタル布或ハ石ヲ以  
テ作りタルモノニシテ屋背ハ即チ藁ヤ段ノ類ナリ因  
テ直チニ此地ハ牡丹人ノ住ム所ナリヲ知レリ是又案  
内者ノ力ニヨリ知ラル夫ヨリ次チニ其地ニ入テ之ヲ  
見ルニ悉ク破壊シテアリタル我兵士等ハ猶ホ進ミ

テ其地ニ近ワカントスルハ俄カニ深義山林ノ間ヨリ  
砲撃セラレ我兵兩三人創ヲ受ケル者アリシカハ我ヨ  
リモ亦俄カニ之ヲ砲撃スト虽モ固ヨリ敵人ノ在ル所  
ヲ知ラコレハ乱発向テ所ヲ知ラサルナリ然レモ我兵  
ヨリ之ヲ打撃スルニ及ンテ敵兵ハ砲撃ヲ全ク止ケル  
至レリ因テ此地ヲ焚燒シ我兵等ハ其近村ニ陣シタリ  
南方ニ向テ発シタルモノハ未夕迄カニ進サレ其提督  
赤松ノ穿升タル縦隊ハ使者ニ相會セリ是レ前ニ発シ  
タルモノニシテ昨夜ハ大抵死々ヲ徘徊セシ所ノ者ナ  
リ此兵ハ本日ニ日ヲ午後第二時漸ク篋仔角ニ達シタ  
リシカ此地ニ入ラントスレ時不意ニ敵人ハ一個ノ堡  
障ノ内ヨリ砲撃キシカ爲メニ我兵即死スル者三人負  
傷スル者二人アリ残レ氏蕃族ハ直ニ其堡障ヨリ驅逐



セラレ終ニ奔竄セリト云モ察スレハ一人モ損信ヲ蒙  
ルモノナシ斯クテ我兵ハ其家屋ヲ焚燬シ此地ニ通  
ラントセシカ四面皆山岳ニテ南ニ向キノ地理ナラカ  
ルヲ知り終ニ遊クテ篋仔角ノ人家ヲ去ルテ凡ソ一  
二丁ナル一丘陵ノ頂ニ陣ヲ結ビ第五時ニ於テ此縱  
隊ノ一組ハ都督西郷ノ兵ト相會セント思ヒ此地ヲ登  
シタレ凡道路險難ニシテ且ツ先導者ノ道ヲ誤ルヲ  
以テ終ニ鑄磨スルノ後漸ク天明ニ至ル頃之ヲ見シ  
ハ石門口ノ底ニ達セシナリ夫レヨリ歩ヲ飯シテ  
中軍ニ相會セントシ終ニ正午ニ至テ初メテアミヤノ  
村落ニ達シタリ

此時ニ至ルト云モ昨日拂曉ニ於テ内地ニ向テ進發セ  
シホシカニ在ル兵士ヨリハ一切消息ナキヲ以テ更

ニ兵士數人ヲシテカノ及テ限リ其地ノ景况ヲ探ラシ  
且ツ牡丹或ハ篋仔角人ノ為メニ廠モ便ナリ村落ヲ焚  
燬スルカ若シクハ其傍塔置ク可キカ能ク其軍ヲ伺ハ  
シメンカ為メニ登セリ此兵ハ彼地ニ到リ終ニ之ヲ焚  
燬スルト云モ更ニ谷將官ノ將ヲ見ル兵卒ノ形跡ヲ見  
テ又都督西郷ヨリ遣リタレ使者モ亦不知案内ノ者ナ  
ルカ故ニ此アミヤニ於テ今一夜ヲ明カシ且後他ノ策  
路ヲ相決セントセリ蓋シ此兵等ハ既ニ糧食ヲ帯ビシ  
上山路ノ險ナルヲモ顧リテ又能ク天幕敷張及ビコ  
ホルニモルキユル砲ヲ或キ来レリ回テ此砲ヲ以テ谷  
ノ兵士ニ此地ニ在ルヲ知ラセシカ為メニ号砲數發ヲ  
放ツト云モ遂ニ黄昏ニ至ルマテ應答ナシ偶ニ我兵十二  
三人ノ来ルニ會シ其兵等ノ同クニナイヨリ牡丹マラ



ハ道路甚タ險ニシテ数日ヲ經ルニアラカレハ到リ難  
シト云フ却テ將官谷ハ二日ノ黄昏ニ至ルマテニ  
ノ地ニ達スルヲ得ス之ニ加ルニ其兵等屢々蕃民  
ノ為メニ襲撃セラレ幸ニ死傷ノモノナシト雖モ大  
ニ困苦ヲ經テニナイニ到リ見レハ一婦人ノ童子ヲ携  
フルニ會ヘリ曰テ之ヲ引キ函メ次日ノ案内者ト為  
ントセリ然ルニ婦人ハ逃去シ獨リ童子ノミ函リシカ  
此兒ハ甚タ幼稚ニシテ案内者ニ用ユルヲ得カリシナリ  
是ニ於テ將官谷ハ直ニ其兵ノ過キラ分テ之ヲ石門口  
ニ遣ハシ後ノ命令ノ下ルヲ俟タシメ其餘ノ兵ヲ以テ  
蕃地ノ中心ニ入ランカ為メニ直道ヲ拂ハシム  
斯クテ三日ノ夜モ去テ次日ノ曉天ニ將官谷ハ到  
着セリ是ニ於テ相會後シ終ニ決スルヲ左ノ如シ凡

ソ内地ニ在ル蕃族ノ村落ハ悉ク之ヲ焚掠シ土人ヲ驅  
テ山谷ノ間ニ逐ヒ出ス可ク而シテ入相忘分隊ヲ此地ニ  
函メ且ツ要路ヲ守ラシメ其中軍ノ隊ハ社寮ニ止メ東  
海岸ニ住スル一二ノ種族殊ニペイグ族ハ密ニ牡丹社  
ニ響応スルノ由ナレハ更ニ之ヲ伐ツノ準備ヲ為ス可  
シト決シ此旨ヲ軍中へ傳ヘケルニ何レモ異議ナク之  
ニ從ヒ獨リ薩摩人ノミ之ニ因ゼスシテ曰ク願ハク  
ハ我輩ニ許シテ敵人ヲ芟除シテ其根ヲ絶タシメヨ其  
策如何トナレハ僅カニ兩三名ノ兵士ヲ以テ之ヲ一組  
トシ深山草莽ノ間ニ立セ入りテ悉ク蕃族ヲ逐ヒ出  
シ日觸ル者ハ殘ラス之ヲ殺戮シ其族尽キタル後ニ  
之ヲ止シノミト蓋シ此事ニハ衆人從フモノナシ程ホ  
其右ニ決シタル者モ終ニ良策ニアラカレカ如ク見エ



タルヲ以テ茅九時ニ於テ同ク敗陣ノ一ヲ始メタリ是ヨリ先キ險阻ノ寨柵ハ嘗テ官軍ノ配下ニ働ク所ノ人夫ノ一隊ニ依テ悉ク之ヲ破ラレ通路甚ク易シト云モ猶ホ兵士等ハ悉ク疲勞饑渴ニ迫マルヲ以テ極メテ辛苦ヲ覺エタリト

此時全ハ堪ヘ忍ビテ歩行セシ時ヨリ最早二三里ニ至リシカ大ニ非常ノ難苦ヲ覺エタレ凡テ幸ニシテ或者ノ深慮ヲ蒙リ此艱苦ヲ凌クヲ得タリ抑此ト如何トナレハ此時創傷ヲ被リタル兵卒等ハ怪我人ヲ載スル臺ニテ隊人トモナク余ノ側ヲ過キシカ何レモ其上卧シ苦痛ノ為ニヤ敢テ一語ヲ發スルモノナカリシニ其内一人一腕ヲ挫傷シ胸部ノ二皮肉ヲ劈カレタルモノアリテ挑床ノ上ニ正坐セシカ蓋

シ此位置ハ此人ノ為メニ余モ痛ヲ忘ル、カ故ナラシカ備此人ハ余ノ一步ハ高ク一步ハ低ク緩々漫々トシテ甚ク見苦レシク歩スレテ見テ俄カニ其嚙夫ヲ呼ビ至メ余ニ問フテ曰貴兄何ノ為メニ然ルカト余答テ曰不幸ニ兩足ヲ挫傷シ是ヲ以テ然ルナリト彼又曰貴兄ノ損シタル靴ヲ捨テ我レ一足袋ト一足ノ草鞋ヲ持テ故ニ之ヲ貴兄ニ呈セントス我今如此ニ復ク之ヲ用ユル所ナシト精神自若トシテ其聲爽カナルヲ聆モ致瑰花ノ美床ニ卧シタル人ノ如ク思ハレタリ此時余ノ喜ハシキト言可カラス此人ノ此ニ在リシ間ハ余モ亦斂立シ暫時苦痛ヲ忘ル、ニ至レリ

善シ日本ノ源切ナレトハ余ニ感スルモ餘リアルトニテ前ニモ屢々之ヲ記載セリ其石門口進軍ノ時ニ西郷



ノ余ノ為メニ懇情ヲ尽セル<sub>レ</sub>ノ類是レナリ然ルニ都  
督西郷ハ此回モ亦余ノ処ニ来リテ向テ乘リタル<sub>レ</sub>ボラ  
ンク<sub>レ</sub>ヤ<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>實<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>ニ与ニ此レニ乗レト言ヒシニ余ハ実  
ニ歩<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>シ難クアリシト云モ餘リニ只恭ナルヲ以テ強  
メテ之レヲ固辭セリ又此日ノ夜ニ入りテ余ノ前夜一  
箇ノ堡障ニアリテ余輩ノ眠リ難キ時參謀佐久間  
ハ已レノ餓渴ヲモ顧ミス<sub>レ</sub>トビスケ<sub>レ</sub>ト<sub>レ</sub>一包及紅葡萄酒  
酒等贈リタリシカ此物於<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>ニ殘ル<sub>レ</sub>ヲ以テ  
凡<sub>レ</sub>此堡障ヨリ其村マテハ二里許アルニ人ヲ馳セ  
テ之ヲ持テ来ラシメ<sub>レ</sub>之ヲ余輩ニ与ヘタリ斯レ懇情  
ノ切ナル<sub>レ</sub>ハ所詮<sub>レ</sub>聖<sub>レ</sub>和<sub>レ</sub>加<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>等ノ能ク及<sub>レ</sub>テ所<sub>レ</sub>ニ非  
ラナ<sub>レ</sub>ナリ蓋シ余輩ハ此蕃地ニ在<sub>レ</sub>テ嘗テ一日モ日  
本人ノ善良ナル品行及ビ思慮深キ<sub>レ</sub>ヲ感ゼ<sub>レ</sub>ナ<sub>レ</sub>日

ハアラナルナリ思フニ日本人ノ性質ハ蓋シ天然ヨリ  
出ラタルモノカ余ノ筆頭ヲ以テ其状ヲ録シ明細ナ  
ラシム<sub>レ</sub>ル<sub>レ</sub>ヲ<sub>レ</sub>實<sub>レ</sub>ニ能ハカ<sub>レ</sub>ナ<sub>レ</sub>リ



芽二十四回

○安息○結果○酋長ト芽三四ノ會議○ホルモサ  
人ノ婚禮○婚姻ノ儀式及ヒ酒宴ノ歡樂○陣營ニ  
酋長ノ来リシ事○亦昔其地位ヲ改メシ事

兵卒ハ陣營ニ歸リシ後数日ノ間休息慰勞セシカ最早  
大抵兵器ヲ用ユルヲモ無ル可シ半歳モ費ス可キ事業  
ヲ一ヶ月足ラヌニシテ切ラ奏セシテ驚クニ堪ヘタリ  
初ノ東京ニ於テ議定シタル計策ニハ夏時内地ニ浸入  
スルヲヨム曾テ思慮セザリシト虽モ最初ノ二三ヶ月  
ハ未タ敵ノ計策状況ヲ知ルヲ能ハサルヲ以テ先ツ海  
岸ニ營障ヲ建築シ熟蕃ニ相親ミテ利益ヲ得ルニ如サ  
ルトレ且ツ人力ノ能ク非常ノ熱度ニ堪ルヤ否ヤヲ思  
慮セシナレ正右等ハ全ク無用ニ属シ芽一週間ノ後ハ

Blank page with vertical red lines and faint bleed-through text from the reverse side.



生蕃ノ我軍ヲ襲ハサルヲ照然タルニ至リ土功ノ事モ  
 ホク中廢ノ形ニ至レリ五月廿二日前キ不意ノ小戦ハ是  
 唯ニ牡丹人ノ日本軍ニ對敵ス可カラサルノ徴候タル  
 ニ過サルノミ然ルニ日本兵卒ハ大イニ憤怒ヲ起シ總  
 軍ヲ進ムルニ非サレハ又能ク之ヲ鎮定スルヲ能ガル  
 ニ至レリ日中炎熱ノ酷ナルヲ未タ曾テ日本ニハ有  
 サル所ナレト又忍フ可ラサルニ非ラサルハ稍々夜中  
 ノ冷氣ナルニ因テ生活スルカ故ナリ又最初ヨリ目的  
 セシ所ノトモ漸ク結果ヲ見ルベク牡丹人及ヒ其徒  
 ヲ弑シ又無罪ノ漂泊人ヲ殺害スルヤ其罪ノ甚々輕カ  
 ラサルヲ説諭スル等ノ事件ハ大概既ニ行ハレタルヲ  
 以テナリ  
 五月二十二日支那官吏ノ瑯瑤ニ在リシ者ハ大ニ日本

ノ此遠征ノ趣旨ヲ贊稱シ又深ク之ヲ慰勞セント虽モ  
 寧ロ其結果ニ至テハ甚ク危疑ニ感テ言フニハ則チ曩  
 者我政府政府那臺灣蕃族ヲ從屬セシメント欲シ大イニ  
 盡カレタレト果サヌ十二年ノ星霜ヲ空レク無益ノ戦  
 闘ニ費シタリト故ニ牡丹人ハ以為々天下ニ敵ナシト  
 而シテ鄰族等モ地勢ノ峻阻ナルヲ以テ到底此遠征ノ  
 成功ヲ覺束ナク疑ヒタレト是レ皆々笑フ可キノヲニ  
 シテ上陸未タ三十日ニモ滿ズレテ蕃族所有ノ村落ハ  
 勿論緊用ナル堡寨ハ盡ク破滅ニ係リ住民ハ京野ニ奔  
 逐シテ終ニ其地ハ日本人ノ手中ニ落タリ蕃族等若シ  
 日本人ヲ攻撃スルニ急ナラスレテ其領地ニ近ツクラ  
 得セシメハ此ノ如キ有様ニハ至ラザリレナリ何トナ  
 レハ之カ為メニ日本軍人ハ甚ク憤怒シタルヲ頻ニ深



入攻伐ノ念ヲ起サシメ終ニ唯速カニ其功ヲ奏セン  
ヲノミ企望スルニ至ラシメタリ然レモ蕃族等苦シ六  
月一日ノ進軍ニ先ジテ後悔ノ真情ヲ顯ハサハ實ニ兵  
器ヲ用ジテ萬事平穩ノ處置ニ及ヒシヲハ決シテ疑ヲ容  
レサルナリ今ニ當リテ蕃族ノ頭上ニ落キントスル所  
ノ一大危難ヲ避ケントスルニハ先ツ日本ニ對シ信ヲ  
得タル保証人ヲ選ビ以テ今後ハ必ス暴惡ノ所行ヲナ  
サズ且日本入ハ其違約センヲ危懼スルカ為メ又之カ  
預防ノ法方ヲ承諾ス可キヲ月下蕃族ニ於テハ最モ急  
務トスヘキ所ナリ  
重要ノ事業ハ未タ完全セサル者甚々多ク兵事ハ唯  
些少ノ分隊ヲ各所ニ送りシノミナリシカ熟蕃ノ酋長  
等ト芽三四ノ會議ヲ行フタリ蓋シ敵ノ暇走スル者ヲ圍

繞セシカ為メ東岸ニ陣營ヲ設立セントシテ六月六  
日通詞人ジヨンソン氏及ヒ案内者ミヤトヲ遣テ酋長  
等ヲ占ハシメ同日夕酋長等軍装シタル從者二百余  
人ヲヒキサテ社寮ニ着セリ之ニ因テ熟々熟蕃ノ形情  
ヲ視ルニ未タ日本人ノ趣意ヲ了解セズ及テ之ヲ猜疑  
セシ者ナリシヲ昭々キタリ酋長等ノ到着ヲ日本官吏  
ニ通達セサル前ニジヨンソン氏切ニ酋長等ニ説諭シ  
テ其從者ヲ帰サシメシテ望ミケレハ酋長等暫時躊  
躇ノ後漸ク其意ニ從フタリ是レ即チ從者ト謂トモ  
凡其負教ノ多クシテ戰者ノ如クナル故ニ日本陣營ニ  
近ツクニ甚々妨ケアルヲ以テナリ既ニシテ從者ノ去  
レバ酋長等ハ頻ニ其身ヲ危フミ速カニ會議ヲ遂ケテ  
夜中其村落ニ皈ランヲ願ヘリ是ヨリ前ニ夜中會議



ヲ行ヒシコト有リシヲ以テ首長等ハ是レヲ究竟ノ例ト  
リトシテ之ニ從ハントシタレド日本ノ人ハ故アルヲ以  
テ遂ニ此夜會議ヲ開カサルヲ以テ首長等モ餘議ナク  
之ヲ承諾セシト云フ疑フコト大方ナラス然夜不眠シテ  
相警衛セシト云フ

此時ニ當テ社寮ノ士人ハ大イニ歡樂ヲ極メシコトアリ  
其次弟ハ昨今二三日ノ間ニヤノ家ニ於テ緊用ナル誓  
姻ノ禮ヲ行ヒ新婦ハ老酋長ノ子ニシテ而シヤカ姪ト  
リ女ハサワリノ生レニシテ亦昔カ從屬ノ娘ナリ此ニ  
族内地者ト海岸ニ住ム支那人ニ似ルノ婚姻ハ常ニ屢クア  
ルコトナリ余ハ嘗テ聞キシニ諸族ノ婦人ハ此半島ノ内  
ハ何地ナリトモ轉移住来スルコト許サレ男子中ニハ  
曾テ交際ナキ地ト云モ又亦然リト著レ昔ヨリ此ノ如

ク婦人ノ交際相通セシトセハ各族互ヒニ相惡ニ相疑  
ヒ容貌凡俗天性ノ相隔タル甚ク驚クニ堪ヘタリ土人  
ハ容貌ト生計ノ凡トハ全ク支那人ニ異ナルコト遠ク其  
性質ノ最モ及セシ者ヲ言ハ、西海岸ノ民ハ大低負欲  
ナレトモ山中ノ民ハ寡欲ナリ且ツ物ヲ獲ルニ勉メヌ  
又山中ノ蕃民ハ残酷猛惡ニシテ無智ナルト支那語ヲ  
用エル種族ノ開化ニ近キトニ係ハラヌ概シテ云ヘル  
山中ノ者天性ニ於テハ却テ勝ル所マリキ彼等ノ讎怨  
スルヤ公ニシテ包マスト云フ支那人ハ之ヲ秘密ニシ  
テ益シ之ヲ養ヒ偽計狡術至テ多シ加之山中ノ民ハ一回  
人ト盟約セルモノ又決シテ之ヲ破ラヌ其婚姻ニ付キ  
余ハ甚ク信スルコトナリ海岸ノ民ハ屢其妻ヲ内地ニ需  
メ内地ノ民ハ及テ之ヲ忌ミ其類族中ニ婚センコトヲ欲



スト而シテ内地ノ婦女羨シ外縁ヲ許サルレハ其父々  
ル者幾許ノ金錢ヲ受ルヲ法ノ如クスト云フ  
其ハ此婚礼ヲ以テ甚々奇事トシ此事非以ハ僻見ヲ難  
シトスル所ナリ如何トナレハ土人詳細ニ其文際ヲ探索セラルハ欲セサレハ詳細ニ當日其期時  
ヨリ早ク社寮ニ到レハ如何ニモ前夜ノ混雜ヲ表スル  
者アリテ歡喜ノ走モ亦稍ク消滅セシモノ、如レシヤ  
カ門前ハ其ノ屋上ヨリ對家ノ屋上ニ渡シタル遮帳ニ  
テ覆ヒタリ諸道ニハ小机上ニ宗教表号ヲ置タルヲ以  
テ鎮守シ屋内礼拝所ノ前ニハ大イナル赤キ燐燭アリ  
テ其明尚ホ赫然タリ中庭ニモ川外ノ如ク遮帳ヲ以テ  
覆ヒ年月ハ空懸ナル所モ此時ハ総テ机子ヲ併ハ其上ニ  
響應ノ器具盡ク備レリ又廉製ノ樂器則チ銅鑼鏡鉢大  
鼓支那笛提琴ノ類アリテ稍ヤ客情ヲ慰ルニ足レリ山

地ノ人ハホ夕眠スシテ在タレトモ當地ノ人民ハ既ニ  
已ニ深夢ノ中ナリケリ  
斯クテ半時間ヲ過ルヤ一同群起シ齊シク外舎ニ就テ  
五六名ノ婦人カ整理セシ朝食ヲ採リテ之ヲ食ントセ  
シニ酋長ノ此ニ在リシヲ以テ其意ヲ果ス能ハサリシ  
ニヤハ屢シシヨソシラ外ニ呼ンテ當日ノ祝儀何時ニ  
畢リ暴客何時ニ退散スベキヤヲ問ヒ各人初メハ余ヲ  
疑ヒ敢テ新婦ヲ見ント欲シ来ル者ナリトセシニ余ハ  
固ヨリ其意アルニアラザレバ漸ク余ノ意ヲ悟リ得テ  
疑ヲ解キシカ故ニ家内ニ入り新婦ニ接見センヲ勸ム  
是ニ於テ余ハ畧服ヲ着セシ俣ニテ直ニ室ニ入りシ時  
新婦ハ家中上好ノ室ニ在リテ家ノニ老妾寢床ニ睡卧  
シ其側ニ着坐セリ亦夕結契配合ノ時刻ノ到ラサルヲ



以テ新郎ハ猶ホ親伴ノ居ル室ニ入ルヲ許サレズ遙カ  
隔タル所ニ白服ヲ着シ甚タ憂悶スルモノ、如ク頭ヲ  
抵レテ吟行セリ新婦モ亦白服ヲ着シ頭ニ銀環ヲ戴キ  
環ヨリ水晶ト光澤アル金屬ヲ以テ製シ四寸許下シ  
タル房ノ如キ裝飾ヲ以テ顔ヲ蔽ヒタレハ之ヲ窺視ス  
ルヲ能ハズ余ハ丁度新婦ニ對シテ坐シケレバ新婦ハ  
直キニ起テ菓子ヲ盛タル盆ヲ執リ身ヲ屈シ之ヲ余ニ  
進メシ時ニ其顔ヲ露セリ顔色甚タ美麗ニアラズ殊更  
ニサロリニ入ヲ遣リ探索シタル程ノ者ニハ非ザル  
ナリ然レド容只快爽ニシテ能ク其身体ノ活潑ナルニ  
適セリ此女ハ頰ニ刺紋アラズ善地ノ美女多クハ頰ニ  
刺レテ衆ニ別ツト云フ

却洗未嘗ノ商長等既ニ朝餐ヲ喫了セシ後ニ日本官吏

ハ嘯来セシカ蓋シ是ヨリ前クケライ及カアタンノ兩  
商長ハ自ラ来リテ直ニ都督亞卿ニ面見シテ其臣屬ノ  
為メニ條件セシテ請ヒ即チ其主意ハ兩長ノ臣屬ハ  
常テ日本臣ニ對シ言ヲ加ヘシテモナク且テ保護ヲ受  
災害ヲ免レンコトヲ述ヘシカハ官吏ハ之ヲ厚遇シ其條  
件ニ就テハ適宜ノ調査ヲ遂ケ能ク思慮センコトヲ約セ  
シ等ニテ官吏ハ今此ニ来ルコトノ確証セシナリ  
此會後ハ多クノ時間ヲ費ヤカスニテ終リ當時ノ主務  
ハ即チ嘗テ約セシ護旗ヲ頒布セシコトヲ以テ以テ土  
人ハ敵ノ来テ攻撃スル時ニ防戦ス向キカ為ナリ其  
旗章ヲ受ケシ者ハカリリノ商長亦昔マンワイノ商  
長カリルトイパコルトノ商長シンジヨウロプトノ  
商長ルウリンリンドルマシノ商長ビナリタイラフク

如正官

長官



ノ商長三十及コワルツノ商長ハ代人ヲ来タセリコワ  
ルコトノ商長ハ尚ホ孤疑シテ自ラ来ラス大ニ其名を  
損シ其代人モ亦怯懦沈黙シテ能ク言ハサリシナリ次  
ヒテ又敵對スル蕃族等ノ永ク固守シテ挑戰スル時進  
撃ニ必用ナル出發所ヲ増加セシメ為メ東嶺ノ地數畝ヲ  
一時占有スルヲ許諾スルヤ否ヲ問ヒシニ此問題ハ真  
ニ悦ヲ同意ス向カラサレノトナレトモ懇々論議シテ遂  
ニ少シモ苦情ナク承諾シ乃ケ地料ヲ与ヘント告ケタ  
レトモ商長等ハ之ヲ受ルヲ欲セナリシ(余ノ先ニ述ヘシ  
如ク利ヲ得ルノニ意ヲ注セタルハ則ケ其天質ナリ)此  
クテ商長等ヲ陣營ニ導ヒテ都督ノ在ル帳幕ヲ見セシ  
メント通知セシニ商長等ハ意外ノ事ナリテ以テ大ニ  
驚怖セリ蓋シ商長等ハ此時猶ホ日本人ノ好意ヲ疑フ

ヲ信セナリシト明カナリシカ其畏懼ノ状ヲ隠サンカ  
為メニ強クヲ背ンセタル程ヲ述テ曰ク居邑ヲ去テ此  
ニ居リ既ニ一夜ヲ越タリ是レ營ヲ其先例ナキ所ニシ  
テ大ニ習俗ニ悖レルカ故速ニ家ニ歸リ臣屬ノ心ヲ素  
堵セシメンヲ切望スト暗ニ亦營ニ於テ贈物ヲ与フル  
トノ意ヲ示セ凡固辭シテ其志ヲ變動スヘカラサレ如  
クナリト雖リ亦昔ハ先日會見ノトキ結ビシ約ヲ記銘  
セシニヤ卒然往カント言ヒシニ他ノ商長等多く之カ  
為メニ同意シ日本ノ陣營ニ伴ハレシカ心ニ孤疑シケ  
レハ躊躇逡巡シテ行ク勢ヲ列ナラサリシカ中ニバコ  
トノ商長シレンジヨウハ經令心中ハ安カラサリシモ  
更ニ之ヲ表ニ出サス安堵自著タルモノ、如ク能ク先  
頭ニ立テ疾行セリ而シテコワルツヨリ来リシ者ハ大



ニ震慄シ列後ニ在ルノミナラス社寮ノ屋陰或ハ間路  
ニ身隠カント企テ自ラ語ラク一生ノ最苦難ニ遇ヘリ  
ト川ニ遊シ之ヲ渡ラントセシハ彼又懼レテ舟ニ乗ル  
ヲ欲セカリシカ程々ニエ丈シテ大ニ氣ヲ励メシカモ  
遂ニ舟ニ上リタレト舟中ニアルヤ強メテ体ハ自  
若トシテ居タレト如何セン兩眼ハ頻ニ反回シ流汗ハ  
怡モ澁ノ如クナリシ夫ヨリ都督ノ帳幕ニ達シケレト  
唯<sup>レ</sup>取ラン<sup>テ</sup>ヲ<sup>ノ</sup>ミ欲シ<sup>シ</sup>郷<sup>長</sup><sup>官</sup>ニ陪スルヲモ好マカリシカ  
暫時止マリテ大砲ガ外<sup>ニ</sup>立<sup>テ</sup>一<sup>ノ</sup>覽<sup>シ</sup>時ニ点火セガテ  
ニテ願ヘリ<sup>節</sup>衣<sup>重</sup><sup>着</sup><sup>等</sup>ヲ<sup>揮</sup>領<sup>セ</sup>リ然ルニ彼ノコ<sup>ノ</sup>ヲ  
リュ<sup>ト</sup>人ハ始終何事ヲ為スモ悦ハズ唯遠クヲ歩<sup>ミ</sup>楯  
内ニ入<sup>レ</sup>ハ危<sup>害</sup>アラ<sup>ン</sup>ヲ<sup>懼</sup>レテ少ク<sup>ノ</sup>楯ヲ<sup>楯</sup>ヘシ<sup>所</sup>  
ハハ入<sup>ラ</sup>ス亦昔<sup>又</sup>之<sup>ニ</sup>及<sup>シ</sup>此ニ来<sup>リ</sup>シ<sup>核</sup>會<sup>ヲ</sup>幸<sup>ト</sup>

シ<sup>医</sup>ニ<sup>眼</sup>ノ<sup>檢</sup>査<sup>ヲ</sup>乞<sup>ヘ</sup>リ島<sup>人</sup>ハ多ク<sup>ノ</sup>眼ヲ<sup>患</sup>ヒ亦昔ノ  
眼モ大ニ損<sup>フ</sup>所<sup>アル</sup>カ故ニ外科<sup>医</sup>ノ<sup>眼</sup>内ヲ<sup>洗</sup>ヒ<sup>終</sup>ル  
マテ亦昔ハ<sup>神</sup>色<sup>匂</sup>若<sup>タ</sup>リシ而シテ後<sup>用</sup>ノ<sup>為</sup>メ<sup>洗</sup>劑一  
瓶ヲ<sup>請</sup>求<sup>セ</sup>リ斯<sup>ク</sup>ラ<sup>正</sup>午<sup>少</sup>シ<sup>過</sup>キ<sup>諸</sup>事<sup>全</sup>ク<sup>畢</sup>リ<sup>タ</sup>レ  
ハ七<sup>箇</sup>長<sup>一</sup>齊<sup>ニ</sup>装<sup>ヲ</sup>ナ<sup>シ</sup>ク<sup>テ</sup>ラ<sup>イ</sup>及<sup>ビ</sup>カ<sup>ア</sup>タン<sup>ノ</sup>兩  
箇<sup>長</sup>之<sup>ヲ</sup>導<sup>キ</sup>旗<sup>ト</sup>贈<sup>物</sup>ト<sup>テ</sup>携<sup>ヘ</sup>テ<sup>去</sup>レ<sup>リ</sup>其<sup>物</sup>ニ<sup>去</sup>ラ  
ントスル時我<sup>軍</sup>隊<sup>整</sup>列<sup>シ</sup>テ大<sup>約</sup>一<sup>千</sup>人<sup>ノ</sup>兵士<sup>規</sup>ヲ  
乱<sup>サ</sup>ス或<sup>ヲ</sup>正<sup>シ</sup>運動<sup>シ</sup>テ<sup>軍</sup>威<sup>ヲ</sup>觀<sup>セ</sup>シカハ<sup>生</sup>蕃<sup>人</sup>ハ  
大ニ<sup>感</sup>歎<sup>シ</sup>タ<sup>リ</sup>キ然<sup>レ</sup>ト<sup>唯</sup>兵<sup>法</sup>ノ<sup>美</sup>ヲ<sup>顯</sup>ハ<sup>ス</sup>ノ<sup>ミ</sup>ニ  
テハ如此ク<sup>蕃</sup>人<sup>ヲ</sup>シ<sup>テ</sup>肝<sup>膽</sup>ヲ<sup>寒</sup>カラ<sup>シ</sup>メ<sup>無</sup>カ<sup>ノ</sup>念<sup>ヲ</sup>  
起<sup>サ</sup>シケルニ<sup>是</sup>ヲ<sup>ガ</sup>レ<sup>ト</sup>彼<sup>等</sup>ノ<sup>固</sup>ク<sup>恃</sup>ミ<sup>シ</sup>石<sup>門</sup>ヲ<sup>攻</sup>  
破<sup>シ</sup>牡丹<sup>ノ</sup>箇<sup>長</sup>ヲ<sup>ハ</sup>殺<sup>シ</sup>且<sup>ツ</sup>敵<sup>人</sup>侵入<sup>ス</sup>ル<sup>ト</sup>凡<sup>ソ</sup>世  
防<sup>守</sup>ス<sup>ヘ</sup>シト<sup>彼</sup>レ<sup>自</sup>ラ<sup>信</sup>頼<sup>セ</sup>シ<sup>國</sup>中<sup>ヲ</sup>蹂<sup>躪</sup>シ<sup>タ</sup>ル<sup>等</sup>



ノ效績アルヲ以テ今大ニ驚愕ヲ増カシメタルナリ  
商長等大砲ヲ一覽セシハ其用方ヲ通詞人ジヨンス  
ン氏ニ問フタリジヨンスン氏自ラ能ク之ヲ知ラサ  
レハ自己ノ意思想ヲ以テ之ニ答ヘテ曰ク此物ハ彈丸  
ヲ発シ其丸ハ至島ヲ飛越スヘシ又山密ヲモ貫通ス  
ベシ而シテ此物着地ニ向ケ列シテアル間ハ蕃民決  
シテ日本入ノ攻鋒ニ當ルヘカラサルナリト商長等  
ハ此語ヲ聽キ此武器ヲ怖レシテ甚シト云フ

第二十五回

東海岸へ航行ノ事○日進灣○上陸ノ困難ナリシ事  
和○懇切ナル致意○土蕃ノ脹耳○高滑土ノ酋長○野  
外ノ快樂○土蕃ノ釀酒○亦昔ノ酩酊セシ事○東海  
岸へ布営ノ事

六月九日東海岸ノ一處ニ占據セシトノ評議始メテ起  
リ十日ニ至リテ之ヲ決スルニ日進艦ヲ以テ小兵ヲ其  
一處ニ發センコトヲ以テス蓋シ其地ハ嘗テ上陸セシ時  
遙カニ點檢シタル處ナリ既ニシテ通詞人ジヨンスン  
氏ヲ拔擢シシヤト共ニ彼地ニ遣リタイラソツク及ヒ  
新ニ布営セントスル地ノ近傍住民ニ預メ之ヲ報告セ  
シメントス蓋シジヨンスン氏ハ勇氣活發ナル人ナリ



日進艦ハ五十ノ海兵ヲ乗セテ六月十一日ノ午前ニ開帆シ以テ彼地ニ向ヘリ此行甚タ大事ニ非ラズト雖モ提督赤松之カ將トナリ少佐福島之ニ副タリ蓋シ日本軍艦ノ内ニ外國人ノ乗組ミタルハ此行ヲ以テ始メトナスヘシ此際日本人ノ亞米利加人ニ對シテ慇懃ナル禮ヲ行ヒシトアリ然レモ茲ニ之ヲ言フニ及ハス而シテ此船中ノ士官等ハ皆ヨク教育ヲ受ケタル人々ニシテ其中各國ノ語ヲ理解スルモノ多ク殊ニ其一人ハ英語ヲ話スニ音節正シク辨説流ルノカ如クニテ殆ント自國ノ語ヲ説話スルカ如シ舟行數時間ヲ經テ午前十時ヨリ午後三時ニ至レリ凡ソ十二時ノ頃嘗テ漂流人ノ殺害セラレタル地方ノ沖合ヲ通過セシカ其灣ノ口ヨリ奥マテ一里ニ足ラスト雖モ全島中隨一ナル曲江

ナリト云フ又其海岸ノ凹處ニ一埠頭アリタレモ既ニ開版ニナリタル海圖中ニハ未タ之ヲ掲載スルモノナケレハ日進艦ノ三週前ニ航行セシキ全ク發見セシ處ニシテ暴風ヲ避クルノ便アリ加之東海岸ニ上陸スルニ稍便利ノ地ナリ但シ日進艦ハ此地ヲ發見ノ際其海濱ヨリ砲撃セラレタルナリ斯クテ此軍艦ノ投錨セシキ土蕃數人三流ノ旗ヲ翻ヘシテ海濱ニ群集シ來ルヲ見ル蓋シ此旗ハ蕃人ノ早ク誓ヲ立テ、其功ヲ奏セシトテ請フモノタルヲ表センカ為メニ前日授典セシモノナリ既ニシテ上陸セントスルニ波浪高クシテ困難ナキ能ハス各人亦多少浸タサレサル者ナク亞米利加ノコモドール分隊水師提督ハ海中ニ落チタリ斯ク艱難ナリシモ余ノ數次述ヘシカ如



ク未タ曾テ一人ノ誤モ來ラサリシ熱帶中日蒸ノ地方  
ニ近ツクヲ得テ竟ニ小川ノ口ニ至ルノ一路ヲ看出セ  
リ其地ハ土蕃亦昔シシテヨ一及ヒルウリン等ノ其部  
下ヲ牽井テ集合セシ海濱ヨリ甚タ遠カラサレハ彼等  
ハ我一行ノ上陸スルヲ遠望シ旗ヲ持シテ南方ヨリ海  
濱ヲ疾走シ來リテ余等ニ會シ欣然トシテ喜フ色アリ  
キ  
既ニシテ土蕃ハ火ヲ焚キシカ如何ナル法式アルニヤ  
或ハ否ラサルニヤ甚タ解シ難カリシ而シテ彼等ハ余  
輩ノ其火ニ近寄ランコトヲ望ミケレ氏此日ハ暑氣最モ  
甚タシフシテ自然ノ炎熱ニモ堪ヘサルニ奚シソ火熱  
ニ近ツクヲ好ム者アラシヤ故ニ蕃民等ハ大ニ失望シ  
タル氣色アリキ此時土蕃ノ衣服ヲ見ルニ嘗テ社寮ニ

於ケル我陣營ニ來見セシ時ハ禮服ニハ非サル可ク頗  
ル粗服ヲ著セリ營ニ粗服ノミナラス一種異様ノ短衣  
ヲ著シテ其他ノ裝飾ヲラス且ツ其狀貌ヲ見ルニ頗ル  
喜色アリテ掛念スル所ナキカ如キハ亦大ニ前日ニ異  
ナレリ是レ蓋シ兇暴ナル種族ヨリ苛刻ノ害ヲ受クル  
ヲ免カレ平生ノ憂苦ヲ忘レ始メテ安堵ノ思ヒヲナス  
ニヨルモノナルヘシ蕃人多クハ色ヲ喜ハシ聲ヲ和ラ  
ケテ感謝ノ情ヲ表ハシケルカ獨リ亦昔ハ頑愚ヲ固守  
シテ喜フ色ナク却テ他ノ我ニ親睦スルヲ笑ヒシカ竟  
ニ西郷都督ヨリ説諭セラレ且ツ劔ヲ賜リケレハ之ヲ  
佩キテ初メテ日本人ノ撫恤ヲ悦ヒ大ニ懇切ナル情意  
ヲ示スニ至レリ  
會合ノ時聊カ誤解スルコトアリテヨリシヨシン氏ハ



通辨ニ出ルヲ好マサリシカ此間ニ當テ五十人ノ海兵  
ハ同數ノ水夫ト共ニ上陸シタイラソツク及ヒ海濱ヨ  
リ一里内ノ村落ヲ點檢セシカタイラソツクハ悼其篤  
ノ舊領地ニシテ其風景遙カニ瓊瑤地方ニ勝サリ丘嶺  
水際ヨリ起リ青艸綠樹蔚然トシテ枝葉深ク茂リ大イ  
ニ人ノ心目ヲ樂マシメ又海濱ノ砂上ニハ粗造ナル漁  
舟ヲ棄テ其傍ラニ長キ漁網ヲ木匡ニ張リタルマ、ニ  
テ漁人ヲ見ス而シテ此地ニ土蕃ノ此業ヲナス者アル  
ハ未タ之ヲ知ラサリシ又濱ノ中央ニ砂ノ高キ處ヲ以  
テ墨壁トナセシ跡アリテ其高サハ凡ソ二ヒトニシ  
テ長サハ三十ヒトニ至レリ嘗テ日進艦ヲ砲擊セシ  
ハ蓋シ此處ナルヘクシテ土蕃ハ之ヲ以テ胸壁トナシ  
敵船ノ害ヲ加フル者ヲ防シカ為メニ築キタルモノナ

ラシ又其後ニ當リテ進退自在ナル一路アリテ山谷ニ  
通ス之ニ由テ考フレハ其地位ヲ撰ム頗ル其利ヲ得タ  
リト云フヘシ  
午後ニ至リテ蕃民數人諸方ヨリ群集シ來ル者アリシ  
カ之ヲ見ルニ一ツハ原來ノ土人ニシテ一ツハ支那人  
種ナリ此兩種族ヲ判断スルハ至テ容易ク土人ハ耳  
脹レテ且ツ大ナルカ故ナリ而シテ其耳球ニ金屬或ハ  
石ヲ以テ作りタル環ヲ掛ケ其大イサハ墨是哥「ドルラ  
ルヨリ小ナラサリシ是ニ於テ一ノ問題アリ抑、台灣ノ  
地ハ往古日本人ニ據リテ領有セシトノ説アレトモ  
今此脹大ナル耳ヲ以テ考フルハ果シテ日本人種ノ  
後裔ナリヤ將タ真ノ土族ナリヤ其連續如何ヲ蹤跡シ  
得ヘシ又茲ニ日本ニハ古昔ノ豪雄及ヒ神佛等ノ銅像



木像アリテ其下等ナル者ハ甚ク巨大ニシテ或ハ破損  
シ或ハ埋沈シ時トシテハ半身ノモノアリ又有名ナル  
鎌倉ノ大佛ハ其一證ナリ此奇異ナル醜像ヲ信スルノ  
根原ヲ尋ヌルハ印度地方ヨリ起リシト論ヲ俟タス  
シテホルモサ人ハ東方ニ於テ之ヲ尊信スル風俗ニ移  
リタル最後ノ人種ナランカ

初メテ此地ニ來リシ者ハ皆武器ヲ携ヘサル者ナシ是  
レ土蕃ノ兇暴ヲ避ニカ為ナレトモ土人ノ敬禮ヲ施ス  
ヲ見レハ復タ其疑心ヲ解ク者多シ而シテ其敬禮ハ胸  
間ニ手ヲ當ルヲ以テ常トス蕃民ノ言ヲ聞クニ胸ニ手  
ヲ當テ、禮ヲ行フハ内心ノ喜悦ヲ示スナリト該地ノ  
支那種類ハ往々文字ヲ知ル者アリテ時々砂上ニ之ヲ  
記シテ以テ自カラ樂シム土人ノ中稀レニ支那語ヲ解

スル者ナキニ非サレ氏自カラ之ヲ書シ又之ヲ讀ムヲ  
知ラス蕃語ハ一ツモ記シタルモノナケレハ敢テ之ヲ  
學フニ由ナシ通辯者ニ依ラスシテ之ヲ聽カントスレ  
ハ極メテ混淆前後錯紊シテ其顛末ヲ分別シ難シト雖  
氏通辯者ニ依リテ之ヲ聽ケハ條理判然トシテ少シモ  
澁滯ナキカ如シ

既ニシテ布營ノ地ヲ撰ミタイラソツクノ酋長ニヨリ  
テ之ヲ假用セシトテ掛合ヒシカ酋長ハ其報ヲ受クル  
ヲ固辭セリ翌日ニ至リ高滑土ノ一勇士我陣前ニ來リ  
テ諸處ヲ巡見ス問ハスシテ其酋長ナルトヲ知リシカ  
後チニ之ヲ問ヘハ果シテ一種族ノ酋長ニシテ彼カ領  
地ハ此處ニ近接スルヲ以テ害ヲ受ケシトヲ恐ルト若  
シ幸ヒニ我族ヲ憐レミテ害ヲ加フルトナケレハ復タ



掛念スル所ナシト其容貌ハ短小ニシテ眼目ハ大ナレ  
トモ顔面ノ柔弱ナルコト婦人ノ如ク且ツ温和ニシテ  
頭髮ニ結フニ美ナル野花ヲ以テセリ蓋シ此者ハ牡丹  
社ニ次キテ最モ兇暴ナル種族ノ長ナリト又其同族ノ  
一人モ其容貌ハ稍同様ナレト粧フニ枝葉ヲ以テス又  
タイラソツク酋長ノ嗣子ハ野鷄ノ羽及ヒ長キ尾ヲ以  
テ修飾シ其弟悼其篤ノ末子ハ自ツカラ伶俐ナル容貌  
アルト愛スヘキ眼状ヲ除クノ外ハ粧飾ヲ著ケス然レ  
ト嘗テ見ル所ノ蕃民中ニテ容色最モ美麗ナリシカ唯  
々惜ムラクハ耳ニ一孔ヲ穿チ楨柳子ノ液ヲ以テ其唇  
ヲ深メ大イニ顔面ノ美ヲ傷ヘリ但シ高滑土ノ酋長モ  
頗ル美貞ニシテ土蕃ノ如クナラスト雖ト前者ニ比ス  
レハ稍劣リタリト云フヘシ日々ニ及ニテ土蕃数人闘

ハシク丘ヲ過ル者アリシカ皆大小形状ヲ相異ナル桶  
或ハ籃ハコ或ハ包或ハ樽ノ類ヲ運送スルハ蓋シ始メテ開  
ク饗宴ノ時刻ニ近ケレハナリ而シテ此宴ハ不時ノ饗  
應ナルカ故ニ純然タル土蕃ノ禮ヲ以テ設ケ其食物ノ  
如キハ米、鶏卵、鶏肉、豚肉等ニテ酒ハ甘薯ヲ以テ釀造セ  
ルモノニシテ大ナル樽ヨリ之ヲ汲ミ出セリ宴既ニ闌  
ナルニ及ニテ火ヲ焚キ復々酒ヲ煖メ手ヨリ手ニ渡シ  
各人飲シテ止マサリシカ是レ蓋シ強ヒテ飲マシムル  
ノ主意ニアラス能ク客ヲ款待スルノ例ナリ其釀酒ハ  
格別ノ好味ニアラサレト極メテ烈シク香味ハ恰モ愛  
爾蘭ニ於テ釀造セシ大麥酒ノ最モ下品ナルモノニ異  
ナラサリシ  
我一行ノ人々ハ此午飲ニ連リテ互ニ杯ヲ傳ルヲ固辭



シケレハ蕃人等ハ陽ニ憂鬱ノ色アリシモ余ハ之ヲ考  
フルニ之カ為メニ餘レル酒ノ多キヲ以テ陰ニ其心ニ  
ハ満足セシナルヘシ既ニシテ酒ヲ大杯ニ盛リテハ之  
ヲ盡セシカハ俄カニ得意ノ色ヲ表ハシ隨意ニ多飲ス  
ルノ状恰モ渴者ノ水ヲ飲ムカ如クナリシ嘗テシヨシ  
ン氏ノ言ヒシヲアリ該地ノ土蕃ハ嘗ニ午飲スルヲ  
以テ最大ノ樂事トスルノミト是ニ於テ其言ノ果シテ  
信ナルヲ見タリ斯クテ各快樂ノ色ヲ表ハシ急ニ懇親  
ノ情ヲ發シテ我ヲ愛慕セサル者ナキニ獨リ亦昔ハ嚴  
格ヲ守リテ之ニ倣ハサリシカ終ニ戲言ヲ發シテ屢其  
顔色ヲ變セリ是レ彼ノ笑フナリト云フ宴既ニ終リシ  
カハ彼等ヲ伴ヒテ我船ニ到ラント言ヒケルニ亦昔ハ  
之ヲ肯セスシテ砂ヲ蹴立テ怒レル色アルカ如シ之

ヲ問フニ彼答テ曰ク吾レハ眞ノ戲ヲ以テ之ヲナセ  
シナリト又途ニシテ棄テタル漁網ノ中ニ入リシカ甚  
々醜陋シテ前後ヲ忘却セシナリト云フ嗚呼此海濱ハ  
漂流人遭害ノ地ニシテ又二十日前ニ於テハ土蕃等今  
日ノ賓客ニ敵對シテ却殺セント企テタル所ナリ  
翌日ハ軍營ヲ布クニ從事セシニ英國ノゴンボート  
船ハ密ニ之ヲ檢査シタリ但シ此船ハ瓊瑤灣ヨリ日進  
艦ニ從ヒテ來リシカ十三日其士官ノ歸路ハ陸行セン  
ト欲スル者ヲ殘シテ該島ノ西方ニ向ヒテ開帆セリ十  
四日小ナル運送船將官谷及ヒ病者等ヲ乗セテ近日ノ  
報知ヲ達セシカ為メニ長崎ニ向ヒテ發シ十六日提督  
赤松少佐福島支那ノ形勢ヲ探リ且ツ在北京日本公使  
ニ近況ヲ告ケントシテ日進艦ニ乘リ上海ニ向ヒテ發



第二十六回

陣營ノ新築○日本ノ軍醫○舊營地ノ健康ニ害アリ  
 シ事○平安ナル生活ヲ得タル事○蕃地ノ鳥獸及ヒ  
 蟲類○時々ノ娛樂會○西郷精撰ノ攻兵○横濱新聞  
 紙○日本人蕃地ヲ穿鑿セシ事○友情ヲ以テ内地人  
 ニ接ス○耕作ノ試験ヲ企テシ事  
 最初ニ占據シタル地ハ琅瑤ノ谷ニテ兩河ノ間ニアリ  
 シカ甚タ健康ニ害アリ且ツ一般ノ不便ナルヲ知リ五  
 月中旬新タニ營所ヲ定ム掌舎官平野ヲ盡力ヲ以テ公  
 館及ヒ病院等ヲ建築シ其他數多ノ家屋ヲ立テ、屯住

處トナシ萬事漸ク完備スルニ至レリ殊ニ其公館ヲ如  
 キハ貯蓄ノ限リアルニ比フヒハ屯住ノ軍需モ饒多キ  
 シテ極メテ壯麗ナリ  
 六月初旬患者ヲ病院ニ移シ日本軍医ノ練磨シタル術  
 ヲ以テ之カ治療ヲ施セシニ一人ヲ除クノ外傷者ハ皆  
 二週ヲ経テ本復スルニ至レリ英國船ノ醫師等皆之ヲ  
 賞讚シテ曰ク日本軍医ノ傷者ヲ治スルヲ見ルニ其術  
 頗ル熟練シテ其治方甚タ巧ミナリト余ハ之ヲ聽テ大  
 ニ悦ハサルヲ得ス何トナレハ一ハ以テ日本軍医ノ練  
 熟ヲ賀シ一ハ以テ勇士ノ強壯ニ復スルヲ賀セハナリ  
 又此勇士ノ形勢ヲ見ルニ戦ニ臨ム片ハ進退皆一人ノ  
 令スル所ニ從フヘシト雖ヒ其進ムニ當テハ險阻絶壁  
 ノ嫌ヒナク粉骨碎身以テ危險ヲ冒シ各其職トスル所



ノ軍器ヲ携ヘ腰ニ劔ヲ帶ヒ手ニ銃ヲ提ケ勇ヲ鼓シカ  
ヲ勵マシテ以テ衆ニ越ヘントス  
凡ソ日本人ノ才能ヲ以テ軍營ヲ建築スルニハ密ニ兵  
家ノ法ニヨルヘキハ勿論天然ノ勝景ヲ撰ミ人身ノ健  
康ニ害ナキ地ニ據ル等ノ事ハ固ヨリ熟知スル所ナル  
可シト雖モ是ヨリ先キハ地ヲ撰ムニ專ラ要害ニ據ル  
ヲ以テ緊要トナス故ニ舊營地ノ如キハ啻ニ要害ノ便  
利アルノミナリシ然ルニ土人ノ攻撃スルコトナキヲ明  
知スルマ忽チ堡障築造ノ事一時廢止スルニ至リ各人  
ノ意思皆他事ニ向ヒ僅ニ最初上陸ノ地ヨリ距ルコト二  
里ノ處ヲ補理スルニ歸セリ而シテ此地ヲ始メヨリ永  
ク占據スル見込ヲ以テ日本士官ノ撰擇セシハ其益甚  
ク大ニシテ又各地ノ及ハサル所ナリ是レ其後ニ起リ

タル患害ヲ以テ其良地タルヲ證スルニ足レリ若シ最  
初ヨリ此高燥ノ地ニ駐留スルコトヲ得ハ此患害ヲ避ケ  
シコト疑ヒヲ容レサルナリ然ルニ八月九月ニ至ラテ將  
士兵卒ノ熱病ヲ煩フモノ多カリシハ蓋シ其地ノ低ク  
シテ毎ニ霧ノ深キト初メ上陸ノ際漲水アリシトニ感  
スルヨリ起レルナラン  
又其本源ヲ考フルニ敵人ノ襲ヒ來ラニコトヲ慮リ且ツ  
嚴ニ兵法ニヨリテ之ト戰ハンカ為メニ要害ノ地ヲ擇  
ミ若シ苦戰ニ至ラハ好機ニ乘シテ此地ヨリ逃レニ  
テ謀リシカ故ニ誤テ人身ノ健康ヲ害シ生々ノ不便ヲ  
起スノ地ヲ撰ミ竟ニ弛張熱ニ感シテ士卒ノ生命ヲ失  
フニ至リシハ不幸ト云フヘキナリ  
社寮ナル村落ノ正南ニ當リテ一小丘アリ其高サ或處



ハ二百「ヒ」ト或處ハ三百「ヒ」トニシテ其形ニヨリテ  
支那人ハ之ヲクイサント名ツケ日本人ハ之ヲ龜山ト  
名ツク之ヲ英語ニ譯スレハ皆トルトイス、ヒールノ義  
ナリ五月七日穿鑿ノ為メ日本士官ノ登リタルハ即チ  
此山ナリ其他又南ニ當リテ平坦ナル地アリ其廣サ或  
處ハ二十「ア」ク<sup>ル</sup><sub>地坪ノ名一「ア」ク<sup>ル</sup>ハ我ニ過キ海面ノ</sub>  
水準ヨリ高キ一尺ナラス四方ニ岡嶺アリテ暴風雨ヲ  
避クヘシ又此地ハ四周ノ溪間ニ比スレハ毎ニ微風ア  
リテ稍涼シク大ニ人身ニ適ス是ヲ以テ此地ニ本宮ヲ  
置キシヨリ後チ數週間平安ニ生活スルヲ得タリ然  
レに暑熱ハ少シモ減スルヲ覺ヘス又五月末ニ大雨  
如キ饒多<sup>ク</sup>雨降ラサレヲ以テ若シ涼風ナカリセハ甚  
々堪ヘ難カルヘシ然ルニ晝夜トモニ清風アリテ之カ

為メニ空氣モ自ツカラ新鮮ナレハ一時ハ熱病ノ憂苦  
モ全ク忘ル<sup>ル</sup>ニ至レリ<sup>モ</sup>又此地  
諸此地ノ大氣ハ頗ル温暖ニシテ晴日山ニ登リテ一方  
ヲ望メハ海水天ニ參リ白涌碧翻極目際リナク又一方  
ヲ眺ムレハ數峰雲ニ入り岡密廻繞蒼翠沐スルカ如シ  
是固ヨリ天然ノ風景ニシテ實ニ一奇觀ナリ斯ル勝地  
ニ在リテ安慰ニ日ヲ費シ幽ヲ究メ奇ヲ搜ルヲ好ム人  
ハ自カラ目ヲ迷ハシ心ヲ奪ハル、モノナキ能ハサル  
ヲ信ス日本人ハ暫時此地ニ占據セシト雖に其性質單  
純ニシテ恒ノ心緒ヲ乱サス人ニ對シテ自ラ謙リ禮ヲ  
守ルヲ以テ通例トス固ヨリ今度ノ事ニ就テハ衆庶ノ  
奮勵スル原因アリト雖に平生ノ習慣ニ非ラサレハ亦  
以テ固ク守ル能ハサルモノアリ



獸類ハ甚タ少ク且ツ人ノ愛スヘキモノナシ上文既ニ  
記シタルカ如ク數種ノ家畜ハ水牛ノ類多ク又馬ハ日  
本人ノ牽キ來レル數十頭ノ外ハ絶ヘテ見ルコトナシ然  
レ氏琅瑤人ハ全ク馬ヲ知ラサルニ非ス往時海辺ノ牧  
夫ヨリ三四頭ヲ輸入シテ之ヲ飼ヒシカ竟ニ土蕃ノ食  
用ニ奪ハレシヨリ再ニ牧畜ノコトヲ企テサルニ至ルト  
云フ又社寮ノ民嘗テ麵包ヲ製スルコトヲ歐洲人ニ習ヒ  
タルコトアリ氏之ヲ以テ蛮民等ハ常用ノ食物トシタル  
ニ非スト云フ又山中ニ住ム蕃民モ日本馬ヲハ食セン  
コトヲ欲スルノ様子ナク絶テ之ヲ請フ者モアルコトナシ  
蓋シ彼等ノ信スル所ハ斯ク異形ナル四足獸ハ腹中ニ  
入テ容易ク消化セサルモノト思フカ故ナリ又此地方  
ノ狗ハ甚タ人ニ馴レサレハ欺キテモ呼ヒ來タスアタ

ハス首ニ幸イテ云々土蕃人習ヒテ其類  
飛禽羽蟲匍匐蟲ハ其類甚タ多シ動物學家ハ之ヲ如何  
ナル部ニ屬ス又如何ナル名ヲ命スヘキヤ茲ニ之ヲ説  
明センコト余カ筆カノ及フ所ニアラス飛禽ハ啼鳥ノ類  
多クシテ田獵ヲ好ム人ノ心ニ適スルモノ甚タ少カラ  
ント察ス然レ氏毎朝空中ニ飛行シ鳴声碎々トシテ甚  
タ愛スヘク恰モ好調子ノ音樂ヲ聽クニ似テ終日人ノ  
耳ヲ傾ケシムルモノアリ日夕ニ至レハ之ニ代ルニ無  
數ノ羽蟲飛ヒ來リ其声ノ噪ビスシクシテ余ノ嘗テ諸  
邦ヲ遊歴セシ片各所ニ於テ聞ク所ノモノト全ク異ナ  
レリ然レ氏亦日本ノ樹林中ニ鳴ク蟬ノ如ク快活ナル  
モノニ非ス其中甚タ美声ナルモノモアリ又鳴音人意  
ニ適セサルモノモアリテ靜カニ其声ヲ聽ク片ハ自身



ノ禽獸園中ニ在リシキヲ思ヒ起セリ  
羽蟲類モ亦甚タ多ク其中「リザルド」屬アリテ常ニ屋上  
ニ上リ窓隅ニ棲ミ鳴声頗ル快ヲ覺フ其他無数ナ  
レト又記スヘキモノ多カラズ

匍匐蟲ハ時々人席ニ來ルモノ多ケレト人ヲ害スルモノ  
甚ナク形チノ美ナラサルモノ多シ注簿虫「イーゼル」  
ニツピシ蛇百足ノ類ニシテ其中百足ハ甚タ多ク又頗  
ル大ナルモノアリ時トシテハ長サハ「インチ」ニ過ルモノ  
ノアルヲ見シヨリ四「インチ」ノモノハ珍ラシカラサル  
ニ至レリ一朝衣服ヲ著セントスルニ衣櫃ノ上ニ匍行  
セシモノ亦其長サニ下ラサレハ大イニ驚愕シタレト  
余ハ此蟲類ノ為メニ少シモ害ヲ受ケタルヲチカリシ  
ハ希有ノ幸ト云フヘシ土蕃寺ハ皆之ヲ恐ルレト其咬

瘋ノ人ニ害アリト云ヒシモノアルヲ聽カス又鳴鳥ト  
「リザルド」ノ外ハ其声ノ聽クニ快キモノ其數甚タ多カ  
ラサリシ  
土産ヲ賣ル者ノ少シモ疑ハシキハ営中ニ入ルヲ禁セ  
シヨリ土人ノ呼声ヲ聽カス又土蕃中常ニ謡フモノア  
リ其中一種ノ長歌アリ古事ヲ傳フト云フ「セルバンツ」  
ノ歌ヲ聞クニ「重キ牛車ノ回轉スルヨリ發スル響声」ト  
シクニイソトト連々鳴動スルヲ聞カハ豺狼モ羆熊  
モ恐怖シテ飛ヒ去リニケリト古昔西班牙國ノ車軸モ  
恐クハ尚ホ粗造ニシテ大ナル声ヲ發セシモノト思ハ  
ル今瓊瑤ニ於テ其發声ヲ聞クニ甚タ快カラサルニ非  
ス其軸ニ脂ヲ塗ラサル貨車ヲ押スニ声ヲ發シテ恰モ  
田夫ノ喇叭ヲ吹クヲ遠ク聽クモノ、如シ或ハ又遠キ

地  
政  
館

大  
改  
官



港内ニ蒸汽船ノ錨ヲ投シテ笛ヲ吹ク声ト度々誤解シ  
タルモノアリ  
我営中ニ於テハ日ニ十二次喇叭ヲ吹キテ時ヲ報シケ  
ルカ歐米ニテハ通常ノ事ナレバカ、ル蕃地ノ野営ニ  
在リテハ甚タ奇異ニ覺ユ又或時ハ誤テ吹キ或時ハ正  
シクシテ誤ラサリシカ此喇叭ヲ吹ク者ノ営内ニ往來  
スルヲ見ルニ大約十四五歳ノ少年ナルヲ知リ初メ  
テ其誤リアルヘキヲ曉レリ此輩又喇叭ノ外ニ正兵ノ  
外飾ヲ著ケタル者ハ其部属中最モ熟練シタル者ニテ  
毎朝整列シテ一定ノ地ニ來往セリ  
凡ソ事ノ偶然ニシテ變スルハ極メテ稀レナリ故ニ遷  
延日ヲ送リテ一定ノ為スヘキナケレハ無限ノ憂情ヲ  
生セサルヘカラス夫レ日本人ノ如ク揮發ナル性質ニ

シテ單ニ其事ヲ守ル者ニ於テハ殊ニ然カリ此時ニ當  
テ大約一週間ニ一度ハ山營ヨリ兵士ノ來ルアリ或ハ  
海辺ヨリ來ル者アリ其他ハ當直ヲ以テ各地ニ進退ス  
ルノミ又罕ニ汽船ノ日本ヨリ到着スルヲアレハ英語  
ヲ解スル諸人ハ直チニ新聞紙ヲ取りテ之ヲ讀ミ近日  
ノ形勢如何ヲ議シテ以テ一時ノ鬱悶ヲ散スルヲ知レ  
リ而シテ其記者互ニ論ヲ戰ハシ我カ出師ノ利害得失  
ヲ論シ或ハ我ヲ稱揚シテ彼ヲ誹謗シ或ハ彼ヲ是ナリ  
ト云ヒテ我ヲ非ナリトシ又彼我ノ強弱ヲ辯論スル者  
ノ中或ハ全ク我ホルモサヲ征スル得失如何ヲ知ラス  
シテ嘲ケル者アレハ又之ヲ辯駁シ其嘲弄ヲ顧ミスシ  
テ我ヲ賞讚スル者アリ互ニ辯論シテ一時ノ舌戰讀ム  
者ヲシテ亦發狂人ノ怒リヲ發スルカ如キニ至ラシメ



而シテ其嘲リ誹謗スル者ハ唯一人ニシテ新聞記者ノ  
責任ニ於テハ他ノ記者ヨリ明ラカニ計較スル所アレ  
ト啻ニ泥中ニ立チテ日本人ニ向ヒ一握ノ泥ヲ抛モノ  
、如シ又之ヲ辨駁シテ能ク條理ヲ取ル者ハ数次同論  
ヲ反復シ難キモノアリ其論ニ曰ク日本ノ漂民数人ヲ  
却殺セシ土蕃ノ罪ヲ問ヒ充分ニ之ヲ懲ラシメテ再ヒ  
此ノ如キ兇暴ナカラシメンカ為メニハ相當ノ處置ヲ  
用ヒサルヘカラスト言ヒ又其結末ニ至リテハ若シ此  
犯罪者ヲ措テ問ハサレハ益兇暴ヲ為スニ至ラン然ル  
キハ之ヲ問フト問ハサルト是非曲直如何ンソヤト確  
然其論ヲ決スルニ至レリ  
勝算ハ充分日本人ニ在リトスルハ疑ヒヲ容レス都督  
西郷モ勝ツコトヲ帷幕ノ中ニ運ラシ更ニ後拳ヲ圖リテ

一夜余ニ語テ曰ク日本海陸ノ兵ヲ總ヘ遠ク異域ニ來  
リ必ス成功ヲ奏センコトハ固ヨリ予カ期スル所ニシテ  
隊兵モ亦踴躍シテ來リ死ヲ決シテ生ヲ思ハサル者多  
シ若シ事實止ムコトヲ得スシテ逗遛數月ニ亘ラハ士官  
ヲ撰ミテ學校教師トナシ土蕃ヲ教育シ少ナクモ其無  
知ヲ啓ラカシメントス或ハ又支那政府ヲシテ外国人  
ニ對シ全島ヲ守護スルノ保證ヲ出シ該島管轄ノ權ヲ  
認可セシムルニ至ラハ亦必ス其擔保ヲ出サシムルニ  
非サル以上ハ我兵ヲ退ケスト且此地方ヲ管轄シ其政  
法ノ如キハ酋長中最モ威權アル者ヲ撰擧シテ之ニ屬  
シ他事ハ最モ信義アル者ニ屬セン等ノコト一々具サニ  
其意ヲ聽ケリ  
又時々娛樂ナル會ヲ設ケ日本人ノ内地ニ入りテ諸部



ヲ探鑿セシ者或ハ新報ヲ得テ帰レル者ノ傳説ヲ聞カ  
ント欲スル者ハ皆此席ニ集會セリ此會聚ノ法ハ遠征  
ノ開帆数月前ヨリ始リシカ今日ニ至リテ尚ホ未タ止  
マス而シテ最初ノ探鑿者ハ此書中數次其名ヲ掲載セ  
シ少佐福島ナリシカ同氏支那地方へ發程ノ後ハ他人  
之ニ代リテ蕃地ノ事情ヲ探レリ此等探索者ノ言ヲ聞  
クニ此地方北ヨリ南ニ至ルマテ生蕃各地ノ事情皆同  
一ノ野蠻ニシテ見ルニ足ル者甚タ少シ其耕作スル所  
ノモノハ唯々米ト馬鈴薯及ヒ煙艸アルノミニテ其方  
法極メテ粗ナリ又甘庶ノ如キハ之ヲ嚼ムヲ知リテ之  
ヲ製スルノ利アルヲ知ル者ナク百事皆無知ノ愚民ナ  
レ氏或ハ支那人ノ暴威ヲ喜ハス却テ之ヲ輕慢憎惡シ  
往々隊伍ヲ組ミテ所謂「頭獵」ヲナシ終ニ村落ニ歸リテ

其頂骨ヲサラスコアルヲ見タリ其他蕃人ノ風習ハ大  
同小異ニシテ服飾ノ異ナルノミ或ハ身体ニ墨ヲ點ス  
ルノ狀ハ各一ナラス或處ハ全ク其風俗ナキ者アリ又  
一奇事ナルハ既ニ嫁シタル女ノ前齒其深色ヲ失フ者  
アレハ種々ノ迷説ヲ唱ヘテ諸人ノ憂苦スル甚タ大イ  
ナリト

又時々内地ニ入り其酋長ヲ撫恤シテ恩威ヲ示セシニ  
酋長ハ亦屢來リテ感謝スル者アリシカ蕃民ニ至リテ  
ハ或ハ怕ソレ或ハ狐疑シテ未タ敢テ我宮ニ近ツキ來  
ル者アラザリシ又蕃人ノカラニ能フ所ヲ以テ響應セ  
ニトヲ欲シ時々余ヲ招キテ厚ク款待セント具サニ其  
情ヲ告ケシカ一度ハ旅情ヲ慰ムルニ足リタレ氏異常  
ニ割烹シタル鷄豚ノ肉ヲ以テ久シク余輩ノ心意ヲ悦



ハシムルモノニ非サレハ稍温和ナル土蕃ノ厚意モ終  
ニ閑散ノ心ヲ飽カシメサルニ至レリ  
六月初旬ニ於テ都督西郷ハ内地ニ医官ヲ遣リテ人身  
ノ健康如何ヲ診察セシメシハ其高恩ヲ感戴シテ毎ニ  
蕃人ヲシテ其信ヲ失ハシメサルニ至レリ野蠻ノ地ニ  
入リテハ歐洲各国ノ人モ皆此事ヲ以テ土民ヲ撫恤セ  
シ者多シ今又此地ニ於テモ其功アルヲ見タリ  
凡ソ人ノ利益トナルモノ種々アルハ論ヲ俟タズ茲ニ  
又一事アルヲ聞ケリ是レ他ナラス食物欠乏ノ時ニ當  
リテ檳榔子ヲ嚼マハ即チ之ニ充ツヘシト之ニ依テ一  
日ハ半時間又或日ハ殆ント一時間モ之ヲ嚼ミテ試ミ  
シニ其效ノ記スヘキモノナシ又此檳榔子ハ之ヲ貯フ  
ルニ注意シ脂ヲ塗リタル葉ニ包ムモノアリ其味ヒハ

チエツケルベルリトスト大異ナシ其他一二事ヲ試験  
セシトアリシカ其後ニ至リテハ深ク意ヲ之ニ用フヘ  
キモノ甚タ多カラズ  
日本人ノ始メテ此地ニ到リシヨリ廣ク土民ヲ撫恤シ  
テ厚ク恩惠ヲ施シタレハ其成果ヲ奏スル者少ナカラ  
スト雖氏又時トシテハ甚タ煩勞ニ堪ヘ難キヲ數度ア  
リテ其一ヲ言ハ、都督西郷ハ試験ノ為メニ一小圃ヲ  
開墾シテ之ヲ耕耘シ或ハ從來海外ノ草木タリシモノ  
ヲ植エ試ム等ノコトヲナセリ而シテ日本人ハ此企ヲ實  
地ニ施シテ或ハ其收納ヲトルニ十分ナル月日ヲ經タ  
レ氏預メ期シタル結果ヲ見ルニ至ラス蓋シ土人若シ  
之ニ著意シテ利スルコトヲ知ラハ必ス其益ヲ得シト疑  
ヲ容レサルナリ又地主ハ此企ヲ以テ數里ノ地ヲ耕種



スル片ハ非常ノ利益アルモノト察シ忽チ慾心ヲ發シテ非理ノ地代ヲ請求スルニ至レリ然レ其試驗セシモノ僅カニ數坪ノ地ニ過キスシテ或ハ未夕其算計ノ精シキヲ得スシテ終ニ廣ク施スヲ廢止ス是レ固ヨリ一時ノ事ニシテ其成果ヲ得ルヲ期スモノニ非サレハ後チニ至リテ此地ヲ領有スル者ハ多少ノ利益アラシク了然タレハ是レ又數月間此地ニ占據セシ日本人ノ遺徳ト言フモ可ナランカ

第二十七回

支那使臣來島ノ事○其使臣ニ接セシ方法○顧問ニ從フ外國人○日本全權公使柳原北京ニ到ルノ事○

支那始メテ爭議ヲ起ス○上海ノ會議○支那使臣ノ背約○都督西郷ト支那ノ使節潘爵トノ會議○使臣ノ狡猾及ヒ日本兵ノ忠直

斯クテ意外ニ積日ノ鬱ヲ散スル事ヲ生シ來レリ蓋シ預メ期セザルニハ非ラスト雖其事ノ不意ニ起リシナリ六月廿一日ノ夕支那ノ軍艦二艘北方ヨリ來リテ新營ヨリ大約二里ノ沖合ニ投錨セシカ此処ハ上陸スルニ最モ便利ニシテ且ツ安穩ニ停泊スルヲ得ヘシ既ニシテ使者ヲ來タシ之ニ言ハシメテ曰ク該船ハ北京政府ノ命ヲ奉シテ大使ヲ護送シ來レリ而シテ此高官ハ台灣ニ在ル日本政府ノ代理人ト面議シ今日ノ形情ニツキテ百事ヲ查問シ以テ後日ノ事ヲ決定セントス



ル者ナリト都督西郷ハ之ニ答テ曰ク明日ヲ待テ面會  
スヘシ請フ來リテ接スルヲ得ハ幸ヒナリト  
翌日早朝支那ノ使臣ハ其隨從ノ數負ト共ニ上陸シ日  
本ノ兵隊ハ之ヲ迎ヘ海濱ニ於テ會見ノ席ヲ設クヘシ  
ト故ニ其處マテ警護セシカ其行装ヲ見ルニ甚ク奇觀  
ナリ此隊兵ノ半ハ薩摩人ニシテ日本舊式ノ鎧ヲ著シ  
又其半ハ近時ノ軍服ヲ装ヒ左右ニ列シテ舊營ノ北一  
里ヲ距ルチヤンノ村落ニ行キ此處ヲ以テ假リ  
ニ應接ノ營トナシ茲ニ到リテ我兵皆敬禮ヲ行ヘリ若  
シ能ク日本人ノ常ニ行フ處ヲ知ル人ニシテ此異常ノ  
待遇ヲ見ハ疑フ所ナキ能ハサルヘシ是レ蓋シ今新夕  
ニ來ル者ニ對シ恐クハ為メニスル所アリテ然リシモ  
ノナラシ去レ凡此使節ニ隨從シ來レル佛蘭西ノヂー

ケル氏ハ總テ此事ニ関スルモノハ一小事ト雖凡之ヲ  
忠告スルニ躊躇スル人ニ非ラス且ツ其定例ノ小異ア  
ルモ必ス之ニ應スヘカラサルヲ教示シ兵隊ノ敬禮ヲ  
行フニ歐洲各國ノ法式ニ合フト合ハサルトハ固ヨリ  
熟知スル所ナリ茲ニ於テ支那使臣ハチヤンニ  
於テ預メ約ヲ定メ直チニ舊本營ニ來リ都督西郷ハ此  
處ニ於テ會見ヲ待チタリ  
始メハ東方人ニ欠クヘカラサル正禮ヲ行ヒテ後チ支  
那ノ使節潘爵ハ其奉使ノ事ニ從フ而シテ此高官ハ自  
國大政府ノ代理トナリ支那領ナル台湾ノ道臺厦嶼  
之カ副タリ之ニ加フルニ久シク福州ノ武庫ヲ管理セ  
シ佛蘭西人ヂーケル氏及ヒド、セゴンザツク氏之カ顧  
問トナリテ隨從ス日本人ノ之ニ應スル者ハ都督西郷



アルノミニシテ此會合ハ事ヲ決スルニ至ラサリシト  
雖亦以テ他ノ談判ノ端緒ヲ開クニ足リ且ツ東方貴  
官ノ會議セシ一例ナレハ余ハ之ヲ具サニ記載セント  
ス  
斯クテ支那使節潘爵ハ威ヲ張リ禮ヲ守リテ其職ヲ辱  
カシメサラントシ日本都督西郷ハ直實ヲ以テ旨トシ  
毫モ虚飾ヲ交エス事理ヲ取テ談論セシヲ以テ唯ニ此  
時ノミナラス爾後ノ事ニ於テモ相互ニ牴吾シ終ニ議  
ヲ破ルニ至レリ支那ノ使節潘爵告ケテ曰ク清國政府  
ノ特命全權大使沈葆楨ハ嚮キニ台湾府ニ到リシカ會  
病ニ罹ルヲ以テ該府ニ留リ書ヲ致シテ之ヲ告ク然レ  
臣事遷延シテ或ハ兩國ノ睦和ヲ傷フニ至ラント深  
ク恐レ之ニ因リテ予ヲシテ其代理タラシメ以テホル

モサノ事件ヲ議スヘキ權利ヲ與ヘシナリト後チ復タ  
問テ曰ク予嚮ニ北京駐劄公使柳原前光ト上海ニ於テ  
應接セリ其書信ヲ得タリヤ西郷之ニ答テ曰ク未タ之  
ヲ知ラスト潘爵ハ之ヲ聞テ曰ク柳原ハ北京ニ到ルノ  
途ニシテ偶然上海ニ於テ會合スルヲ得タリト  
此對話ニ於テ説明スヘキモノアリ日本全權公使ハ舊  
都西京ノ公家即チ日本ノ華族ニシテ其外ニ東京外務  
省ノ官負ヲ撰擧シテ之ニ隨行セシメタリ而シテ專ラ  
兩國ノ交際ヲ保タシムルノ主意ニシテ今其間タニ起  
リタル爭論ニ関ハラシムルニ非ス而シテ公使ハ四月  
八日ニ整ヒタル信書ヲ持シテ五月十九日東京ヲ發程  
セシカ其書ノ主トスル所ハ既ニ他ノ使節ヲ以テ議セ  
シメタル隣國ノ好誼ノ意ヲ總理衙門ニ反覆スルニ在



リテ嚮ニ都督西鄉ヨリ福建ノ總督ニ贈リタル書ノ文  
意ト大イニ異ナラス既ニシテ公使柳原ハ五月二十九  
日上海ニ著シ外國人特ニビニハム氏ト始メテ起リタ  
ル關係ヲ終ルマ忽チ北京ニ向ヒテ發シ未タ其途ニ在  
リシ氏支那政府ハ日本政府ノ行為ニ付テ疑フヘキ所  
アルヲ思ヒ之ヲ諫ムルノ飛書ヲ作り北京ノ總理衙門  
ヨリ日本東京ノ外務卿ニ送レリ

抑此書ノ如キハ特ニ後來ノ事ニ関シ最モ必要ナルモ  
ノニシテ其書中載スル所ノ大意ハ一千八百七十三年  
副島大使ノ來リシ氏ホルモサ蕃地へ使節ヲ遣ルヲ  
議シタレ氏兵ヲ將井テ之ヲ征セントノ事ハ總理衙門  
ニ於テハ未タ之ヲ知ラスト是レ蓋シ一時ノ遁辞ナラ  
ントハ當時既ニ人ノ察スル所ニシテ爾後復タ贈リタ

ル書ノ明文ニヨリテ之ヲ考フル氏ハ更ニ明子ニシテ  
細ニ論スルニ及ハサルナリ又總理衙門ヨリノ書ニ今  
告タル所ノ主意ハ專ラ北京駐劄ノ外國公使等ノ勸ム  
ル所ニ依レルモノナリト  
凡ソ蕃人兇暴ノ罪ヲ問フニ當リ兵ヲ牽井スシテ談論  
ニ及ハントスルハ帝ニ日本支那ノ兩國ノミナラス歐  
米各國ニ於テモ甚タ不都合ノトナラス又公使柳原  
既ニ清國ニ向ヒテ發シタルニヨリ日本政府ハ之ニ應  
スルニ今回ノ事件總テ公使柳原ニ委任スルヲ以テ同  
官ト面議スヘシト一言明答セシノミナリ  
是ヨリ先キ日本公使ノ一行ハ上海ニ著セシ氏潘蔚旅  
館ニ來リ今ホルモサニ使センカ為メニ將ニ福州ニ到  
ルノ途ニ在ルヲ以テ告ク茲ニ於テ公使柳原ハ支那政



府ノ意見ヲ質問セント欲シ常式ニ依ラスシテ急ニ會  
合センコトヲ約ス蓋シ其意或ハ支那使節ヲシテホルモ  
州蕃地ニ到ラシメス且ツ好機ニ投シテ情實ヲ探ラシ  
ト欲スルニ在ルカ然レモ支那政府ニ於テ公然之ヲ布  
告スルモノナレハ何ソ俄カニ之ヲ變スルノ理アラ  
シヤ潘蔚曰ク特命大使況葆禎ハ直チニ西郷ト面議セ  
ンカ為メニホルモサニ向テ既ニ發セリト柳原ハ之ヲ  
聽テ曰ク夫レ斯ノ如キハ實ニ無用ノ時日ヲ費スニ似  
タリ何トナレハ都督西郷ハホルモサ蕃地ノ事ヲ處ス  
ルノ權アリト雖モ兩國政府ノ間ニ起ル所ノ論議ヲ決  
スルノ權ナシ若シ又大使況ト會スルコトアルモ必ス其  
決ヲ本國ニ問ハサルヲ得サレハナリ故ニ兩國政府ノ  
為メニ貴官ニ告ケン我カ出ス所ノ書ヲ大使ニ傳ヘ復

々大使ヲシテ總理衙門ト高議セシムルニ如カサルナ  
リト  
此時柳原ヨリ潘蔚ニ渡シタル書ノ大畧ハ西郷ハ實  
ニ日本政府ヨリ癸シタル諸軍ノ大都督ニシテ實ニ  
ホルモサ蕃地ノ人民ヲ處分スルノ全權アレモ支那  
政府ノ使臣ト議シテ事ヲ決スルノ委負ニ非ス予ハ  
即チ我政府ノ特命ヲ奉シテ貴國政府ト事ヲ議決ス  
ルノ任ナリ故ニ請フ貴官大使況ニ此旨ヲ告ケテ以  
テ予ト熟議セシメシコトヲ  
副使潘ハ此事ヲ承諾セシカト事既ニ遅クシテ大使況  
ヲシテ此議ニ從ハシムルコト能ハス或ハ言フ潘陽ニ柳  
原ニ諾スト雖モ陰ニ大使ニ告ケス躬カラ決シテ事ニ  
此ニ從ハシメスト然レモ又疑ヒナキコト能ハス斯クテ



潘爵ハ福州ニ至リテ大使沉ニ合シ即時ニ其一行ト共ニ開帆シテ六月二十日瓊瑯湾ニ到着セリ  
既ニシテ副使潘爵ハ西郷ト面會シ上海ニ於テ柳原ト會合セシ事ヲ以テ問ヲ發シ都督西郷ノ返答ヲ聞キ大ニ歎シテ曰ク日本政府ノホルモサニ兵ヲ發シテ蕃人ノ罪ヲ問フニ如何ソ其事ヲ以テ支那政府ニ告知セサルヤト然レモ若シ預メ事ヲ告ルニ斯ノ如ク細密ヲ以テセハ支那政府モ亦日本ノ軍兵ニ對スルノ兵ヲ發シテ戰ヲ援クルニ至ルヘシト雖モ既ニ茲ニ及ニテ事ニ関セント企ルカ如キハ又遲シト云フヘシ  
西郷ハ之ニ答フルニ我政府ノ企ル所既ニ之ヲ報告セシ事ヲ以テシ之ニ加フルニ前ニ日本特命大使副島ヲシテ貴國ニ遣リ別ニホルモサ生蕃ノ事ヲ議セシム何

シソ之ヲ告ケスシテ兵ヲ發スルノ理アラニヤト支那ノ使臣又曰ク實ニ前年日本ノ使節北京ニ來リ日本政府ノ書ヲ出セリ然レモ福州ト北京ノ間ニ於テ之カ妨ケヲ生スルヲアリテ竟ニ其議ヲ遂ケシメサルニ至レリト西郷又曰ク當時主トスル所ノ使事略完成スト雖モ其他我國民遭害ノヲ議スル等ニ至リテハ歸朝已ニ逼ルヲ以テ或ハ之ヲ畢ラスシテ歸ル故ニ充分ニ此議ヲ遂ケタリトスルハ誤認ナリト潘又曰ク我レ既ニ之ヲ知レリ今都督ノ之ヲ辨明スルノ權利ヲ爭フニ非ス又今日本人ノ企ル所ヲ曉リ且ツ之ヲ遂ルノ難カラサルヲ保ツ然レモホルモサハ全島支那ノ藩屬ナレハ其地ノ住民ヲ賞罰スルハ我政府ノ責任トスル所ナリ故ニ一千八百七十一年琉球人ヲ掠殺セシ者ヲ糾問ス



ルモ支那政府ノ職ナリ是レ予ノ今日奉使スルニ當リ  
テ最モ緊要ノ議トスル所ナリト此時台湾府ノ道臺告  
ケテ曰ク日本人ノ主トスル所ハ該島東海岸ナルピラ  
ムノ住民ヲ攻伐スルニ在リト聴ケリ故ニ若シ然ラハ  
我ヲシテ之ヲ亂サシメンコトヲ願望セリト茲ニ至リテ  
誓ラク答フルコトナシ恐クハ日本人ハピラムニ對シテ  
怨言スル所ノ事實ナキヲ以テ答フヘキ言ナキニ因ル  
ナラシ

斯クテ潘爵ハ嚮ニ柳原ト會合セシ片ノ書ヲ出セリ西  
郷受ケテ之ヲ讀了シテ日本政府ノ数次布告シタル月  
的ヲ反覆スルハ日本公使ノ任タルヲ知レリ蓋シ日本  
政府ノ布告シタル大趣旨ハ牡丹人ノ漂民ヲ掠殺スル  
者ヲ征伐シ充分ニ之ヲ懲シ以テ再ヒ兇暴ノコトナカラ

シメンコト期スルニ在リト  
潘ハ西郷ノ讀過スルヲ待チ問テ曰ク都督ハ後來ノ兇  
行ヲ防カンカ為メニハ如何ナル計策ヲ決定セリヤ西  
郷答テ曰ク予カ見ル所ヲ以テ將サニ處スル所アラシ  
トス必ス其當ヲ得ンコトヲ察ス然レモ今之ヲ告ルカ如  
キハ欲セサル所ニシテ且ツ未タ其事業央ニ至ラスト  
蓋シ蕃人ノ未タ罪ニ服セサル者アリ之ニ依テ日本ノ  
隊兵尚ホ南方蕃地ノ各所ニ屯成スル者アルヲ以テ其  
計策ヲ告ルハ總テ不都合ト思ヒシナルヘシ使臣潘問  
テ曰ク吾ハ我政府ノ嚴命ヲ奉シ日本都督ト熟議シテ  
以テ蕃地ノ事ヲ治メンカ為メニ該地ニ來レルナリ貴  
官ハ此目的ニ依テ互ニ事ヲ處スルノ意アラサルヤト  
西郷答テ曰ク予モ亦我政府ノ特命ヲ奉シテ該島ニ來



ル然レ其職トスル所ハ唯蕃人ノ我民ヲ劫殺セシ者  
ノ罪ヲ問ヒ之ヲ制シテ再ヒ暴横ノヲアラシメサルニ  
在ルノミナレハ支那使臣ト熟議スルカ如キハ予カ任  
トスル所ニアラスト又曰ク予茲ニ到着セシヨリ該地  
ハ支那ノ管轄ニ属スルト言フ蕃人アルヲ聽カス而シ  
テ又住民ハ極メテ蠻野ノ夷俗ニシテ各人躬自ラ一身  
ヲ脩ムルノ外絶テ法則アルヲ知ラス此ヲ以テ暴種族  
ノ為メニ苦シム者甚タ多ク唯強者ノ救恤ヲ待テ之ト  
分タシテヲ望ム予ハ之ヲ見ルニ忍ヒスシテ僅ニ之ヲ  
分ツ然レ其貴官ノ談スル所ヲ助クルカ如キハ固ヨリ  
我圖ラサル所ニシテ又今之ヲ諾シテ為スカ如キモ我  
權外タル論ヲ俟タサルナリト藩爵又問フニ前議ヲ主  
張シ議ヲ遂ケテ以テ事ヲ與ニセンヲ以テスト是レ

固ヨリ確然之ヲ定メ難シト雖其恐クハ外国人ノ勸諭  
ニ依リタルモノト思ハル然レ其日本都督ハホルモサ  
全島ハ自國ノ管轄ナリト毎ニ支那ノ布告スル所アル  
ハ固ヨリ之ヲ知レ其敢テ之ヲ肯セス且又既ニ副島及  
ヒ其他ノ使臣北京ニ於テ之ヲ辯論シ預メ其議ヲ整フ  
ルヲ知レハ茲ニ之ヲ爭論スルモ更ニ益ナキヲ以テ藩  
ニ告ケテ曰ク貴官若シ前議ヲ執テ決論セシトヲ思ハ  
、貴國ニ遣リタル日本公使ト談論スル固ヨリ當然ナ  
リ尚ホ詳細ニ之ヲ論スルキハ事既ニ兩國ノ間タニ生  
シタル爭議ナレハ苟クモ遠ク蕃地ニ在テ兩委負ノ尽  
スヘキ所ニ非スト断然トシテ意色甚タ決ス此ニ至リ  
テ會議忽チ終レリ



第二十八回

臺灣内地へ支那人ノ來リシ事○結局ノ會議アリシ  
事○威光ヲ輝カマカセシ事○其説ヲ詳カニ論セシ  
事○談論中言語ノ激烈ナリシ事○實證ヲ取テ論明  
セル事○懇情ヲ以テ遇セラレシ事○和睦ノ條約ヲ  
結ハンヲ暗ニ知ラセシ事○支那人ノ到著アルニ付  
日本人ノ禮節アリシ事○日本ノ兵士ト支那ノ兵士  
ヲ比スルニ其狀相反スル事  
借又余ノ聞ク所ニ從テ之ヲ論スレハ其翌日ハ終日支  
那人ノ費ス所トナレリ蓋シ支那人ハ其近隣ナル海岸  
ノ獨立部族ト通信ヲ結ハントシ且ツ又是迄日本人ノ  
頗ルカヲ用ヒテ種々百般ニ撫育セントシタリシ所ノ



台湾内地ノ生蕃等ニ種々ノ進物ヲ贈リ其上使ヲ發シ  
テ通信ヲ結ハシト云ヘリ然レモ斯ル事件ハ支那人  
ノ力ヲ以テハ必ス穩便ニ遂ケシト甚ク難カル可シ元  
來ホルモサ人ハ支那人ヲ甚ク怨望シ殊ニ遠國ヨリ來  
リテ其言語已レニ解シ難キモノ甚シキヲ以テ此時支  
那人ノ斯ル進物等ノ事アルモ蕃族ノ怨意ハ昔日ニ替  
ルテ無カル可シ而ルニ支那人ハ何カナル幸ヒニヤ此  
時内地ニ到ラントスルニ終ニ僅少ノ妨ケヲ見スシテ  
無難ニサワリト其他二三ノ部落ニ到著セリ是其部落  
ノ酋長ハ性質頗ル溫良ナルニヤ但シ支那人ハ牡丹龜  
仔角ノ部族ハ強猛ニシテ狎レ近ク可カラサルヲ知ル  
ヲ以テ始メヨリ此等ノ部族ニ到ラントスルノ念ナキ  
ト論ヲ俟タサルナリ畢竟此時支那人ハ蕃族等ニ斯ル

種々ノ進物ヲ贈リ何等ノ通信ヲ結ヒシニヤ余ニ於テ  
ハ未タ知ラサル所ナリ察スルニ日本士官等モ此事ニ  
於テハ別ニ探報ヲ得サルカ如シ固ヨリ日本人ハ蕃族  
ヲ誘引シテ漸々己ノ兵士等ニ心服セシメ終ニ蕃人ノ  
意ヲ迎ヘントスル等ノ念ナキハ其天然ノ性ナレハナ  
リ  
日本都督西郷ト支那ノ使節ノ間ニ會議アリシカ是則  
此事件ノ結局ニシテ最モ重大ノ會議ナリ但シ是會議  
ハ六月二十四日ノ午後ヨリ始マリ翌二十五日ノ黄昏  
ニ至ル備此會議ニテ終ニ決定ニ及ヒシ事ハ何等ノ事  
ナリト云フニ日本兵士ハ一先ツ戦争ヲ止メテ事ノ成  
否ヲ俟タント云フニ飯セリ假令西郷都督ハ此事ヲ以  
テ己ノ責任トシ之ヲ獨斷ニ決スルコトハ嫌ヒシト雖レ



支那人ノ言フ所ヲ以テ之ヲ日本政府ニ送り而シテ已  
ノ思フ所ト政府ノ趣意ト相ヒ叶ヒシ後ニナスノ一ハ  
隨分為シ能フ可キヲ見出シタルカ故ナリ此時若シ支  
那使節ノ論ハ其使節ヲ送リシ所ノ人ニ依テ保タレ且  
ツ其言ヒ出ス所ノ約束ヲ以テ信實ニ之ヲ為シ且ツ速  
カニ之ヲ其上等使節ノ決スル一アリシナラハ必ス夫  
ヨリ從テ起レル事件ハ無カリシナル可シ故ニ其談論  
ノ終ニ数十時間ニ亘リ且ツ是ヨリシテ種々凡百ノ細  
事ヲ引起シ終ニ和親ノ條約モ破レントスルノ勢ニ及  
ヘルナリ此事ノ顛末ヲ爰ニ詳カニ記載セン一ハ如何  
ニモ好マシカラサルニヨリ概シテ之ヲ言フハ日本  
都督モ支那ノ使節モ各己ノ私意ト己ノ國威ヲ辱カシ  
メサラン一ヲ思ヒ各勝手ノ事ノミ言ヒタルカ如ク支

那ノ使節ハ言フ甚夕謹ミ小心兢々トシ加之辨舌爽カ  
ナル性質ナリシカ都督西郷ハ少シモ修飾ナク明カラ  
サマニ事ヲ論スルノ性質ニテ其談論ノ風ハ頗ル禮節  
ヲ失ハスト雖モ余ノ考フル所ニテハ支那人ハ因循ニ  
シテ遁辭詐偽ヲ逞シウスルヲ以テ之ヲ明詳ニ面折セ  
シハ餘リニ激論過キタルニ似タリ蓋シ此時此二人ノ  
言語少シク誤ルハ兩國ノ關係甚夕僅少ノ事ニアラ  
ス而シテ此蕃地ヲ以テ後來己ノ有トセントノ意ヲ互  
ニ懷ウカ如ク此時支那ノ使節ハ日本都督ニ謂テ曰ク  
我國ノ政府ハ後來必ス事ノ破レサランカ為メニ其証  
トナル可キモノヲ貴國政府ニ與ヘントスト西郷之ニ  
答フルニ其証トナル可キモノ我ニ與ヘン一予ニ於テ  
少シモ疑ナシト雖モ然レモ必ス其証ヲ以テ貴國ノ將



來之ヲ守ラニヤ否未タ知ル可カラスト曰フ此時支那  
使節ハ何ヲ以テ然リト曰フヤト言ヒケレハ西郷ハ又  
之ニ答テ曰ク君知ラスヤ此回此台地ノ事件ニ就キテ  
ハ貴國ノ言全ク詐欺ナリト云フ可シ今ヲ距ル一僅カ  
ニ二年前弊國ヨリ貴國ニ訊問セル一ハ貴國既ニ能ク  
之ヲ知ラニ然ルニ今日ニ至テハ全ク之ヲ知ラスト云  
フ是其一ナリ又前ニ此台地ニ就キ其屬スル所ハ全ク  
我ノ膜外ナリト云ヒ而シテ近日ニ至テハ全ク相反シ  
從來此地ハ我版圖内ノ地ナリト云フ是其二ナリ又牡  
丹人ノ我人民ヲ害セシニ由テ一千八百七十一年已來  
曾テ之ヲ罪セン一ヲ開キタリシニ今ニ至テ日本人ハ  
之ヲ罪セン一ニ就キ此國ニ來ル一雖我國ヲモ共ニ  
同道セサルヲ以テ大イニ恨ムル所アリト云フ是其三

ナリ故ヲ以テ之ヲ考フル所ハ貴國ハ此地ヲ以テ已ノ  
藩屬トセントノ一如何ニモ信シ難キハ勿論ナリト曰  
フ此時支那ノ使節潘霽ハ忽チ眼ヲ瞑カラシ西郷ニ向  
テハ述ヘサレニ通辨官ニ謂テ曰ク日本都督西郷公ハ  
右様ノ言語ヲ癸スルノ人ニアラス故ニ汝ハ西郷公ノ  
言フ所ヲ以テ殊更ニ惡キ様ニ通辨セシ一疑ナシ我今  
之ヲ以テ汝ノ主公ニ告ケントスト然レニ西郷ハ支那  
使節ノ是等ノ遁辭ヲ言フモ敢テ之ヲ以テ承知スルカ  
如キ性質ノ人ニアラサルカ故ニ又謂テ曰ク是全ク通  
辨官ノ責ヲ受ク可キ一ニアラス正シク我ノ意中ヨリ  
出テタルモノニテ全ク此言ニ相違無キヲ以テナリト  
支那ノ使節ハ忿怒益烈ケシク今マ忍ビ難ク見エケレ  
ハ西郷徐カニ曰ク若シ此言ヲ以テ甚ク不滿意ト思ハ



ニハ此事今日ニ於テ決シ難シ故ニ又他日ヲ期シテ  
商議スヘキノミト斯ル討論ハ蓋シ屢起ルモノニアラ  
ス然レモ是等ノ事アリシヨリ終ニ日本士官ハ如何ナ  
ル和親ノ條約ト雖モ支那人ヲシテ止ムコトヲ得ス日本  
ノ意ニ從ハシムルニ非レハ之ニ同意セサランコトヲ示  
スニ足レリ

此詳説ハ則チ前置キニテ最初ヨリ支那ノ使節潘ノ本  
意ハホルモサ全島ヲ統轄センカ為メニ支那政府ノ權  
利ヲ貫カントスルニ在ルカ如シ又日本都督ハ最初ヨ  
リシテ此事ハ屢論破セントスルコトニテ幾度反覆シテ  
之ヲ言フモ許サ、ル所ナリ蓋シ日本都督ノ意ハ全ク  
其人民ノ遭害ヲ以テ其罪ヲ問ヒ後來斯ル事ノ決シテ  
無カラシメントスルニ在リト是其常ニ論スル所ナリ

斯クテ次第ニ考究スルニ從ヒ漸ク他方ニ向ヒ終ニ此  
葛藤ハ支那ニ於テ此後此地ニ於テ斯ル舉動ノ無カラ  
ン様處置ス可キト云フ事ニ至リシカ前ニ記載セル所  
ノ論議ニ付テ少シク都合ノ好キコト起レリ其事如何ト  
ナレハ時限ノ移ルニ從ヒ暗ニ支那ノ方ヘノ知ラセラ  
生シ支那ニ於テハ此事件ニ付キ義氣ノ全ク實體アル  
證據ヲ以テ日本ニ與ヘンコトニ至レリ是全ク日本ニテ  
手月ヲ以テ暗ニ知ラスルコトヨリ起リシモノニテ其論  
左ノ如シ若シ此台地全ク實ニ支那政府ノ統轄ニ歸ス  
ルモハ必竟日本ニテハ支那ニ於テ討戮ス可キニ却テ  
之ヲ怠リシヨリ此回日本ニ於テ其罪ヲ問ヒ從テ之レ  
カ為メニ大イニ他國ニ於テ巨萬ノ金銀ヲ費ヤセシナ  
リト蓋シ此言固ヨリ設ケタルニアラス必竟偶然ニ出



テタルモノト雖氏余ヲ以テ考フルニ是亦少シク切ニ  
之ヲ求メタルニ似タリ但シ北京政府ハ日本ノ出費ヲ  
償フトスルモ其金額果シテ能ク日本ノ費ス所ヲ充タ  
スニ足ル歟豈是然ランヤ然レ氏此事兩國ニ於テ之ニ  
同意スルヲ最モ信義ノ事トセリ是ヲ以テ終ニ多ク討  
論ノ後互ニ一結セシハ六月二十五日ノ黄昏ナリ但シ  
其一結セル事ハ先ツ日本兵士ハ彌、此事ノ落著ニ至ル  
マテ其間兩國政府ニ於テ和親ノ條約ヲ取結フヲ以テ  
一應戦争ヲ止ム可シトナリ其條約ノ箇條ハ全ク左ニ  
掲ルカ如ク確實明詳ナルモノナリ

一支那政府ハ日本政府ニ此回費ス所ノ償金ヲ出ス  
可シ  
一支那政府ハ他日異邦ノ人台地ニ來ルト雖氏土人

右ノ條約彌、決定ニ及フノ後日本兵士ハ此地ヲ退ク可  
キ事

因ニ云ク此條約ノ事定マルト齊シク早速電信ヲ以  
テ廈門ヨリ「ニユーヨーク、ヘラルド」新聞社ニ報知セ  
リ因テ本社ニ於テハ之ヲ六月中旬ノ新聞紙ニ記載  
セリ此時支那並ニ日本ニ在留セル歐米各國ノ人々  
ハ此事ヲ非トシ喋々トシテ之ヲ論シテ曰ク支那帝  
國ハ何等ノ事故アツテ償金ヲ出ス事ニ同意セシヤ  
ト曰ヒ又日本帝國ハ何ノ故ヲ以テ其償金ヲ盡ク取  
ラサル杯ト大イニ之ヲ嘲弄セリ之ニ因テ日本ニ於  
テハ斯ル事ヲ以テ其結局トスルハ甚タ國辱ニ關ス  
レハ更ニ其處置ヲ改ム可シト論議紛々トシテ起リ



傲慢ニモ之ヲ唱フルモノ數ヲ知ラス而シテ又支那  
ニ於テハ猶ホ寛仁ノ處置ニ定メンコトヲ言ヒ張り甚  
々穏ヤカナラサリケリ斯クテ兩國ノ論議甚々紛擾  
ヲ極メ商議容易ニ一結セス終ニ荏苒四ヶ月ヲ經テ  
此年十一月ニ至テ始メテ相ヒ同議セリ蓋シ日本ハ  
流石ニ東洋ニアル執拗狡猾ノ風習ヲ以テ其間盡セ  
シ百方ノ偽計ハ終ニ其成功ヲ助クルニ至リタリト  
云フ

支那ノ使節ハ此時西郷ト決議セルコトニ就キ北京政府  
ニ於テハ必ス一ノ異論ナキコト疑ヒナシト曰ヒ且ツ又  
予ハ之ヲ言フコトニ就キ十分ノ權利ヲ有セルヲ以テ是  
亦承諾セラレ可シト曰フ然レトモ之ヲ以テ北京政府ニ  
申遣スノ事ハ理ニ於テ當然タルヘケレハ先ツ之ヲ北

京政府ニ上申ス可シト曰フ是ヲ以テ南ホルモサニ在  
ル人數ハ直チニ引退キ日本人ノ此島ニ於テ作事ヲ勤  
ムルコトモ亦實ニ終ル可シトノ事ハ著實信ス可キノ理  
アリトス實ニ日本人ハ支那ヨリノ頼ミニテ其出立セ  
ントスルノ間此地ニ留ルト雖モ必ス一事モ成サ、ラ  
ンコトヲ請ハレ故ニ日本人此地ニ留マルノ間少シモ事  
ヲ成スコトナク終ニ此年ノ十二月ニ於テ此地ヲ引退ケ  
リ但シ此出立ハ必竟斯クマテ延引スルニ非ラサレモ  
北京政府ノ因循シテ決セサリシカ故ニ終ニ茲ニ至レ  
ルナリ故ニ若シ北京政府ニ於テ早ク之ヲ決断セハ此  
出立ハ猶ホ早クニ在リシナリ好シ北京政府ハ巧ミニ  
遁辞ヲ用ヒ猶豫狐疑シテ事ヲ決セサリシモ日本人ノ  
此遠征ヲ行ヒシハ元來ノ目的ヨリ甚々十分ニ仕遂ケ



タルヲニテ始ヨリ先見シタル事トハ遙カニ満足ニ行ハレタルモノナリ竊カニ惟ミルニ此問罪ノ役ハ大ニ其威ヲ示シ且ツ後來ヲ誠ムルニ足ル然リ而シテ世界各地ハ未タ知ラサルモ亜細亞海洋ニ於テ他日日本ニ斯ル暴害ヲ被ムラス者アレハ必ス日本黙シテ止マラサルヲ証スルニ足ル加之從來東洋諸州ノ揖舟ヲ操ル者ハ大ニ此地方ノ暴害ヲ畏レタルヲ爰ニ年アリト雖此役アツテヨリ以來復タ斯ル畏レヲ懷クニ足ラサルニ至ルモ皆豈日本問罪ノ為メニ非サラニヤ苟モ支那帝國ニ於テ此面ノ規約ヲ踐ムノ間ハ斯ル殘暴ノ事ナキ復タ疑ヒナク蓋シ此役ヲ行フニ未タ一國ノ金庫ヲ傾ムクルニ及ハスシテ其功ヲ終フ是此金庫空出スヲヨリ最モ入ルヲ要スルモノナリ然ルニ終

ニ此ニ至レルモノハ亦何ノ幸ソヤ日本ハ前  
前回既ニ記載スル所ニ支那人此地ニ來リ留マ  
ルヲ甚タ僅カナリト雖其間日本人ハ之ニ遇スル  
頗ル禮義ヲ具ヘシハ日本人天然ノ性質ニテ其條  
約ノ會議相續キテ甚タ長カリシカ終ニ禮節ヲ  
怠ルヲナク終始實ニ一ノ如クナリシ支那人  
此地ニ上陸スルノ時ニ當テ日本人ハ今時ノ  
兵制ニ比スレハ大ニ異ナリテ殆ント古風ノ  
兵制ニ似タル種々ノ打粉ヲナセシ一隊ヲシ  
テ出テ、以テ支那ノ使節ヲ迎ヘシメタリ  
斯ル外形ヲ以テ之ヲ過スルハ殊更ニ為セシカ  
如クナリシト雖其蓋シ別ニ意アリテ為シタル  
ニハ非サルナリ儲又支那ノ使節ハ夫ヨリ  
日本ノ本營ニ來リ會議ヲ為セシニ其間  
始終断ヘスシテ兵士一大隊ニ依テ伴ハレ  
タリ爰ニ亦



日本人ノ美々敷シテ且ツ勇壯ナル相貌ヲ支那兵ノ今  
回此地ニ來レルモノニ比スルニ支那兵ハ實ニ賤ム可  
キ有様ナルカ故ニ日本兵ヨリ下ル凡ソ二等計ナリ而  
シテ日本兵ハ斯ル勇壯ノ相良ノミナラス其上起居動  
静悉ク禮ニ叶ヒ能ク支那人ニ對スルヲ以テ實ニ見ル  
モノヲシテ覺エス感歎ノ心ヲ生セシメタリ今此兩兵  
ノ景況ヲ語ラシニ日本兵ハ前ニ云ヘルカ如ク起居輕  
爽ニシテ動靜甚タ規律アリ而ルニ支那兵ハ名ハ精兵  
ナリト雖氏其性怯弱ニシテ風俗モ亦陋醜笑フヘキ有  
様ナリシ殊ニ其持スル所ノ兵器ハ頗ル粗造ニシテ何  
ノ用ニモ立ツヘカラス兩兵ノ間斯ル差等アルヲ以テ  
此回此地ニ來レル支那人等ハ覺テ一驚三歎セサル  
モノナカル可シ但前ニモ云ヘルカ如ク日本人ハ明ラ

サマニハ償金ノ事ヲ談セス只顧禮讓ヲノミ重シ實  
ニ此事ハ夢ニモ知ラサルカ如クニシテ支那人ニ待遇  
シ且ツ支那ノ使節ノ内地ニ入ラントスル時日本兵ハ  
能ク之ヲ護送シテ終ニ蕃人ノ暴害スルヲナキ様注意  
シ此等ノ厚意アルモ支那人ハ更ニ之ヲ厚意ナリト思  
ハサルニ似タリ亦何ソ愚ナルヤ  
本月二十六日ニ於テ支那ノ使節ハ此地ヲ發シテ本國  
ニ歸レリ蓋シ昨二十五日琅璫ニ於テ暴風ニ遇ヒ遂ニ  
南方ニ吹流サレシヲ以テ止ム事ヲ得ス終ニ打狗ニ上  
陸シ打狗ハ此地ヲ去ル凡ソ二十里ナルカ今日再ヒ打  
狗若クハ台湾府ニ於テ乘船シ夫ヨリ相發スト雖氏海  
上甚艱難ナリシト云フ聞ク其軍艦ノ水夫等始メテ此  
等ノ地ニ於テ上陸セントスル時誤テ溺死セル者数人







ソ此回此委負ノ轉致セル書翰ハ何レモ警戒ニシテ即チ此人々ノ支那政府ニ對セル敵意ノ拳動ヲ幫助セザラントヲ諫ムルモノナリ儲又此種類ノ布告ハ必竟無用ノ長物ニシテ固ヨリ斯ルトヲ要スルト萬々有ルトナシ如何トナレハ爰ニ此事ニ就キテ二箇ノ道理アリ其第一ハ此人等曾テ敵意ヲ以テ支那ニ對スルト決シテ無ク又其第二ハカツセル氏及ヒワツソン氏ノ兩名ハ其勤ムル所ノ役ハ必スシモ無クテハ叶ハサルノ事ニアラス故ニ兩氏等此地ニ到着セシ後三四日ノ間ハ所々見物杯ヲ為シ全ク傍觀者タルカ如クナルヲ以テナリ尤モ其後一二ノ事件ニ關係セリト雖モ必竟此事ハ偶然ニ出タルモノニテ全ク職分外ノ事ナリ然ルニ支那官吏ハ常ニ外國人ノ暗ニ諷告スルノ為メニ鼓動

サレ是ヲ以テ果シテ一大緊要ノ事ト想像シテ大イニ畏懼シ代理ヲ發シ以テ外國文武ノ兩官ニ説得セシメ其台地ニ在ル所ノ外國人ニ警戒ノ書翰ヲ贈ラレシメヲ乞ヘリ思フニ外國文武ノ兩官負等亦之ヲ以テ大イニ然リトセシヨリ短ナル報告ヲ以テ彼等ヲ誡マシメシトヲ許可シ以テ此回ノ一事ニ付テハ必スシモ戰爭ノ事ニ関スルナク且ツ支那トノ爭論ニ及スルトナク速ニ之ヲ退カシトヲ望メルナラン歎儲又此使者ハ私ノ書翰ヲ同氏等ニ渡セル後又々左ニ掲ル所ノ布告書ヲ出シテ之ヲ示シタリキ蓋シ此回此遠征ニ從ヒ來レル米人ハ僅ニ三人ニシテ此中直チニ屬スルモノアリ又直接ニ屬セサルモノアリ然ルニ此三人ノ者ニ布告スルカ為メ無益ノ費ヲ以テ其布告ヲ出板セリ然レモ



領事官ハ更ニ此無益ノ費ヲ厭ハス假令之ヲ金銀ノ費ニ誤ルトモ寧口此事件ニ付テ事ヲ誤ラサルヲ以テ良シトセリ

布告

凡ソ合衆國ノ人民ハ此回日本ニ於テ<sup>台北</sup>臺灣島ニ兵ヲ出シ其罪ヲ問ハントスルニ就テハ以來必ス之ニ關係スルヲ禁ス若シ之ヲ犯スモノハ局外中立ノ法ヲ破ルカ故ニ速カニ之ヲ捕縛シ寫ト其次弟ヲ糾問ス可キモノナリ

一千八百七十四年六月十六日

廈門及<sup>其</sup>其藩屬總理合衆國領事館ニ於テ

前々先首<sup>在</sup>在北京合衆國代理公使ホ<sup>在</sup>江ス<sup>所</sup>アルス<sup>ル</sup>職<sup>に</sup>對シテ未ウ<sup>ル</sup>ヤム氏<sup>ノ</sup>命ヲ奉ス<sup>ル</sup>此布告ハ必不偏ナク私ナキ物ニテ正理ニ叶ヒシモノト思ヒシヨリ發シタルモノナレ<sup>ル</sup>其實ハ果シテ失策ナク若シ此布告ニ就キ或ハ嚴ニ注意シテ論スルモノアル時ハ支那在留ノ領事等ハ其名聞ヲ汚サニ<sup>テ</sup>知ラサル甚タシト云フ可<sup>ク</sup>果シテ其受クル耻辱ヨリハ一層甚シキ<sup>ト</sup>明々タリ蓋シ此事件ト及ヒ他ノ教事ニ就キ以テ之ニ関涉ス可<sup>キ</sup>ノ權利ハ華盛頓府ノ上等官吏等ニハ承認セラレサルモノナリ而シテ此時支那在留ノ領事等之ニ口嘴ヲ挿ミシハ疑モナク捨テ問ハレサリシヲ以テ大難モ小難ニテ濟ミタルナリ



備又此使者ノ此地ニ來ラントスルハ厦門ニ於テハ市  
人等大イニ動搖スト此使者ノ曰フ所ニ據レハ厦門ノ  
土人等ハ相唱ヘテ日本人ハ今ニモ我國ニ攻入ラント  
スルノ勢ナレハ今日我等何ヲ以テ斯ク安心ニ業ヲ勤  
ムヘキヤ早ク此地ヲ去テ乱ヲ避ケン<sub>ト</sub>ヲ圖ル可シト  
人心洶々殆ト湧クカ如キノ勢ナリシト云ヘリ  
幾<sub>テ</sub>ラス支那ノ使節沈潘ノ兩氏ハ本國ニ歸帆セリ蓋  
シ本國政府ト此事ヲ熟議センカ為メナリ因テ日本ニ  
テモ一先ツ南半島ノ事業ハ悉ク之ヲ廢シ都督西郷ハ  
此回新夕ニ來ルル人々ト大イニ懇情ヲ通シ而シテ各  
處ニ於テ新夕ニ陣營等ヲ設ケン<sub>ト</sub>スル<sub>ト</sub>ヲ廢シテ支  
那使節ノ未夕來ラサル前ニ仕懸<sub>ク</sub>置キタル牡丹屯仔  
浦<sub>ト</sub>ノ酋長等ト<sub>テ</sub>會議ヲ尋キ此等ノ蕃族ニ諭示スル

ニハ先ニ甚夕抗敵ノ舉動ヲナセシモノト雖<sub>レ</sub>頗ル信  
義ヲ以テ來リ悉ク從服セシ上ハ今後必ス先ニ施シ夕  
ル如キ嚴ナル懲罰ヲ施ス<sub>ト</sub>ナシ而シテ其酋長等ハ熟  
蕃ノ酋長等ノ來リシカ如ク日本陣營ニ來ル可シト云  
ヒタレ<sub>レ</sub>猶ホ其酋長等ハ此言ヲ聞クモ甚夕不審ヲ懷  
ケリト懇情アル蕃人ノ云フ所ニ據レハ牡丹人ハ今斯  
ク敗北シタル後ナルニ猶ホ日本陣營ニ來ル<sub>ト</sub>ヲ大イ  
ナル耻辱ト思ヒ居レリト



此道第三十回  
ホルモサ海岸ノ暴風雨○逃避ノ急ナル事○已ムヲ  
得ス厦門ニ行ク事○市民驚慌ノ事○合衆國官吏ノ  
所為○福建總督ヨリノ書翰ノ畧○支那人大イニ米  
人ノ助カヲ畏懼セシ事○管轄問要ノ事○官吏受付  
ヲ再論スル事

此時七月ノ初メナリシカ余ハホルモサ海腰ノ暴風ニ  
遭遇シ備サニ其激烈危険ヲ經誠スルヲ得タリ今其光  
景ヲ把テ以テ此ニ説明セントス余ハ臺島ノ日本陣營  
ニ在ルノ日稍此地ヲ厭フノ念ヲ生シ將ニ辞シ去ラシ  
トセリ其ノ頃營所ニ於テハ敢テ危殆ノ虞アルニアラ  
サリシト雖ニ適時疫ノ大イニ行ハレテ營中幾ント之



カ害ヲ被ラサル者ナク其艱苦困難ノ狀眞ニ見ルニ堪  
ヘサルモノアリ而シテ余ハ僅ニ之ヲ免ルヲ得タル  
ヲ以テ六日ノ午後汽船高砂丸ニ至リ歸装ヲ準備セリ  
晚ニ臨ニテ悲風始メテ西方ニ起リ勢ヒ漸ク烈シク船  
遂ニ岸ニ達スルヲ得サリシカ次早ニ及テ試ミニ小蒸  
氣船ヲ出シ海濱ニ遣ルト雖モ波高ク船小ニシテ營所  
ニ達スル能ハズ己ムヲ得スシテ錨ヲ本船ト海岸トノ  
半途ニ投セシカ午ヲ過ルヲ暫時ニシテ忽チ高砂丸ノ  
其數錨ヲ曳キ波浪ニ飄蕩シ危險ノ處ニ至ルヲ見ル其  
地ハ暗礁多クシテ各所ニ碁布セリ既ニシテ錨索流失  
セシヲ以テ同船ハ直チニ開行シテ澎湖島ニ向フ蓋シ  
此島ニ一良港アルカ故ニ之ニ據テ危險ヲ避ケンカ為  
メナリ而シテ夜ニ入テ風威益烈シク人心更ニ畏懼ヲ

増シ避匿ノ處ニ至ルヲ危ミシカ遂ニ航路ヲ變シ廈門  
ニ向テ駛行シ辛ヲシテ海港ニ入テ危難ヲ避ケタリ許  
多人愁悶ヲ經シ後チ此ニ至テ始テ青天白日ニ遭ヒタ  
レモ其危險ノ性命ヲ喪フナキハ余ハ初メヨリ自ラ信  
シテ疑ハサル所ナリキ高砂丸ハ前ニ「テル」ト號スル  
汽船ニテ舊船ナレモ最モ堅固ノ船ナリ該船及ヒ東京  
丸兩船ノ賣買ニ付テハ在東京合衆國公使頗ル阻碍ヲ  
ナセリ  
余カ廈門ニ來リシハ眞ニ己ヲ得サルニ出テ敢テ願フ  
所ニアラスト雖モ今却テ該地住民ノ真情ヲ視察スル  
ノ利ト又領事ノ布告ヲ出ス所以ノ理ヲ考究スルノ便  
トヲ得シハ不幸中ノ幸ト謂フ可キナリ抑廈門住民ノ  
形狀タルヤ該地ノ官吏ハ決シテ驚慌ノ狀ヲ顯サルモ



亦市民ノ騷擾ヲハ一モ之ヲ禁遏セサルカ故ニ市民大  
イニ驚動シ家器ヲ携ヘテ多ク内地ニ走り高賈ハ物品  
ヲ收メテ又販カス以テ逃走ノ準備ヲ為シ風声雀唳ヲ  
聞モ猶ホ敵ノ來リ襲フト為ス其畏懼ノ状タル真ニ言  
フ可カラス爰ニ人アリ領事館ノ僕隸タリ敵兵ノ來襲  
セハ其脅迫ニ逢ハシヲ畏レ老父母ヲ携ヘ館ニ來リヘ  
シデルソシ氏ニ頼テ合衆國ノ保護ヲ受ケテ患ヲ免カ  
レシヲ請ヒシニ同氏ハ之ヲ諾シテ暫ク外屋ニ置ケ  
リ以テ其騷然タル状ヲ證スルニ足ル可シホルモサニ  
在ル支那首府臺灣府モ又大ニ震慄シテ逃者ヲ載送  
シ本地ニ到ルノ船毎週陸續トシテ殆シト海ヲ蓋ヒテ  
來リ其紛擾ノ甚シキ廈門ニ過キ夕リト云フ支那人  
ハ戰備ヲ修スル原因ハ蓋シ此等ニ根スト且ツ其紛擾

驚駭ノ甚シキ古ヨリ未タ曾テ此地ニ於テ見聞セサル  
所ナリ  
在廈門合衆國官吏ノ所為ニ於テハ純ラ禮敬ヲ盡シテ  
信義ヲ損セサルヲ識ル余ハ初メホルモサニ航セン時  
嘗テ日本人ノ蕃族ヲ齎懲スル所以ノ説ヲ作レリ而シ  
テ此説ヘシデルソシ氏ノ意見ト相反スルノ故ニ余ハ  
其所論ニ由テ反スルノ理ヲ考フルモ更ニ之カ為メ余  
ノ説ヲ變セサルヲ得サルノ理ヲ認メス且ツ彼レ前ニ  
出ス所ノ告示ハ在北京代理公使ヨリノ示令ニ因テ出  
シタルトノハ余カ記念セサル所ナリ領事ノ余ニ報  
知セシニハ彼ノ福建總督ヨリノ書信ニ因テ初テ該事  
ヲ知り且ツ書中支那官吏ハ大ニ此事業ニ付テ醒悟  
ノ意ヲ表セリト然ルニ總督ト外國領事ト直接ニ文書



ヲ往復セシハ未タ其先例ヲ見サル所ナリ縱令日本人  
ノ企謀至テ小ナリト雖モ大イニ支那百般ノ腐説古傳  
ヲ破除セルハ今總督ノ書ヲ譯出シ以テ之カ証トナス  
即チ左ノ如シ其原書記スル所ノ慶賀問安等ノ語ハ省  
略シテ載セサルナリ  
爰ニ我儕ホルモサ事件ヲ稽考シ併セテ臺灣府道臺及  
ビ揚斌号船ノカビテレンノ申文ヲ推究スルニ日本人  
ノホルモサ蕃民ヲ征討スルハ其策全ク前ノ廈門領事  
ルジヤシンドル氏ノ議ニ出テ而シテカツセル氏其他數  
人<sup>ノ</sup>之ヲ補翼スルヲ知ルナリ又ホルモサノ地ヲ檢考ス  
ルニ昔ヨリ久シク支那ニ隸屬シ其蕃民國ヨリ我國ノ  
治下ニ居リ外邦ノ人民未タ曾テ之ト交接セス此時ニ  
際シ日本ハ外國政府ニ預議セスシテ妄リニ兵ヲ臺島

ニ送リテ蕃民ヲ懲罰ス其都督モ亦我ノ通信ヲ俟タス  
全ク萬國公法ニ背キ彼我兩國ノ締約ヲ破リ兵馬ヲ統  
ヘテ恣ニ瑯瑤ニ浸入シ營ヲ其地ニ構ヘリ我儕退兵ヲ  
請フノ書ヲ都督ニ寄スル兩回又卿ニ呈セントスル所  
ノ書ヲ通商局ニ贈ル茲ニ二次ニ及ヘリ而シテ我儕卿  
ノ通信ヲ得シヨリ寔ニ卿ノ締約上ノ本分ヲ盡シ事ヲ  
平定シ永ク大平ヲ保存シ交際ヲシテ親睦ナラシメン  
トスルヲ知ル我儕眞ニ感謝ニ堪ヘサルナリ我儕前福  
州ノ代辨司長通商局ノ次官沉ニ命シ派シテ廈門ニ發  
行セシメ又在廈門水師提督リニ書ヲ贈リ沉ノ來ルヲ  
俟チ而シテ後チ沉ト俱ニ卿ニ會シ計ヲ議セシム卿幸  
ヒニ咸豐元年(一千八百五十八年)譯者曰按スルニ一千  
八年ニシテ咸豐元年ハ一千八百五十八年ハ咸豐  
一年ナリ宜シク識者ノ考案ヲ乞フノ締約書第一章

文



即チ永ク兩國ノ交際ヲ親睦ニシ互ニ相救助シ侵辱ス  
ル勿ル可シトノ條款ニ遵ヒ願クハ日本都督ヲ諭シ兵  
事ヲ息メ速ニ師旅ヲ收メテ本國ニ還ラシメンコトヲ又  
臺島ニ行キシ所ノ日本艦内ニ在ル貴國人民ノ日本ヲ  
救援シ不善ノ所為ヲ行フ者アラハ其水陸ニ在ルヲ論  
セス俱ニ締約書ノ第十一款ト及ヒ貴國ノ法律ニ據リ  
以テ之ヲ罰シ之ヲ刑センコト是レ我儕ノ深ク卿ニ向ヒ  
希望スル所ナリ而シテ卿ノ我國ニ到リシ以來事ヲ處  
スル方正ニシテ權利ヲ失ハス人民相慶シテ賞讃ノ声  
市街ニ滿ツ是我ノ實ニ謝スル所タリ今ヤ紛事ホルモ  
サニ起リ而シテ卿領事タリ此時ニ當テ卿能ク友愛ノ  
良心ヲ推シ締約ノ條款ニ遵ヒ水師提督リ及ヒ司長沉  
ト合同共議シテ事ヲ處シ卿ノ友情ヲ盡スハ我儕ノ固

ヨリ疑ハサル所ナリ既ニ書ヲリト沉トニ送り之ニ特  
權ヲ附シ廈門ニ於テ卿ト將來ノ經畫ヲ定ムルヲ命ス  
而シテ卿及此兩人ト交接スル但ニ官僚ノ禮ヲ以テス  
ルノミナラス尚ホ朋友ノ情誼ヲ盡シ共ニ事ヲ議セン  
コト是我儕ノ最モ大イニ希望スル所ナリ  
斯クテ次ノ面議ニ於テ大イニ討論シ書ノ盡サ、ル所  
ヲ盡シ其旨趣ヲ明ニセリ抑支那人ハ其心ニ倘シ此後  
ニ関スル米人ヲシテ速ニ臺島ヲ去ラシメハ事必ス與  
シ易シトナシ其說ヲ固執スルヤ明カナリ而シテ其翼  
賛ニ至リテハ多少米人ノ之ニ関スル者ナキニアラス  
ト雖モ其企謀ニ於テハ始終日本人ノ志意ニアラサル  
者ナシ然ルニ支那人ハ甚ク之ヲ憂心シテ米人ヲ退避  
セシメンコトノミヲ思ヒヘンデルソン氏ノ自ラ臺島ニ



到リ同氏ノ權柄ヲ以テ彼等ヲ黜ケンヲ切望セリ是ニ  
於テ領事ヘンデルソン氏ハ戒文ヲ作り米人ノ日本營  
ニ在テ事ニ関スル者ヲ退カシメント力為メ諭セリ其書  
既ニ打狗港ヲ望ンテ發シタルニ支那人ハ猶省意スル  
コヲ得ス更ニ令文ヲ特送センコヲ請求セシカハ此時  
ノ光景最モ非常ヲ極メ合衆國ノデプデーマルシヤル  
支那兵船ニ乘シ行テ壹島ニ在ル米人等ヲ提歸セント  
セリ  
兩人ノ當職者リトハ殊ニゼ子ラルルシヤンドル氏ノ  
征臺ノ役ニ聯結スルニ注意シ幾ント他事ヲ顧念セサ  
ルカ如シ且ツ實ニルビヤントル氏ノ曩ニ厦門駐劄米  
國領事官ノ任ニ在リシカ故ニ心中ヘンデルソン氏ヲ  
促シ急速ニ處置ヲ成サシメントセリ是ニ於テヘンデ

ルソン氏ハ懇ニルビヤンドル氏退職ノ後ハ其位置他  
ノ庶民ニ異ナル無キヲ示スモ猶彼等ハ充分ニ満足セ  
サリシナリ又遵法ノ案件ニ至リテハヘンデルソン氏  
己ノ説ヲ秘セス堂々論シテ曰ク一千八百十八年ニ創  
定セル米國憲法及ヒ一千八百六十年ノ憲法モ共ニ爰  
ニ之ヲ適用スル能ハサルナリト何ヲ以テ之ヲ知ルカ  
即チ曰ク當時ホルモサ蕃民タル唯ニ確然トシテ我合  
衆國ノ親和スル國ノ治下ニアラサルノミナラス目下  
鬪争起ルニアラス且ツ日本人民ノ依托ヲ受ケテ支那  
ヲ敵視スルニモアラス是其法ノ用フ可ラサル所以ノ  
理ナリト其討論ノ最著ナルハ七月九日十日ノ兩議ナ  
リシカ其頃同氏ハ敢テ之ヲ秘セス盡ク記載シテ本國  
ヘ傳送シタリ其後八月六日ニ至リ領事ノ所為忽チ異



途ニ出テ終ニゼ子ラルルジャンドル氏ヲ逮捕セリ這般ノ事件タル余ノ先ニ記セシ如ク合衆國官吏ノ一秘事ニシテ之ヲ明知スル能ハス故ニ其旨意ノ解明瞭然タルカ如キハ能ク之ヲ記載スルヲ得ス支那人ハゼ子ラルルジャンドル氏ノ日本ヲ助成スルニ由テ其心ヲ勞スル少ナカラス今爰ニ其關係ノ證據ヲ掲ケシ福州ノ知府等意見ラルジャンドル氏ニ陳シ其勤務ヲ日本ニ辞シ而シテ我國ニ左袒センヲ請ヒ巧言利ヲ以テ之ヲ誘ヒ青眼丹心ヲ眩惑セントシテ貨品財物ヲ送典シ殆ント人ヲシテ廉耻ヲ忘レ醜名ヲ千載ニ遺サシメントセリ其書タルヤ前ニ合衆國領事館ノ書記官タリシ者之カ為ニ作り此月ルジャンドル氏之ヲ東京ニ於テ領收セリ其之ヲ領收セシ景状ハ勿論

余ノ言フヲ要セサル所ナリ支那人ノ所業ハ曖昧ニシテ毎ニ日本人ノ拳動ニ反對スルニ由テ支那人ノホルモサ全島ニ威權ヲ布ントスルニハ必ス激烈ノ點ニ出ントスルハ既ニ保證スル所ナリ此説タル一ノ追思スヘキコトニシテ茲ニ之ヲ問フ可ラサルモ其證ハ甚タ多ク且ツ分明ナルヲ以テナリ是皆外國人ノ挑唆ニ因テ起セシモノニテ支那人ノ自ラ發動セシモノニアラサル可ク然レモ其證ノ現ニ接近セサルヲ以テ信シ易カラサルモ終ニハ證據顯然トシテ疑念氷解シテ其言ノ誣ナラサルヲ信ス可キナリ而シテ此間應ニ欽差潘爵ノ都督西郷ト面議セシ所論及ヒ余ノ廈門ニ在テ記録ニ載セシ所ノ一千八百六十七年福州通商局ヨリ合衆國領事ニ送リシ書翰ノ公告



ト共ニヘンデルソシ氏ニ寄セシ所ノ福建總督ノ書中  
蕃民ハ必ス支那ノ治下ニ居ルトノ實言ヲ參考ス可シ  
其議論ノ趣意ハ海賊處置ノ議ニシテ領事ノ支那人ヲ  
勵マシ急ニ之ヲ確定セシトテ要セシモノニテ一千八  
百六十七年七月通商局ノ官吏ノ言フ所ハ我國ノ版圖  
内ニ於テ倘シ虐殺ヲ行フ不良ノ徒アラハ必ス之ヲ捕  
ヘ之ヲ刑ス可シト即チ約シテ曰ク我州郡山海ヲ問ハ  
ス決シテ米國人民ヲ切害ス可ラス然レニ蕃族夷民ノ  
居住占據スル地方ニ至リテハ暴殺ヲ行フモ締約書ニ  
遵テ之ヲ懲罰シ讎ヲ報スル能ハス蕃族夷民ハ固ヨリ  
我化外ノ民ニシテ我見テ以テ禽獸ニ異ナルナシトシ  
我之ト相爭フヲ愧ツルカ故ニ蕃族夷類ノ亡狀ニ付テ  
ハ之ヲ紿シ之ヲ謝スル克ハサルナリト

夫レ既ニ斯ノ如シ又何ヲ以テ支那人ノ威權ヲ臺島ニ  
爭フノ無益ナルヲ表示スルヲ要センヤ然リ而シテ  
又何ヲ以テ支那人ノ日本人ヲ以テ確然明瞭ナル支那  
權利ヲ侵犯スル者トナシテ之ヲ卑シメントセシ誇大  
心ヲ壞破スルヲ為シヤ然レニ倘シ之ヲ要セハ則チ一  
千八百六十八年一月十二日通商局ヨリノ書ヲ以テ證  
トス可シ其書タルヤ該局ノ官吏福州司長ト共同シ若  
シ蕃族ニ付テ事アラハ支那人ノ援ケニ頼ラスシテ外  
國人ノ直チニ之ヲ處スルヲ得ルノ權利ヲ認可シ加之  
之カ為メニ蕃族ヲ處スルノ方法ヲ設立セシ所以ノモ  
ノナリ其文甚タ長キカ故ニ譯セスト雖レ其語言ノ如  
キハ固ヨリ信正ニシテ且ツ誤謬アルニアラヌ是時ニ  
歐、米人民ノ航行ニ備フル所ナルモ今也正ニ日本征臺



ノ役ニ適用スルニ足ルヘキナリ且ツ猶証據ヲ要セハ  
余ハ為メニヘンデルソン氏ノ身ノ上ニ就テ之ヲ説ク  
可シ即チ近時五月第一号兵艦ノ去リシ後チニテ又有  
功丸ノ凡ソ瑯璫灣ニ至リシ後チ厦門支那水師提督合  
衆國領事ト會語シ往昔ノ答詞ノ非ナルヲ再三討論シ  
且ツ支那政府ホルモサ蕃民ノ事ニ付テノ問件ヲ擔保  
セシトナキヲ以テセリ是故ニ支那ノ新ニ擔任セシ位  
地ハ其期節日本ノ所為ヨリ晚シ然ルヲ其晚キ位地ヲ  
以テ其早キ所為ニ對シ眞實ノ證據アリトシテ爭ハン  
トヲ企テタリ

第三十一回

ホルモサノ近況○營所ノ形勢○勅使都督西郷ヲ慰  
賞スル事○既成ノ功業ノ事○日本一手ノ勲功○航  
路安穩ノ事○長崎ノ模様○日本全國ノ義氣○國民  
動靜ノ事

斯クテ高砂丸ハ風息ミ雲收テ天氣旣ニ爽カナルヲ以  
テ再ニ臺灣ニ到リ官人ト病客トヲ載セテ日本ニ歸船  
セントシテ投錨シテ準備ヲナセシカ余ハ其小間ヲ偷ミ  
瑯璫灣ノ岸ニ設クル所ノ二營ニ赴キ光景ヲ觀ルニ依  
然トシテ舊ニ異ナラス兵卒ハ葛藤平定セシモ該地ヲ  
去ルトヲ思ハス將士ハ確タル日本政府ヨリノ命令ヲ  
收領セサレハ師旅ヲ還スノ念アラス尋テ龜山ニ至リ



テ市街ヲ縦觀スルニ其地ヤ爽然タル市邑ノ如クニシ  
テ軍兵ノ屯集スル營寨ニ似ヌ各般ノ店舖ニ就テ顧慮  
ナク遊修スル人モアリ或苟且ニ物品ヲ高フ者モアリ  
テ剃頭店ハ人ヲ滿タシ空談囂々トシテ餘席ナク而シ  
テ官吏ハ營所近傍ノ掠地ヲ巡廻シテ事ヲ取り且ツ後  
來ノ不虞ヲ豫防ス官吏ノ中ニハホルモサ事件ヲ結問  
セシノ條ニ付テハ支那人必ス因循ノ性質ヲ表シ速ニ  
決末ニ至リ難キヲ疑フ者モアリシカ此疑團ハ其理ナ  
キニアラス果シテ北京ノ諸大臣不快ノ證迹ヲ固執シ  
テ延テ次ノ二ヶ月ヲ閱タリ又都督ノ居所ヲ伺候スル  
ニ堂内ニ異客アリシカ其衣服ニ因テ高班ノ人タルヲ  
知レリ是日本皇帝ノ特ニ都督ノ營門ニ差遣スル使節  
ニシテ都督ノ成績ヲ賞シ功勞ヲ慰スルノ為メナリ即

チ其人ハ北條ヲ姓トシテ位井華族ニ列シ任ハ侍從タ  
リ陸軍省ノ人兩負之ニ隨從セリ紆テ營背ニ至レハ一  
小逕アリテ該土ノ商客男女錯雜シテ商品ヲ頭ニ載キ  
肩ニ擔ヒテ且ツ賣リ且ツ行キシカ其歩ムヤ屹然挺立  
シテ殊ニ奇狀ナリキ語聲囂々トシテ滿邑之カ為メニ  
鬧然タルカ如シ初メ規則ヲ設ケ喧噪ヲ禁遏セシニ土  
人ノ之ヲ犯シテ再ヒ此ニ至レリト又埠頭ノ近傍ニ至リ  
見ルニ海岸ハ最モ荒壞シテ衆船ハ七八兩日ノ暴風雨  
ノ為メニ破ラレ且ツ曩ニ高砂丸ヨリ陸ニ送リシ試船  
モ亦共ニ敗壞シテ碎材砂上ニ縱横散布セリ  
暑威尚熾ニシテ炎熱焚カ如ク人畜俱ニ苦ム今切ニ  
之ヲ言ハントス愁悶恟ニ塞カリ此ノ乾燥茫漢タル土  
地ヲ離隔セントスルノ念ヲ抑止スル能ハサリシ抑該



地タルヤ茅家数族アリテ偶、渡行セシ者ノ為メニハ旅  
情ヲ慰シ信ノ難苦ヲ與ヘサリシモ亦其茅家ニ在テ既  
ニ二月ヲ閱シ難苦ノ起居ヲ忍耐セシ所ノ人ニ至テハ  
茅家之ニ幾多ノ愁苦ヲ與ヘシノミナラス少シモ人間  
ノ道ニ益スルヲナカリシ然レモ又廣ク之ヲ考フレハ  
茅家ハ或ハ唯、不可ナリトノミ為ス可キニアラス如何  
シトナルニ茅家ハ該島ニ於ケル開化ノ徵ヲ表スレハ  
ナリ且ツ何人ヲ論セス終ニ此茅家ヲ管轄永存スル者  
ハ永ク之ヲ以テ今度ノ事ヲ記念スルカ故ニ唯ニ其事  
業ヲ企成セシ國ノミナラス尚ホ人間社會ニ向テ茅家  
ハ恰ニ良功ヲ奏セシ一使節ノ誌録ノ如クナレハナリ  
而シテ其成功セシヨリ而今而後又、ホルモサ道路ニ危  
險ノトナク、後來旅客ヲ暴殺スルヲ勿ル可ク且ツ英米

兩國モ亦此ノ卒然成功セシ事業ニ因テ再ヒ心志ヲ煩  
勞セサル可キナリ抑、現今日本ノ行ヒシ事業タルヤ曩  
ニ英米兩國ノ議ヲ定メ意ヲ決シ益ナシト為シテ行ハ  
サリシ所ノ事ニシテ日本人能ク之ヲ成シ彼等ノ過失  
ヲ報ヘリ而シテ既往三年ノ間二回仁慈ノ所為ヲ行ヒ  
之ニ依テ同盟相交ル所ノ國權ニ對峙シ其公使等ノ敵  
對心ヲ防ケリ即チ一千八百七十二年ニ在テハ毅然ト  
シテ奴隸賣買ノ不可ヲ爭論シ野蠻刻薄ナル貿易ノ臭  
名ヲ芟除シ地球ヲシテ永ク清明ニ至ラシムルト今又  
二十五年ノ間々太平洋ニ横ル所ノ危懼ヲ掃蕩シ水路  
ヲシテ平安ナラシムルトハ余カ日本ニ向ヒ深ク謝  
スル所ナリ而シテ西郷ノ臺島ヲ離去セシヨリ東洋ノ  
航客ハホルモサノ生蕃ヲ畏レス蕃民ハ既ニ惡事ノ懲



罰ヲ蒙リ且ツ盡ク告諭ヲ守リ將來ヲ戒慎シテ永ク害  
心ヲ絶チ倘シ告諭ヲ破リ暴虐ヲ行フ者アルニアラサ  
レハ復タ用ヒルヲナシ且ツ彼等ノ猶賤シム所ノ者ニ  
アラサレハ之ヲ加ヘス夫レ啖肉吸血ノ蕃民ヲシテ此  
ノ如ニ至ラシムルヲ日本ノ勲功何ヲ以テ之ニ比セシ  
ヤ古人曰ク我獨リ善ク之ヲ為スト寔ニ日本ノ謂ク日  
本人ノ誇傲モ豈ニ宜ナラスヤ

七月下旬ニ余ハ長崎港ニ着シテ動靜ヲ覘フニ市街ハ  
一般ニ愛國ノ熱心充滿セリ而シテ此義氣既ニ蔓延シ  
テ全國ニ普ネシ然レニ此事件ノ談判ハ秘密ナルヲ以  
テ事情ノ詳細ヲ知ラス唯支那ハ日本帝國ノ光榮ヲ汚  
辱シ日本人民ノ權理ヲ阻碍スル者トナシ志氣勃々怒  
髮冠ヲ衝キ恨心胸ニ塞ルカ如シ此時ニ際シテ更ニ確

論ノ利害ヲ説クナク通論皆ナ以為ク支那我日本帝國  
ノ進路ヲ障碍ス焉ニソ支那ヲ征討セサル可ケンヤ焉  
ニソ支那ヲ屈服セシメサル可ニヤト而シテ政府ハ能  
ク之ヲ慰撫スルニ注意シ且ツ權外ノ事ヲ行フニ至ラ  
ニカヲ畏懼セリ然レニ倘シ東京諸大臣ノ悩漿ヲシテ  
大イニ人民ノ志氣ト聲言ニ感動セシメハ其所為應ニ  
硬直激烈ナラサルヲ保證ス可ケンヤ而シテ其海軍ノ  
拳動ノ神速ニ出テ及ヒ物品ヲ長崎ニ累積シ漸ク大イ  
ニ準備ヲ修ムル等ハ皆是人民ノ願望ノ激烈ナルヲ徵  
ス可キナリ仮令政府ノ意向ハ戦闘ヲ好マサルモ此際  
ニ臨ニテハ其兵備ヲ整ヘ防禦ヲ嚴ニスル等以テ人心  
ヲ靖シ搖動ヲ鎮スルハ固ヨリ當ニ然ルヘシ而シテ專  
制ノ人民ハ之ヲ覺知スルニ鈍ク皆謂テ曰ク大事既ニ



發ス予等カ願フトコロ宜ク功ヲ顕ハシ國家ノ為メニ  
義務ヲ盡ス可キナリト  
南港ヲ經テ首都ニ至ルノ沿道所トシテ活潑ナル願望  
ノ徴アラサルナク愛國ノ熱心ハ各縣ニ溢レ悲憤慷慨  
ナラサルハナシ而シテ東京ニ至ルニ人心自ラ平穩ニ  
シテ官吏ハ奮議激論ノ傳播センコトヲ慮リ緘黙事ヲ秘  
シテ告ケサルカ故ニ外形ニ顯ルハ全ク少ナシト雖  
凡之ヲ内心ニ蓄フルト極テ深ク倘シ支那人ノ自ラ難  
事ヲ起シ之ヲ修整スルニ至リテ辭ヲ托シテ違避シ遂  
ニ兵端ヲ開クニ及ヒ政府一令ヲ下シ人民ヲ喚起セハ  
彼等欣然トシテ之ヲ領承シ直チニ侵入セントスルノ  
状ハ瞭々明白ナリ且ツ此ノ如キ時ニ至リテハ其熱心  
偏ニ勉勵事ヲ取リ日本ノ國運ヲ進メ勝ヲ得ントスル

ノ一邊ニ向ヒ其心ヲ鍛練セサルハ通常ノ事ニシテ奇  
シムニ足サルナリ



第三十二回

政治ノ様子ノ事○平和ノ點ニ向フ事○ゼネラル  
シヤンドル氏福建ニ使スル事○拘留及ヒ放免ノ事  
○合衆國官吏ノ醜行○大久保職務ノ新戰場ノ事  
日本帝國ノ人民ハ意ヲ決シ政府ヲ扶助シテ難事ヲ成  
サントシ政府、之ニ應センヲ欲シ而シテ國民一タヒ  
卑屈ノ舊習ヲ醒悟セシヨリ支那人ノ非理ヲ鳴シ將ニ  
要求スル所アラント顯然トシテ政府ヲ危急ノ際ニ維  
持スルノ基ヲ表セリ然レモ朝廷遂ニ之ヲ行フヲ得ヲ  
聽サ、リシナリ東京ノ諸大臣ハ其志ス所初メヨリ平  
和ヲ主トセシカ今將ニ其成果ヲ見ントス而ルニ人民  
ノ所為ハ全諸大臣ノ企望ニ相反シ唯リ支那ト交際ヲ



篤クスルノ阻碍ヲ為セリ是ニ於テカ適宜ノ方法ニ依  
リ其責ニ任スルナクシテ之ヲ處セントス然レモ人民  
ノ心物ニ感シ易ク且ツ要求スルノ法ニ至テハ夢幻ニ  
齊シク未タ其要求ノ道ノ何物タルヲ曉知セス又未タ  
嘗テ嚴然之ヲ固執セス其法更ニ確タルナリ喃々怨言  
ヲ吐キ動モスレハ事ヲ生セントス故ニ諸大臣ハ之ヲ  
處スルニ勉テ慰撫鎮靜ヲ以テシ一モ戰鬪ノ事ヲ説カ  
ス專ラ策畧ヲ運ラシ帝國ヲ富嶽ノ安ニ置ントセシカ  
其後チ全國遂ニ政府ノ擔任スル地位ヲ理解シ忿怒ヲ  
去リテ人情大イニ誠實ノ心ヲ顯ハシ同心協カシテ事  
ヲ為スニ至レリ

七月ノ末ニ支那政府ノ方向ヲ變更セシ形容明カニ解  
知セシヲ以テ更ニ一策ヲ施シ平穩ヲ保スルノ利益ト

ナサントセシハ即チルジヤンドル氏ノ使事ナリ斯ク  
テゼネラルルジヤンドル氏ハ日本ノ使命ヲ啣ミ福州  
ニ行キ福建總督ト事ヲ議セントシテ廈門ニ到ルヤ誰  
カ料ニ災星道ニ當テ經過スルヲ能ハス合衆國領事館  
ノマルシヤルノ為メニ捕ヘラルヤンチツク号船ノ官  
吏モ水夫ト共ニ助ケテ之ヲ捕ヘタリキ而シテ其待遇  
頗ル無禮ニシテ捕囚ノ状トニ醜辱ヲ蒙レリ然レモ其  
刻薄ノ待遇ハ久シカラスシテ此所為ヲ成セシ首謀ノ  
者ニ翻及スヘキナリ是ニ於テルジヤンドル氏ハ福州  
ニ行ヲ阻碍セラレ囚レテ上海ニ至ルニ及シテ災星ノ  
影漸ク暗フシテ忽チ放免セラレシモ其待遇ノ無状ナ  
ルハ捕捉セラレシ時ノ所為ニ異ナラサルナリルジヤ  
ンドル氏放セラレ、ヲ得タリト雖モ成功ノ機會ハ此



時既ニ經過シテ竟ニ擔任ノ職ヲ盡シ言フ踐ム能ハサルカ故ニ彼又福建ニ向テ發セサリシ其職務ノ何タル及ヒ職務ノ効驗ヲ顯ハシ或ハ想フニ結果ヲ成スアル可シト雖モ余今爰ニ之ヲ復思スルヲ要セサルナリ而シテ一事ノ爰ニ説サルヲ得サルモノアリ曰ク初メ合衆國公使ハルジャンドル氏ノ日本人民ノ勤メヲ擔フニ由テ多少ノ故障ヲナシ今再ヒ命ヲ奉セスシテ領事ニ恣ニ之ヲ捕フ此事日本人民ノ利害ニ関スル少ナカラス且ツ大イニ發スヘキノ患禍ヲ貽セシモ其最惡事ノ發見スルニ至ラサリシハ大幸ト謂フヘシ夫レ領事ノ威權ニ附從シテ共ニ自恣不法ノ行ヲ為セシ各官吏モ須ク速ニ之ヲ退ケテ罪罰ヲ加フヘシ此時ニ當テ東洋ニ留在スル方正ノ米人ハ彼等ノ處置ノ大

イニ國名ヲ汚シ且ツ不學不才ノ所為ニ由テ國權ヲ損セシヲ愁慮セリ其不學無才ヲ表ハシテ事ヲ處スル者ハ在上海總領事ヲ以テ之カ首頭トナス其北京ニ在テハ已ノ名ヲ以テ之ヲ助ケ行ヒ上海ニ在テハ次官之ヲ助ケ人ヲシテ愁眉ヲ見サシムルノ所為ヲ成セリ又廈門上海ニ在リテ新ニ事ヲ處スル日本官吏ノ如キモ其行ヒニ由テ之ヲ見ルニ其處置多ク熟達セサル所アリキ方今ノ形勢既ニ危險ニ逼レリ而シテ支那政府ハ頑固剛愎ニシテ恒ニ已ノ理論ヲ執強シ敢テ日本政府ノ説ヲ容レス是ニ於テ八月五日ヲ以テ内務卿大久保利通ヲ特命全權辦理大臣ニ任シ支那ニ差遣シ葛藤ヲ解カシム實ニゼネラルジャンドル氏ノ支那南地ヲ望シ



テ去シ後チ僅ニ数日ヲ出サルナリ其頃日本人民ハ此  
布告ヲ得テ大イニ喜ビ之ニ依頼セリ抑此事業タルヤ  
新ニシテ最モ重要トナス其責任ノ重キ又曩者ノ職ノ  
比ニ非ス苟モ能ク事ニ臨ンテ驚嚇心ヲ動カサス剛毅  
戒慎以テ自ラ居ラハ終ニ果ヲ成シ結ヲ致シ偉勳ヲ一  
身ニ收メテ之ヲ他ニ讓ラサルハ信スル所ニシテ又使  
命ヲ辱メス國光ヲ汚サ、ルハ是時亦正ニ衆人ノ預知  
スル所ナリシカ日本ヲ正義ノ道ニ置ノ命ヲ領シ皇帝  
ノ名ヲ被リ事ヲ行フノ全權ヲ有シ竟ニ北京ニ使シ紛  
乱緩急ノ際非常ノ英才ヲ表ハシ審論細議シテ果シテ  
局ヲ終レリ

九月二日大久保大臣ハ天津ニ到着シルジヤントル氏  
乃チ大臣ニ合從シテ此ヨリ副使ノ職ヲ行ヒ此地ノ營

哨ニ寓スル四日ニシテ翌六日北京ヲ望ンテ發程シ十  
日其都府ニ達セリ

支那ノホルモサ島ヲ以テ自ラ巳ノ所有ト為スノ新報  
初メテ日本ニ到ルヤ合衆國公使ハ就テ米人ヲ警戒ス  
ルノ告諭書ヲ發スルノ好機會ナルヲ思ヘリ其告諭ノ  
文ニ曰ク支那政府ニ敵對スル者アラハ律例ニ依テ之  
ヲ罰シ且ツ市民ノ權利ヲ剥脱スヘシト而シテビンバ  
ンム氏ハ公私ノ確説ニ管セス猶ホ隨意ニ事ヲ行フ然  
レモ其米人ノ支那ニ敵對スル無キハ今マ疑ヒナク之  
ヲ知レリビンナム氏ハ此告諭書ヲ在橫濱副領事ミツ  
チエル氏ニ下シ之ヲ行ハシメントセシニ副領事ハ之  
ヲ行フヲ喜ハス且ツ該事件ニ付テハ意見ノ異ナル所  
アレハ寧ロビンナム氏ノ權理ヲ以テ之ヲ公告シ之ヲ



處センヲ願ヘリ抑、領事官ノ地位タル此ノ如ク困難ナルモノニシテ若シ公使ノ命令ヲ施行セサレハ之カ為メニ非難ヲ受ケ若シ又州省ノ嫌悪スル者ヲ施行スレハ之カ為メニ尤ヲ蒙リ官長ノ威令ニ因テ施行セシトノヲヲ辨解スルモ許サレサルナリ

第三十三回

政治ヲ行フノ紛乱ナル事○潘爵ノ泛言ノ事○柳原北京ニ在ル事○談判ノ遅延ニ及フ事○全權辨理大臣大久保到着ノ事○新ニ出立スル事○支那人ノ眞ノ地位ヲ見出す事○無益ナル結果ヲナセシ事大臣大久保ノ職トシテ此解ントスル所ノ葛藤タルヤ只、臺島ヲシテ支那ノ版圖ニ属シ威權ヲ布シメス將ニ他ニ望ム所アラントスルナリ是ヨリ前キ兩國ノ事ヲ查辨スルニ方テヤ日本人ハ詰問ノ法ヲ固守シテ更ニ顧ミル所ナク支那人ハ毎ニ犴猾ヲ逞フシ専ラ事ヲ量ルカ故ニ數回ノ談論ヲ盡スモ之ヲ修整スル能ハス要求愈々急ナレハ遁辭愈々巧ニ出テ每議不快ノ色ヲ現シ



倍、事ヲシテ成リ難キニ至ラシム而シテ欽差副使潘蔚  
ノ公使柳原ニ告クルニハ正使沈ノ都督西郷ト應答ヲ  
費スノ無益ナルヲ避ルノ利ト又直チニ兩國政府ノ欽  
差公使ノ面前ニ於テ事ヲ議決スルノ利トヲ以テシ之  
ヲ沈ニ告ルトシ柳原公使ニ別レ後々遂ニ其約ヲ踐サ  
ルヲ等騙詐百端以テ事ヲ延ントス六月下旬潘蔚ハ申  
文ヲ草シテ自ラ生蕃事件ヲ調理セシ状ト又都督西郷  
ノ初メテ政府ノ命名アルニ由テ必ス將ニ師旅ヲ卒井  
日本ニ歸ラントスルノ話ヲ載セ之ヲ支那政府ニ送呈  
ス八月八日上海道臺之ヲ柳原ニ通シ既ニ全ク該事件  
ヲ完了セリトス然レモ公使ハ曩ニ西郷ノ書ヲ得テ具  
サニ臺島ノ情勢ヲ知レハ焉ソ欺懦ニ陥リ惑フヲ  
ナサニヤ是ニ於テ公使ハ其前約ノ頼ム可カラサルヲ

道臺ニ表示シ且ツ以為ク永ク上海ニ駐留スルモ別ニ  
好目的ノ來ル理ナシ速ニ北京ニ到リ直チニ總理衙門  
ニテ面議シ事ヲ決スルニ如スト遂ニ上海ヲ去リ七月  
二十四日天津ニ着ス此地ニ於テ直隸總督兼兵馬元師  
李鴻章ニ逢ヒ僅ニ談論ノ端緒ヲ開キ再ヒ此地ヲ發シ  
都府ヲ指シテ進ミ三十一日北京ニ達ス  
斯クテ柳原公使ハ總理衙門ニ於テ直接シ再三ノ商議  
ニ及ヒシト雖モ初メ沈ト潘トノ臺島ヨリ文書ヲ送致  
セシヲ以テ之カ為メニ制肘セラレ速ニ決スル能ハス  
而シテ其書中記スル所屢、ホルモサニ一ノ異様ナル市  
埠ノ建在スルヲ言ヒ又此事件タル固ヨリ我ト柳原ノ  
談判ニ屬シ敢テ他人ノ之ニ關係ス可ラサルヲ述ヘ此  
ノ如キハ其不正ナルヲ論ヲ俟タスト雖モ支那人ハ認



テ以テ之ヲ然リトナスノミニ非ス且ツ之ヲ以テ機變  
ヲ行フノ基トナセリ然シテ支那人ノ勉メテ論スル所  
ノ旨ハホルモサ全島ノ威權ヲ管領シテ外人ノ險ヲ冒  
シテ臺島一塊ノ土モ之ヲ占取スルヲ聽ルサスト毎書  
毎言常ニ之ヲ執テ變セス是故ニ談議更ニ極ニ進マス  
而シテ支那人亦議論ノ進捗スルヲ喜マス遷延日ヲ彌  
リ以テ柳原ヲシテ其勞ニ勝ヘサラシメントセリ適大  
久保大臣ノ到ルニ會フテ支那人ノ策行ハレス直チニ  
該事ヲ查辯シ終ニ正邪ヲ判決スルニ至レリ前文ニ説  
キシ如ク大久保ノ此使節タル特ニ全權ヲ委付セラレ  
屢内國政府ニ通信往復スルノ煩累ナク且ツ支那人ノ  
更ニ阻碍ヲ為セシモ之ヲ前時ニ比スレハ稍僅少ナリ  
トス

九月十四日初メテ第一場ノ會議ヲ開キ茲ニ新來ノ日  
本特命全權大臣ト總理衙門ト談判ヲ始メリ大久保先  
ツ告ケテ曰ク該事件ノ談判ニ関スル誌録書翰等ヲ點  
檢スルニ大約貴國ハホルモサ生蕃ノ地ヲ以テ版圖内  
ニ在ルモノトシ又柳原ハ其地ヲ以テ獨立ノ孤島トナ  
シ各其説ヲ固守スルヲ知レリ故ニ今ニ條ノ問題ヲ設  
ケルヲ以テ貴國之ニ答ヘヨト其一條ニ曰ク貴國既ニ  
生蕃ノ地ヲ以テ版圖内ニ在リト謂フト雖モ未タ曾テ  
政ヲ施シ教ヲ布キテ蕃民ヲ開化スルヲ勉メサルナリ  
其二條ニ曰ク政權ヲ有シテ之ヲ施行セス屢漂民ヲ生  
蕃ノ害スルヲ見テ之ヲ度外ニ置キ曾テ懲辦セス是他  
國ノ人民ヲ顧憐スルナク唯生蕃殘暴ノ心ヲ養フナリ  
ト



十六日第二ノ評議アリテ此日ハ容貌端正ナル支那ノ  
貴官数名ニテ大久保ノ疑問ヲ對ヘタリキ即チ其第一  
條ニ答テ曰クホルモサ生蕃ノ地方ハ其風俗ヲ宜クシ  
其生聚ヲ聽シ其性質ノ較ヤ善秀ナル者ハ撰ニテ之ヲ  
社學ニ入レ之ヲ教育シ各歸リテ政府ノ分轄ニ就カシ  
ム以テ蕃族ヲ教化セントス然レモ我國ノ政教タル漸  
ニ由テ之ヲ施シ毫モ勉強急遽ノ心ナシト第二條漂客  
禍害ノ係ル問ニ應テ曰ク各國人民ノ船舶破損シテ其  
各國高民ノ害ヲ受ル等ノコトアリテ各國公使詳細ニ事  
由情況ヲ將テ我衙門ニ照會シ甘心ヲ要スルアラハ必  
スヤ查明妥辨ヲ為シ難易遲速ノ不同アリト雖モ束シ  
テ之ヲ辨セサルノ事ナシ即チ生蕃ノ件ノ如キモ貴國  
政府若シ現今ノ事由ヲ詳記シ照會セシナラハ衙門ニ

テ如何ソ之ヲ查辨セサルノ理アラシヤ且ツ我衙門甚  
タ此等ノ情事アルヲ願ハス今後尙適當ノ法律ヲ設立  
シ教訓ヲ生蕃ニ加ヘ以テ後來ヲ戒メ外國人民ヲ保護  
スヘキナリト後チ大久保少シク衙門ノ証トスル所ノ  
モノヲ訊問セシノミニテ此會ヲ畢レリ  
十九日復タ談判ヲナセシカ此時大久保大臣ハ明カニ  
前議ノ意ニ滿タサルヲ述ヘ更ニ疑問二條ヲ出タシテ  
之ニ答ヘラ請ヒシニ衙門ノ官吏ハ之ヲ接收シ後チ書  
ヲ以テ更ニ答ヘント諾セリ此ニ至リテ衙門ノ官憲畧  
喜ハサルノ色アリシカ蓋シ以為ク我總テ彼ノ問ヲ所  
ヲ解説セサレハ何ノ時カ議論ノ決スルニ至ラニヤト  
而シテ其心初メヨリ萬國公法ノ一點ニ向テ安カラス  
故ニ言テ曰ク萬國公法ナル書ハ輒近歐洲人ノ編成ス



ル所ニシテ書中我支那ノ事ヲ載セス願ハクハ之ニ依  
附スルナクシテ以テ此事ヲ議決セント然レモ支那人  
ノ思意ハ確定セス緊要ノ時ニ至ル毎ニ輒チ議ヲ變シ  
論ヲ更メ自ラ已ヲ賤スルニ至ルモ其議論中或ハ全ク  
意味ナキニアラス即チ曰クホルモサ生蕃版圖ノ証ニ  
至リテハ其痕迹ノ模糊タルニ苦シムト雖モ自今我國  
ノ法律政令ヲ生蕃地方ニ擴張シ其兇暴ナル行ヒヲ制  
止シ以テ永遠兩國ノ交際ヲ保セントス然レモ貴國我  
政府ヲ信用セスシテ我政府ニ委スル能ハストセハ我  
又何ヲカ云ハニ日本公使之ニ答テ曰ク今ニ至ルマテ  
貴國ノ執テ証トスル所ノ者ハ都テ信スルニ足ラス我  
貴國ノ確實ナル證據ヲ得ルニアラサレハ論シテ止マ  
サルナリト同氏ノ論大イニ度リ言テ曰ク今ヤ東西兩

球ノ間通船日ニ繁シ此ノ時ニ際シ自他國民ヲ論セス  
航海者ノ安寧ヲ保護スルハ固ヨリ論ナク而シテホル  
モサノ如キハ航路ノ要衝ニ位シ貿易上最モ緊要ノ一  
島ナリ然ルニ其蕃民ノ如キハ所業海賊ニ類似ス況レ  
マ我良民既ニ害ニ遭フマヤ是レ我政府ノ忍ヒサル所  
ナリト  
此文書談論ノ往復問答ハ九月ヲ經ルモ猶決セス遂ニ  
次月ニ及ヘリ熟其形状ヲ察スルニ支那人ハ獨リ已ノ  
見ヲ偏執シ語ヲ換ヘ文ヲ更メ專ラ辯論ヲ事トシテ和  
好ヲ破ラサルヲ口實トシ此案ヲ歸結スルナカラシメ  
ントシ且ツ執テ其證據トナス所ノ者ハ模糊曖昧トシ  
テ議論ト併ヒ行ハレス其レ此ノ如クニシテ何ソ之ヲ  
辯論ト名ク可シヤ是故ニ大久保ハ總理衙門ノ萬國公



法ヲ學ハサルヲ聞キ乃チ公法ヲ譯シ彙メテ一冊トナ  
シ之ヲ衙門ニ贈リ後來ノ參閱ニ便ヲ得セシメタリ此  
時ニ際シテ大久保ノ非常ノ英才ヲ顯ハシ勉メテ好果  
ヲ結ヒ其命囑セラレシ所ヲ果タシ日本人民ノ希望ニ  
背クナキハ固ヨリ深ク信シテ疑ハサル所ナリ十月五  
日ノ面議ニ於テハ支那官吏益々事ヲ婉曲ニシ其所置全  
ク驚嚇セントスルニ出テ加之歸國ノ事ハ強ヒテ留ム  
ル所ニ非スノ語ヲ咄ニ至レリ大久保言テ曰ク外國人  
ノ手ヲ藉テ該事ヲ和解セントスルノ貴問ハ我決シテ  
承諾スル所ニアラス是國權ニ係ル大事ナレハナリ而  
シテ若シ貴國之ヲ置キ他ニ談判シ難シト稱シ又我問  
ニ答フル無シハ已ニ談判モ今日ヲ限リ我奉使ノ任モ  
此ニ止ルノミ我復タ何ヲカ辨論セシヤト

此日ノ面議既ニ結局ニ至ラントセシニ料ラス支那人  
ヨリ意外ノ言ヲ發セシニ由テ終ニ又歸國セス大久保  
ハ則チ疑問ヲ遺シテ全ク議ヲ止メ始終ノ形勢ヲ先ツ  
日本ニ報告セントヲ思ヘリ同氏ハ其後チ再ヒ此辨論  
ヲ起セシニ衙門ノ官吏ハ大イニ既往ノ非禮ヲ覺リ之  
ヲ宥メンヲ請ヘリ官吏等又言テ曰ク曩ニ誤テ不快ノ  
見ヲ為セリ願クハ之ヲ該事辨理誌録ノ中ニ掲載スル  
勿キヲ請フト夫レヨリシテ漸ク相敬禮セリ然レモ日  
本欽差大臣ハ其義ヲ推却シ言テ曰ク這般ノ論議ニ付  
テハ秋毫モ之ヲ秘穩ス可キノ理ナシト然ルニ支那人  
ハ頻ニ之ヲ請フテ止サリシニ因テ終ニ交接文書ハ其  
不快ノ意義ヲ改正シタレモ誌録ハ依然トシテ猶之ヲ  
削除セサルナリ



第三十四回

各國公使ノ状態○ウエード氏ノ處置○日本人ハ事  
状ヲ他言スルヲ好ザリシ事○仲裁ノ論○最後ノ意  
見○再新ノ應接○頑固ニシテ不服ナリシ事○最後  
大久保ノ演説○恭親王ノ告知○双方記名ノ約定書  
大久保到着ノ後數日ヲ經シニ北京駐劄歐洲各國公使  
ノ中未タ曾テ此事件ニ參與スヘキ意見ヲ起ス者ハ一  
人モアラサリキ然ルニ英國公使ウエード氏ハ預テ支  
那ノ諸大臣トハ殊ニ親睦ナル起キノ聞ヘアル人ナリ  
シカ此際獨リ抽テ、日本人行為ノ原由及ヒ其為サン  
ト欲スル處置ヲ詳細ニ承知センヲ明言シ而シテ其  
意志ヲ日本人ニ傳ヘタレト日本人ハ之ヲ明示スルヲ

無  
文  
三

三  
三  
三



固ク拒ミタリ然レモ其之ヲ拒ムノ理ハ至當ナルヲ以テ強ヒテ之ヲ制抑セザリシ抑、大久保ノ論辯スル第一ノ請求ハホルモサ蕃民ノ一条ニ就キ支那政府ノ總理衙門ニ於テハ頻リニ悖戾ノ議論アレモ前辦理大使タル副島ノ演說セシ處ハ全ク公正ナルト又日本政府ニ於テ慥カニ此演說ノ主意ヲ履行セシハ實ニ適當ナル處置ナリトノヲ承諾セシヲ望ム所ナリ然レモ此請求ハ支那政府ニ於テ一向許諾セス而シテ兩政府ヨリ論辯スル處ノ間月ハ互ニ正實ナル旨ヲ主張シ久ク結果ニ至ラザリシカ故其間日本使節ハ肝要ナル其趣意ヲ明示シ其條理ヲ立ツヘキ應接ヲナスノ便宜ヲ得ルニ至ラザリキ此時ニ當テウエード氏ハ其異論ノ次第ヲ擔認セシヲ望ミ自ラ支那政府ニ逼リ其實狀

ヲ報告セラレシヲ要求セリ蓋シ同氏ハ漸次日本ノ意見ヲ聞知シテ充分之ヲ認可シ且ツ預テ台灣島ニ就テハ果シテ紛議ノ發スル時アルヘク然レモ容易ク之ヲ證明スルヲ得ヘシト前年來其心ニ期定シ居タルヲナレモ今度支那ニ於テ該島ニ就テノ紛議ハ頗フル盡サ、ル處アルヲ認メタルヲ以テノ故ニ相違ナカルヘシ但シ同氏ハ何處マテモ日本ハホルモサ南部ヲ支那ノ隸屬地ト見做シテ處置セシト察シ後日此事ヲ了解スル迄ハ其覺悟ニテ取扱ヲナシタリキウエード氏ノ勇進シテ此事件ニ參與スル所以ヲ考フルニ英國ノ貿易ニ關シテノ事ニテ若シ戰爭發起スルニ至ラハ之カ為メ其配下ニ在ル一ケ年二億五千萬弗ノ商業ヲ妨害センヲ恐ル、カ為メナリ是ノ故ニ同氏



ハ本國ニ通信シ兵力ノ保護ヲ置カンコトヲ思考シタリ  
ト云ヘリ而シテ此事ヲ日本使節ニ報知セシトキニ日  
本使節モ亦ウエド氏ノ欲スル所最モ良法ナレハ同  
氏ハ之ヲ為シ得ヘキ旨ヲ答ヘシ是ニ因テ之ヲ見レハ  
英公使ハ此時ニ乘シテ日本ニ敵對セントノ心アリト  
ハ決シテ見ヘス然ナクモ他ノ哄唆ヲ受ケテ心ヲ動カ  
セシ等ノ證跡ハ聊カモ非サル故全ク英國貿易ノ危難  
ヲ保護スヘキ主意ノ外ニ出サルコト明カニシテ凡テ其  
行フ處ハ同氏ノ擔任シタル大義務ナルコトハ更ニ疑ヒ  
ヲ容レサルナリ然シ到底同氏ノ主意ハ兩國ノ為メニ  
仲裁ノ地位ヲ踏ムノミノ事ニ非サルハ始メヨリシテ  
明瞭ナリ支那政府ニ於テハウエド氏ニ此仲裁ヲ依  
賴スルコトヲ好マサルニハ非サレド前キニモ演フル如

ク日本使節ハ始メヨリ如此キ處置ニ任スルヲ欲セス  
而シテ凡テ是迄諸所ニ於テ支那官吏ノ辯論セシ事并  
ニ屢々悖戾ノ議論アリシ事等ハ断然用ヒサルノ目途ヲ  
固守セリ  
斯クテ十月十日ニ至リ大久保ハ最後ノ要求ヲ報告シ  
タリ其言ニ曰ク本日ヨリ五日ノ内ニ可否ノ決答ヲナ  
スヘシ若シ此期限ノ末日ニ至テ決答ナキ時ハ則チ其  
日ノ訪問ヲ以テ最後トナスヘシト然ルニ翌日支那官  
吏ヨリ書翰ヲ送リテ曰ク目今皇帝陛下ハ外遊アリテ  
京地ニ在サス恭親王モ又隨行シタリ之ニ因テ衙門ニ  
於テハ期日ノ猶豫アラレコトヲ乞フト而シテ其乞フ所  
全ク已ムヲ得サルコト明白ナルヲ以テ則チ之ヲ應諾シ  
皇帝陛下及ヒ隨從ノ官吏ハ十四日ニ京地ニ歸著シ翌



十五日正午時前キノ返報ヲ送リ來レリ其書中演フル  
處ハ充分ノ結果ヲ為スニハ當ラサレト此事件ヲシテ  
満足ナル處置ニ運ハシムヘキ旨ノ決意ヲ表ヒリ因テ  
十八日大久保ノ居館ニ於テ會議ヲ開キシニ其時支那  
人ハ頻リニホルモサ南部管轄ノ權利ノ問題ヲ審議ス  
ル事ヲ止メタキ旨ヲ演說シ且ツ曰ク我政府ハ從來該  
島ノ政教ヲ等閑ニセリ是ヲ以テ虐害ヲ被リタル琉球  
人ニ償補金若干ヲ給與スヘシト此應接頗フル有益ノ  
處置ニ拂ルヲ以テ日本使節ハ漸ク喜悦ノ眉ヲ開キ則  
チ更ニ應接ヲ開カンコトヲ報告シタリ然ルニ翌十九日  
ニ至リ衛門ヨリ一書ヲ來シテ曰ク難事起レリ予等貴  
國征台ノ一事ヲ公明正大ノ處置ト認可スヘシト雖モ  
如何ニモ昨日予等ノ開申セシ如キ方法ヲ執行スルヲ

得スト而シテ此異論ノ主意ヲ考フルニ支那人ハ日本  
國民ニ與ヘタル損害ノ為メニ償補金ヲ拂フコトヲ拒ム  
ニハ非ラス然レト此事件ニ就テ確乎タル証書ニ記名  
スルヲ快シトセス又臺島ノ兵軍ヲ退ケサル間ニ夫ノ  
金額ヲ拂フコトヲ好マサルニアリ然ノミナラス償補金  
ノ多寡ハ帝ニ支那政府ノ獨裁ニ在ルヘキ旨ヲ強ヒテ  
主張シ双方ノ共議ヲ以テ決スルノ理ナキ事ヲ抗論セ  
リ之ニ因テ日本使節ハ大イニ憤激シ明カニ左ノ返報  
ヲ送リタリ曰ク

現今我國ノ兵軍ヲ以テ占有セシ台島ヲ貴國ノ版圖  
ニ屬セシコトヲ望マル、ナラハ貴國ニ於テハ勿論我  
國ニ對シテ相當ノ義務ヲ盡サ、ル可ラス則チ我政  
府ニ於テハ其満足ナル處置ヲ望ム所ナリ如何ナル



満足ヲ我國ニ與ヘラル、マ當今貴政府ニ於テ算定  
セラル、如キ方法ニテハ予ハ台島ニ在ル我兵軍ニ  
對シテ退陣ヲ命スル能ハス予ハ決シテ妄リニ償補  
金ヲ貪ラントスルニ非ス然レニ貴政府ノ處置ヲ明  
ラカニ辨解スルヲ得ス其上償補ノ金額ヲモ得サル  
時ハ予日本ニ歸着ノ上何等ノ事ヲ以テ我カ 天皇  
陛下ノ使命ニ答フヘキカ又何ノ顔アツテ國人ニ對  
スヘキカ若シ貴政府ニ於テ頑固ニ論抗セラル、ナ  
ラハ予カ預定シタル和親ノ計策ハ此時ヲ以テ破ル  
、ニ至ルヘシ唯、予カ一身ニ於テハ在テ貴政府ノ望  
ミニ從フヘシト雖、我政府及ヒ國人ハ予ヲ何ト云  
フヘキカ貴政府ハ我兵軍退去ノ後我國ニ満足ナル  
處置ヲ與フヘシトノ意見ナレト如此クニテハ今回

ノ紛議ヲシテ兩國満足ノ方法ニ決スヘシトノ貴政  
府ノ預テノ平和心トハ全ク反對ノ處置ト云ハサル  
ヲ得ス我政府ハ確乎タル筆記ノ證明ナケレハ決シ  
テ交際ノ事務ニ信任ヲ置カサルナリ若シ貴政府ノ  
保證スル處ニ就テ判然タル証跡ナクハ予ハ何ヲ証  
トシテ兵軍ノ退去ヲ命スルヲ得ヘキカ又若シ現今  
貴政府ノ詞ニ從ヒ而シテ後來此事ニ就キ我政府ニ  
於テ不満足ナル事跡ヲ發見スルヲアラハ我國再ヒ  
貴國ニ對シテ不正ノ罪ヲ責メサル可ラス然ル時ハ  
又頗フル大難事ヲ發スヘキハ必定ナリ是故ニ予ハ  
確乎不動ナル筆記ノ證明ヲ要スル所以ナリ  
此ノ如ク證書ノ要求ヲ演說セラレタレト支那政府ニ  
テハ始メヨリ此事件ノ證明ヲ為サ、ル可キ企望ナル



カ故ニ頑固ニ此請求ヲ拒ミシヲ以テ廿四日ニ至リ再  
ニ此請求ヲ辯論セラレタレト又之レヲモ拒絶セリ此  
ニ於テ大久保ハ翌二十五日最後ノ書翰トシテ一書ヲ  
送り左ノ趣意ヲ演ヘタリ

目今予ハ全ク望ミヲ絶テ將ニ本國ニ歸ラントス抑  
蕃族征討ノ企謀ニ就キ前ニ我國ヨリ貴政府ニ送り  
タル報告ハ貴政府ニ於テ敢テ之ヲ皆無ニ歸シ又我  
國ヨリ使節ヲ發シ且ツ之ニ兵軍ヲ從ハシメテ前キ  
ニ我國ノ難民ヲ殘害シタル種族ニ讎ヲ報ヒ又此近  
海通航ノ漂客ヲ兇殺セシ等ノ惡業ヲ懲罰セントス  
ルノ時ニ際シ貴國ニ於テハ我國ノ艱難ナル事業ヲ  
共ニ勸勵セントモセス却テ一矢ヲ發セサルヲ仁恤  
ノ處置ナリトシテ我國ニ對シテ誇ラレタリ元來我

國ニ於テハ國民保護ノ要点ヨリシテ蕃民征討ノ事  
業ヲ起セシナレト前件ノ形勢ニテハ我カ仁慈ノ處  
置ハ貴國ノ為メニ却テ敵對ノ惡名ヲ被ムルニ至リ  
我國ノ遺憾止ム可カラス此上ハ後來我國ニ於テ台  
島ハ山前山後ノ土地ヲ開拓シ我國ニ服從スル種族  
ハ之ヲ保護シ服從セサル者ハ之ヲ討罰シ一切貴國  
ノ版圖ナリヤ否ニ心ヲ勞セスシテ充分其企業ヲ遂  
ケントスヘキナリ尚又最後ニ於テ一語ヲ呈セント  
ス現今ノ場合ニ至テハ最早共議ヲ以テ決ス可キニ  
非サレハ兩國各其國法ニ依リ其獨立國ノ權利ヲ擴  
充セサル可ラス是故ニ予ハ以後貴政府ノ辯論共議  
ヲ聞クヲ願ハサルナリ予ハ既ニ歸國ノ用意ヲ急ニ  
セリ因テ貴國ノ總理衙門ニ行テ親シク告別スルヲ



得ス

抑大久保ノ人トナリ大度ニシテ能ク事ニ忍耐スルノ  
膽カアルトハ日本國人夥多ナリト雖モ未タ曾テ同氏  
ノ如キハ有ラサルナリ然ルニ前條ノ如ク確乎タル發  
言ヲナスニ至ルハ同氏ノ寛容溫柔ナルモ實ニ忍フ可  
ラサルノ極度ニ達シ且ツ榮譽アルヘキ講和ノ方法モ  
同氏ニ於テ全ク施スニ由レナキニ至リシハ更ニ贅言  
ヲ待タスニ明瞭ナルトニテ況ンヤ預テ同氏ノ性質ヲ  
善知スル者ハ別シテ之ヲ察シ得ヘキトナリ又同氏ノ  
其職務ヲ遵奉スルニ就テ敢テ如此キ處置ヲ行ハレタ  
ル所以ハ實ニ充分ノ遠慮ヲ以テ奮發セラレシトニテ  
其故ハ若シ同氏カ講和ノ成績ヲ遂クル能ハサル時ハ  
支那國民等攀テ誤認セン(妨害ハ皆ナ此ノ如シ正道ヲ

行ハサル者ハ何ソ我等ニ對シテ勝利ヲ得ヘケンヤト  
同氏ハ則チ此事ヲ思ヘハナリ  
目下日本使節ハ不日ニ北京ヲ出立スヘキノ用意頻リ  
ナリト雖モ其有様ヲ察スルニ應接ノ成績ナキニヨリ  
次クニ戦争ヲ以テセトノ決心アリト見ヘス且ツ同  
氏ハ預テ支那人交際ノ詭計ナルヲ熟知スルカ故ニ今  
度恭親王及ヒ其黨ノ状態ハ即時ニモ開戦スヘキ勢ナ  
レト全ク敢テ敵對ノ心アルニ非サルトヲ覺悟セシカ  
如シ然レト同氏モ後日ノ成績ヲ先見シ得タルニハ非  
サルヘク若クハ之ヲ先見シ得タリト其如何ニ歸著ス  
ヘキカハ算定シ得サリシナルヘシ廿五日午後ゼネラ  
ルルシヤンドル及ヒ隨行ノ官負一組ニ天津ニ向テ出  
立セリ恭親王ハ此事ヲ聞キ又使節ノ退去モ遠カルマ



ジキ旨ヲ傳聞シ其狼狽少カラス遽カニ英國公使ウエ  
ード氏ノ居館ニ至リ乞テ曰ク卿願クハ大久保ニ書ヲ  
送り彼等ヲシテ滞留セシメヨト而シテ其演説スル處  
ヲ支那政府ニ於テ決定シタルハ實ニ嘉納スヘキ盟約  
ノ歎條ニシテ且ツ少シモ疑心ヲ挾ム可ラサル程明カ  
ニ之ヲ陳告セリ是ヲ以テウエード氏ハ速カニ之ヲ許  
諾シ直チニ日本使節ヲ訪ヒ告テ曰ク予ハ支那人ノ依  
託ヲ受ケテ此ニ告知セントス目今預メノ約定ニ就テ  
證書ヲ得ラレントスル大久保ノ意見ニ對シ支那政府  
ニ於テハ毫モ異論ノコナシ又難民千八百七十一年虐  
殺ニ遇ヒタル者ノ眷族及ヒ存命ノ者撫卹トシテ銀拾  
萬錠ノ額ヲ速カニ拂フヘシ又貴國ノ兵退去ノ後テ征  
臺入費ノ償補トシテ銀四拾萬錠ヲ供給スヘシト同氏

又曰ク衛門ノ官吏ハ密ニ此告知ヲ為サンコト乞ヒタ  
リト  
大久保ハ此意見ノ實ニ嘉納スルニ足ルヘキコトナルヲ  
確知シ即チ其出立ヲ遲延スルコトヲ許諾セリ同日又大  
久保ハウエード氏ノ居館ヲ訪ヒ謂テ曰ク今度拂ハル  
ヘキ銀兩ハ第二項ノ事件ナル故左ノ方法ニ從ヒ五拾  
萬錠ノ額ヲ受取ルヘシト

台臺征討ハ凡テ公明ナル義舉ト見做スヘキ事○銀  
兩ハ兵軍退去ノ前ニ拂フヘキ事

ウエード氏ハ再ヒ通信者トナリ前件ノ主意ヲ支那大  
臣ニ告知セリ但シ同氏ハ如何ナル偏重ノ事ヲ以テ支  
那大臣ニ助言セシヤ一向探知シ得サリシ且ツ同氏ハ  
日本大臣ノ為メニハ少シモ助勢ヲモ為サス若シクハ



為サントモセサリキ  
廿七日衛門ニ於テ作りタル條約書ノ草案ヲ審議ノ為  
メ送り來レリ此時ニ當テラエード氏カ此事件ニ関涉  
セシハ實ニ支那人ノ幸福ニシテ全ク同氏ノ支那ハ此  
約定書ニ載セタル盟約ニ違背セサル旨ヲ保證セシニ  
テ結果ニ至リシナリ若シ此保證ナクハ假令斯ク執行  
シ來リシ上ニテモ支那人ノミノ保證ヲ許諾スルニ就  
テハ全ク疑心ナシト云ヒ難シ借テ如此ク堅固ナル保  
證アルヲ以テ三十日大久保ヨリ嘉納セシ趣キヲ報告  
ナセリ因テ十月三十一日總理衛門ニ於テ双方此約定  
書ニ記名鈴印ヲナセリ  
左ニ掲クルハ此時互ニ記名セシ約定書ノ譯文ナリ  
互換條款

大日本全權辦理大臣參議兼內務卿大久保  
大清欽命總理各國事務大臣此處ニ恭親王外支那大臣九名ヲ記ス  
條款ヲ會議シ互ニ辦法ノ文據ヲ立ル為メノ事照シ  
得タリ各國人民應サニ保護シテ害ヲ受クルヲ致サ  
ザルヘキノ處アレハ應サニ各國ヨリ自カラ法ヲ設  
ケ保全ヲ行フヘシ何國ニ在テ事有ルカ如キハ應サ  
ニ何國ヨリ自カラ查辨ヲ行フヘシ茲ニ台湾生蕃曾  
テ日本國ノ屬民等ヲ將テ妄リニ害ヲ加フルヲ為  
スヲ以テ日本國ノ本意ハ該蕃ヲ是レ問フカ為メ遂  
ニ兵ヲ遣リ彼ニ往キ該生蕃等ニ向ヒ詰責ヲナセリ  
今清國ト兵ヲ退ケ並ニ後ヲ善クスル辦法ヲ議明シ  
三條ヲ後ニ開列ス  
一 日本國此次辨スル所ハ原ト民ヲ保ツ義拳ノ為



メニ見ヲ起ス清國指テ以テ不是ト為サス  
二 前次有ル所ノ害ニ遇フ難民ノ家ハ清國定テ撫  
郵銀兩ヲ給ス可シ日本有ル所ノ該處ニ在テ道  
ヲ修メ房ヲ建ル等件ハ清國留メテ自カラ用ユ  
ルヲ願ヒ先ツ籌補ヲ議定スルヲ行ヒ銀兩ハ別  
ニ議辨スルノ據有リ  
三 有ル所ノ此事ニツキ兩國一切來往ノ公文ハ彼  
是撤回シテ註銷シ永ク為メニ論ヲ罷ム該處ノ  
生蕃ニ至テハ清國自カラ宜ク法ヲ設ケ妥ク約  
ヲ為スベシ以テ永ク航客ヲ保シ再ヒ兇害ヲ受  
ケシムル能ハザルヲ期ス  
前約定書中第二條ニ就テノ事ハ特別ノ事件トナシテ  
別ニ憑單ヲ定ム是ハ支那政府ノ強勢ナル異論ヲ充分

服從セシメタル約定ニテ支那人ノ履行セサレシカラ  
疑フ故ナリ又日本使節ハ過日十月十七日エド氏カ自  
カラ此約束ヲ違背ス可ラサル旨ノ證人トナリシ事ナ  
ルカ故ニ此約定ニ就キ支那政府ニ於テ慥カニ履行ス  
ルヲ證セン為メ同氏ノ名ヲ記載センヲ望ミタルト  
見ヘタリ因テ附録約定書ニ之レヲ加フ

互換憑單

台灣ノ一事現在業ニ英國威大臣兩國ト同ニ議明シ  
並ニ本日互ニ辨法文據ヲ立ツルヲ經タリ  
日本國從前害ヲ被ムル難民ノ家清國先ツ撫郵銀拾  
萬兩ヲ給ス又日本兵ヲ退クヤ台地ニ在テ有ル所ノ  
道ヲ修メ房ヲ建ツル等件清國留メテ自カラ用ユル  
ヲ願ヒ費銀四拾萬兩ヲ給ス亦夕議定ヲ經テ日本

大  
放  
言



國明治十三年十一月二十日ニ於テ日本國全數付退兵  
ヲ行フヲ准ス均ク期ヲ愆ツテ得ス日本國兵未タ全  
數退キ盡スヲ經サルノ時ハ清國銀兩モ亦タ全數付  
給セス此ヲ立テ據ト為シ彼此各一紙ヲ執テ存照ス  
此約定書中文字ノ用法ニ就テ頗フル議論アリ夫ノ銀  
額ヲ受クルモ明カニ撫恤金或ハ扶助金ノ名ヲ以テセ  
ンコトヲ欲シ又支那國ノ有用ニ轉向ヘキ諸修整物ノ代  
價モ其名目ノ為メニ支那ノ國威ヲ貶サ、ランコトヲ願  
フニ就キ反復激烈ノ紛議アリ大久保ハ最初ヨリ唯償  
金トノミ言張リシカ支那人ハ又此語中大イニ光榮ヲ  
損スル意味アリト考ヘ此語ヲ用ヒサランコトヲ主張シ  
タリ是等審議ノ間大久保ハ頑固ニ不理ナル主意ヲ  
顯ハセシコトハ一度モナク其職掌上ノ所要ヲ侵サレサ

ル内ハ唯、虛名ノ点ハ彼レニ讓ルトモ妨ケナシト考定  
シ居タリ十月二十一日出銀ノ事ニ付同氏ハ書ヲ送り  
テ曰ク貴國皇帝陛下ノ特恩ヲ以テ我カ國ノ難民ヘ撫  
恤金ヲ拂ハル、ニ付キ其外形ヲ飾ラントセラレレ  
到底貴國政府ハ其責任ヲ辞スルヲ得スト又同月二十  
三日書ヲ送りテ曰ク償金ハ撫恤金ノ名ヲ以テセント  
ノ貴政府ノ意見ハ予ハ最初不満足ナリシカ現今貴國  
ノ状態ヲ考フルニ別ニ異論スヘキナシト却テ又衙門  
ニテハ此事ニ就キ支那大臣中互ニ異論アリテ決セス  
漸ク最後ニ至リ此夥多ノ金額ハ全ク台島ニ於テ日本  
人ノ修整シタル道路及ヒ其他ノ工業ニ付テノ拂方ナ  
リトノ考説ヲ起シ遂ニ決定セシナリ然ルニ支那人ハ  
西郷都督退去ノ後忽チ夫ノ外形ヲ飾ルノ一語ヲ忘却



シ日本人占有ノ跡ヲ速カニ破滅スヘキヲ命シタリ  
キ因テ支那人ノ詐偽ノ口實トセシ建築物ハ自カラ之  
レヲ破却シ捨テタリ是ヲ以テ見ルニ若シ支那政府ニ  
於テ最初ヨリ此家屋其他ノモノヲ必ス要セシニ非サ  
リシナラハ夫ノ金額ハ勿論償金ト見倣スヨリ外ナカ  
ルヘシ是等ノモノヲ修整スルニハ充分ノ金是等ノモ  
ノ支那人ハ手ニ入ルト齊シク速カニ其遺跡ヲ盡ク毀  
チ捨テタリシハ言ハスシテ其不要ナルヲ證スヘキナ  
リ

第三十五回

日本ノ實況○人民ノ憤發○從軍願ヒノ事○日本ノ  
官負○外國人ノ意見○同慶ノ情ナキ事○ウエード  
氏ノ仲裁セシ論○日本ノ為メニ充分ノ結果  
北京ノ商議結局ノ一報ハ實ニ快キ成果ナルヲ以テ日  
本ハ達シ來レリ抑該件ハ最モ國家ノ安危ニ関スル重  
大ノ事件ナレハ小民ノ關係ナキ者ニシテ此事實ヲ知  
リ得サル者或ハ探知セントモセサル者ハ論ナケレド  
其他ノ者ニ於テハ始メヨリシテ實戰ノ念ハ絶ヘテナ  
カリキ況シテ廟堂ニ立ツ處ノ顯官ハ言フニ及ハス衆  
庶ノ愛國心アル者ハ常ニ交戦ニ決セサラントヲ希望  
シ又萬一已ムヲ得スシテ危險ノ地位ニ陥ルトモ始メ

大  
效  
富



ヨリ確定シタル主意ハ何處マテモ固守シ敢テ一國ノ  
正實ナル問題ヲ變セサランコトヲ夙夜ニ祈念セサルハ  
ナシ如此クナレハ支那ニ在テ使節ノ應接ハ漸ク平和  
ノ高議ニ運ビ行キタル時分ニモ本國政府ノ勢カハ少  
シモ弛ム處ナク若シ已ムヲ得ス戰爭ヲ開クノ場合ニ  
至ラハ速カニ其報告ニ應セントスルノ準備頻リナリ  
之ニ因テ天皇陛下ヲ始トシ皇族華士族平民ニ至ル  
マテ上下ノ國人攀テ其カニ堪ユヘキ程ノ軍資金ヲ納  
メテ以テ思慮極マル時ノ方法ヲ助ケントシ又國民ノ強  
壯ナル者ハ殊更ニ誘引徵募スルヲ俟タス自カラ請テ  
兵籍ニ入り戰場ノ勞役ニ堪ヘンコトヲ奮テ懇願セリ是  
ヲ以テ官廳ノ職務ハ重モニ諸國ヨリ出願シ或ハ獻納  
セントスルモノヲ受取り又ハ檢査スルヲ以テ專務ト

ナスニ至リ是等ノ願ハ悉皆許容シ置キ而シテ日後若  
シ事アルノ時ニ當テハ速カニ是等ノ助勢ヲ依頼スヘ  
キ旨ヲ以テ其頃ハ一々之ヲ謝絶シ置キタリ蓋シ國家  
危険ノ時ニ會シ當國民ヲ助ケントノミノ意見ナリト  
雖モ未タ其事ノ期ス可ラサルニ斯ク憤發セシハ實ニ  
感賞スヘキ奇特ノ存念ニシテ夫ノ亜米利加合衆國ニ  
於テ南方ノ叛逆蜂起セシ時ニ當リ衆民已カ慾情ヲ捨  
テ實心ニ奮發セシ事ノ外絶ヘテ比類ナキ趣ハ官府ノ  
記録ニ於テ數多明證スル處ナリ余記者自カ以為ラク  
此安危ノ時ニ際シ内ハ其課業ニ安ニシ外ハ已ムヲ得  
サル公道ノ事件ヲ助ケントスル下民ノ實情ニ對シ官  
府ニ於テ明カニ之カ保證ヲ為サントハ頗フル難ニス  
ル處アリシナラン然シナカラホルモサ一条ニ付テノ



事務ヲ各其長スル處ニ因テ奉行シタル如キハ實ニ此  
國ニ在テ感嘆ニ堪ヘタルヲナリキ既ニ同年四月中長  
崎ニ於テ確乎タル英断ヲ行ヒシ時ハ敢テ人材ノ乏シ  
キヲ覺ヘス武勇ノ卓越タルハ兵軍ノ首領トナリテ台  
島ニ威名ヲ轟カセシアリトモ謹慎ニシテ且ツ剛強ナ  
リシハ北京ニ使命ヲ奉セシ人ニ決シテ及フ者ナカリ  
キ如此ク充備セシ上ニ又東京ニ於テ百般ノ事務ヲ整  
理スヘキ為メニ設ケタル官局ヲ管理セシハ平井希昌  
ト稱スル壯年ノ官負ニシテ位階ハ未タ貴カラサレ  
其勤勉ナルヲ衆ニ勝レ能ク其任ニ堪ヘタル人ニテ諸  
般ノ事務ヲ處分スルノ鋭敏ナルニ因テ大イニ衆人ノ  
感賞ヲ受ケタリキ  
此時ニ當テ啻ニ外形ニ因テ思想ヲ起ス輩ハ皆心ニ以

為ラク現今上ハ政府ヨリ下萬民ニ至ルマテ均シク戰  
争ニ議決シ若シ己ムヲ得サル場合ニ至ラハ最後ノ方  
法ヲ行ハントスルノ用意ナリト然レ能ク其實狀ヲ  
察スル時ハ決シテ此等ノ事アルニ非ラス蓋シ夥多ノ  
軍用品ヲ蓄積シ或ハ支那沿海ノ地方ニ於テ驚クヘキ  
武器ヲ聚集シ或ハ國內ノ兵丁ヲ徵募スル等ノ事ハ素  
ヨリ國安ヲ維持スヘキ準備ノ方法ニシテ又是等ハ唯  
ニ日本國ヲシテ交戦ノ時ニ當テ困難ナキノ地位ニ在  
ラシメントスルノ策ノミニ非ラス實ハ之カ為メニ平  
和ヲ保存スルノ方法ヲ補助スルヲ少カラサレハナリ  
又如此ク始メヨリ大膽ナル形状ヲ示ス時ハ日本ノ所  
為ノ適當ナルヲ正シク證明スルノ手段トナリ却テ支  
那諸大臣ノ決心ヲ動カスノ助ケトモ為ラサルナキニ



非サルカ故ナリ今回ノ事件ニ就テ日本國ノ所置ト又  
其使節ノ行ヒニ處トハ實ニ能ク符合セシモノニテ齊  
シク其目的トスル所ハ人民ヲ保護スヘキ政府ノ權ヲ  
表明スルト先年ノ遭害ニ付テ恢復ヲ請求スルト  
又後來ノ保護ヲ保証スヘキトテ判決スルノ一途ニ  
基ツキタリシト雖モ實ニ此目途ヲ達シ得ヘキヤ否ヤ  
依信ハ少シモナカリシ故ニ中頃ニ至テハ「哀シムヘキ  
處置ヲ取ラサルヲ得」トノ論者ノ想像說モ敢テ非議  
トスルヲ得サル時アリシ蓋シ成ルヘクハ平和ノ方法  
ヲ行ヒ若シ己ムヲ得サル時ハ軍事ニ從ハサル可ラス  
トノ意見ハ始終不變ノ決志ナリキ如此キノ景況ナリ  
シ故該件ノ全ク平定セシ時ニ當テハ上下一般ニ只管  
其幸福ナル結局ヲ悦フ外敢テ他ノ決議ノ方法ニ論

及スル者ナク勿論此成果ニ就テハ一々満足ナルヲ  
見出セシニハ有ル可ケレト然シ全國ノ人民中一人ト  
シテ此最後ノ約定或ハ其保證セシ方法ニ就テ不満ノ  
言詞ヲ發スルモノナカリシハ實ニ奇特ノ満足ト云フ  
ヘキナリ  
外國人社會ニ於テモ又該件ノ個様ニ平定セントノ見  
込ハ絶ヘテナカリシモノト察セラレタリ是故ニ眞實  
祝賀ノ發言ヲ外國人中ニ於テ更ニ聞クヲナク反テ一  
二ノ有名大家ヲ除クノ外ハ今度日本ノ成績ヲ嫌忌スル  
ノ情アルカ如シ何故ニ外國人ハ日本國進歩ノ成績ヲ  
強チニ嫌忌スルカノ事ハ今茲ニ推究スルヲ要セサル  
モ容易ク答フルヲ得ヘキ程ノ問題ニシテ決シテ相違  
アラス抑、交際上勝利ノ報告ハ眞實ニ之ヲ喜悅スヘカ



ラサルトハ凡テノ状態ニ於テ然ル處ナリ蓋シ通商ノ  
公益ハ平和ヲ保存スル内ニ限レルモノナレハ紛議ノ  
順整セシヲ以テ一般ノ利益ト考定スルハ疑ヲ容レサ  
ル所ナレトモ今回ノ如ク日本ニ於テ唯、外援ヲ受ケサル  
ノミナラス其前途ニ横タハリシ艱難ノ妨碍ヲ聊カ念  
トセスレテ確乎タル一大功績ヲ遂タル聲譽ヲ得シ等  
ノ事ハ外地ニ在留スル歐州人ノ預テ期望及ヒ希願セ  
シ所ト全ク反對シタルカ故ナルヲ以テナリ又其本意  
ヲ察スルニ此功績ハ日本使節ニ於テ擔任スルノ外更  
ニ餘人ノ預カル所ニ非ラサルヲ以テ歐州政府ハ成ル  
ヘク其名代人ヲシテ此事ニ関涉セシメントラ欲スル  
ノ念慮ヲ起シ是ヲ以テ或ル名代人ハ確然此仲裁ヲ執  
行セシモ其實日本ノ利益ヲ進メントスルノ意見ニモ

非ス又廣ク開明ノ域ニ導カントスルノ主意ニモ非ス  
唯、全ク其本國ノ為メ或ハ各個ノ身上ノ為メニ感動サ  
レタル處置ナルトハ更ニ論辨ヲ俟スレテ知ルヘク實  
ニ東洋ノ騷乱ヲ憂ヘテノ舉動トハ大イニ相反對セリ  
畢竟其目途トスル所ハ日本ノ大功績ヲシテ北京ニ在  
ル英公使ノ仲裁ノ功ニ歸セントスルノ一点ニ存スル  
ノミ然レトモ斯ル譎詐ノ功勞ハ使節ノ始末書及ヒ政府  
ノ記録ニ因テ充分ニ之ヲ發露スルヲ得ヘク若シ又政  
府ノ秘藏ノ封印ヲ破リテ其書類ヲ悉ク熟覽スルトラ  
得ハ愈、以テ詐偽ノ所行タルトヲ判決スルヲ得ヘシ到  
底該件ハ一公使ノ仲裁ヲ要セサルモ日支兩國ノ共議  
ヲ以テ充分ノ結果ニ至ルヘキハ固ヨリ疑ヲ容レサル  
ナリ



備テ又大久保ノ仕遂タル始末ハ實ニ著シキ功績ニシ  
テ夫ノ台島ニ於テ西郷ノ牽キシ軍兵ノ僅ニ勇威ヲ示  
シタルノ類ニ非サルヲハ素ヨリ贅言ヲ要セス之ニ因  
テ世人敢テ日本人ノ大膽勇猛ナルニ信服セサル者ハ  
一人モナカリキ然ルモ亦未熟ナル國民ノ知覺ヲシテ  
唯、一時ノ權道ヲ以テ非常ノ功績ヲ得タル政府ノ詭計  
ニ就テ自得セシムルカ如キハ敢テ世人ノ悦ハサル處  
ナリ外國人論者ノ中或ハ始メヨリ日本ノ勝利ニ至ラ  
サランヲ希望セシモ蓋シ此理ニ依ル可ク又或ハ當  
帝國ノ政治家ハ支那ニ對シ審議スルノ任ニ堪ヘスト  
ノヲ断然明言セシ者モ亦之レト同一ノ見ナルヘシ  
然レニ是等ノ詭計ハ現今全ク消滅セシノミナラス後  
世ニ至ルマテ再發セサルヘシ

抑、何等ノ点ニ因テ該件ハ斯クマテ日本人ノ幸福ナル方  
法ニ決定セシカ之ヲ考フルハ甚ク容易カラスト雖モ  
若シ最初副島カ北京ニ訪問シ道理ト人情トノ二條ヲ  
以テ支那政府ニ迫リシ時支那政府ニ於テ明カニ之カ  
應答ヲナシ且ツ速カニ費ヲ惜マス以テ自ラ蕃民ヲ懲  
罰スルノ方法ヲ施セシナラハ日本政府ハ奚ソソ各國  
人民ノ為メニ著シキ功勞ヲ行フ為メノ偽計ヲ施スニ  
由シナカルヘシ然ルニ其此ノ如クナラスシテ目今遂  
ニ之ヲ偽計ト稱ス可ラサルノ場合ニ至ラシメシハ甚  
ク解シ易カラサルナリ斯クテ支那政府ハ最後ニ至テ  
相當ノ制度ヲホルモサニ施スヘキヲ盟約シタレニ  
到底是迄ノ實功ヲ奏セシハ日本ニシテ又二十四年間  
航客ヲ苦シメタル大平海ノ難所ヲ一掃セシモ日本ナ



リ故ニ後來蕃民ハ破船ノ難民ヲ厚ク待遇スヘク又其  
新約定ヲ固守ス可シトノ一ハ目下世上ニ於テ疑ヲ容  
ル者一人モナシ蓋シ蕃民ハ猶ホ其思想ヲ一變セサ  
ルカ故ニ未タ支那政府ヘ對シテハ宿怨ヲ抱クコアル  
カ知ル可カラサルモ外國人民ノ如キハ最早彼等ノ手  
ニ於テ殘害ヲ被ムルノ難ヲ免カレタリ此他緊要ナル  
利益ヲ夫ノ豪勇ノ帝國ナル日本ニ於テ保護セラレシ  
コ少カラス第一其國ニ於テ處置セシ事ノ全ク義舉ナ  
ル旨ノ許諾ヲハ直チニ夫ノ關係アリシ國ヨリ(仮令ヒ  
始メハ各國名代人ニ於テ異論アリシニモセヨ)得ラレ  
此始末ヲ論スル時ハ實ニ公明ノ正理ノ爲ニテ且ツ日  
本ハ他ノ勸戒ヲ用スシテ断然獨立不羈ノ處置ヲ證明  
セリ又外形論者ハ和議必ズ破ルニ至ルナラント臆

測セシモ還テ其信任ヲ厚カラシメ此他又其計畫ヲ試  
ミントシテ或ハ陸海軍ノ節制ヲ實地ニ檢査セントシ  
或ハ國家有事ノ時ニ當リ人民ノ奮發力ヲ發見セント  
セラレタリキ是等ハ實ニ容易ナラサル大業ナレハ此  
經驗ニ因テ得ラレタル利益ハ豈唯ニ衆人ノ尊敬及ヒ  
各開化國政府ノ懇情ヲ得ル如キノ比ニ非サルナリ噫  
矣



第三十六回

大久保ノ歸京○台島ニ於テノ事業○熱病ノ災害○  
 ボンハム氏異論ノ最終○西郷ノ蕃民ニ告諭セシ書  
 ○蕃民ノ惜別○凱陣ノ事○大隈ノ建言○外國公使  
 再ニ異議ノ事○支那ノ拳動○納貢ノ問題○ホルモ  
 州ニ在ル日本人ノ造営ヲ破却セシ事○支那兵攻撃  
 ヲ受テ死傷アリシ事

目今百事盡ク成定シ預メ日本政府ノ希望セシ所ノ如  
 ク充分ノ成果ニ至リタルニ就キ使臣ハ十一月一日ヲ  
 以テ北京ヲ出立シ同月七日上海ニ著シ同所ヨリ電報  
 ヲ以テ決議セシ始末ノ大要ヲ東京ニ報知ス同九日此  
 報告ヲ各省ニ布達シ且ツ支那國ニ於テ慥カニ此約定



ヲ履行スルヤ否ヤノ事實判然タルマテハ陸海軍ノ兵  
備ヲ解ク可ラサルノ命アリ大久保ハ直チニ歸國セス  
シテ台島ニ赴キシハ即チ西郷都督ニ今回ノ成果ヲ告  
知スルト又漸次退去ノ備ヘヲ命センカ為メナリ同十  
三日日本ヨリ特別ノ勅使ヲ派出シ正シク凱陣ノ命ヲ  
傳ヘ同十七日支那トノ約定書ヲ公然日本國中ニ布告  
アリ此レヨリ後チ日アラスシテ大久保ハ東京ニ歸著  
セラレシニ人民等勸喜シテ之ヲ迎フル者其数枚拳ニ  
逞アラス 天皇陛下ヨリモ特ニ非常ノ恩典ヲ以テ待遇  
セラレシナリ  
却説又ホルモサ島ニ在テハ六月中支那使節ノ來訪ノ  
後チハ無聊閑散ニシテ敢テ一事トシテ鬱悶ヲ遣ノ具  
ナク七月中旬マテニハ南部ノ種族モ盡ク降服シ來リ

タレハ都督ハ唯氣永ク北京ノ決報ヲ待ツヨリ外一向  
為スノ道ナカリキ是マテハ更ニ何等ノ異変モアラサ  
リシカ七月中ヨリ猝カニ熱病流行シテ兵卒ノ中此病  
ニ罹ル者頗フル夥シク陣中ニ在ル者ハ又一人モ免カ  
レ難ク見ヘタリシニ幸ニシテ都督西郷ト次官一名ト  
ハ無難ナレト其他一人トシテ多少此病ニ罹ラサルハ  
ナク遂ニ數百ノ兵卒死亡シタルヲ以テ已ムヲ得ス本  
國ノ援兵ヲ乞フテ此欠負ヲ補フニ至リシハ實ニ夥シ  
ク憫ム可キノ事ナリキ又隨從ノ米國人モ徃々此病ニ  
感深シ就中カッセル氏ノ病症ハ殊ニ重劇ニシテ殆ン  
ト恢復ヲ疑ヒシワツソン氏ハ病勢極烈ニ至ラサル以  
前  
台島ヲ離レシ故幸ニシテ第一ニ平愈シタリ然ルニ  
同氏ノ長崎ニ寓居セシニ付キ米公使ビンナム氏ヲシ



テ再々ホルモサ事件ニ抗論スルノ念ヲ起サシメワツ  
ソシ氏ノ再々台島ニ赴カントスルヲ聞クヤ直チニ以  
前ノ如ク嚴ニ之ヲ禁止セシニ依テ暫ラク出立ヲ猶豫  
セシカ今度ハ格別ノ抑制モナクシテ止ミタリ  
十二月一日ヨリ以前ニ支那國ニ於テ約束ノ如ク償金  
ヲ拂ヒタルヲ以テ同月三日都督西郷ハ其全軍ヲ率キ  
テホルモサヲ引揚ケラレシカ其出立ノ前日二通ノ告  
諭書ヲ頒布シ其第一通ハ熟蕃人民ニ共フルモナリ  
曰ク

我兵ノ此地ニ來ル所以ハ嚮キニ己ニ布告セリ人民  
皆其意ヲ體認シ能ク我カ為メニ心カヲ竭シ以テ我  
軍ヲ幫助ス我軍向フ所蕃人懾服ス既ニシテ清國政  
府頓ニ異議ヲ生シ荏苒日ヲ度ル今ヤ兩國商議已ニ

決シ清國ノ請ニ從ヒ該地ノ人民ヲ擧ケ諸ヲ清國ニ  
皈ス我固ヨリ知ル該地人民懇篤至切我ヲ視ル親ノ  
如シ我實ニ之ヲ嘉ミス自今以降汝人民等清國官  
吏ヲ視ル猶我官吏ヲ視ルカ如ク能ク其政教ヲ奉シ  
敢テ三尺ヲ踰ルナカレ特ニ茲ニ曉諭ス  
又其第二通ハ日本人ハ敵對セシ生蕃土人ハ告諭スル  
モノナリ曰ク

往歲牡丹社ノ蕃人我カ琉民ヲ殺ス罪誅ヲ容レズ從  
道謹ニテ天皇ノ威命ヲ奉シ來テ其罪ヲ問フ既ニシ  
テ僞們過テ悔ヒ轅門ニ稽顙ス我憫ミテ之ヲ赦ス庶  
幾クハ共ニ聖澤ニ沐浴シ仁壽ノ域ニ生長スヘシ今  
ヤ清國ト講和シ悉ク其請ヲ聽ルス我飯朝日アリ僞  
們謹テ清國ノ教ヲ奉シ敢テ三尺ヲ踰ルナカレ



斯クテ兵軍一統乗船ノ時ニ當テ瑯嶠ノ住民等ハ陸續  
トシテ海岸ニ集リ又曾テ軍兵ニ近寄シテモナキ東部  
ノ蕃民等モ相共雲集シ來リテ一同送別ノ状ヲ顯ハシ  
タリ中ニ就テ支那語ヲ解スル土人ハ別シテ懇口ニ是  
迄ノ公平至正ノ處置ヲ陳謝セシモ蕃民ニ於テハ絶テ  
此事ナカリキ此時ニ當テ土人等其新タニ交ハル所ノ  
友ヲ失フノ不幸ヲ憂フルカ故ニ更ニ隔心ノ様子ナシ  
蓋シ土人ヲシテ新ニ知覺ヲ開カシメ又彼等ヲ同種ノ  
人間トナシテ懇篤ニ撫恤シタル大恩人ニ離別セント  
スル時ナレハナリ加之土人等ハ新タニ此難義ヲ施セ  
シハ全ク支那人ノ所為ナリト思ヒ定メタル故其怨恨  
ノ憤懣心ガ今將ニ離別セントスル時ニ際シ悲哀ノ情  
ト共ニ發セシ如シ是ヲ以テ土人等頻リニ悲ニ歎キテ

止マカリシカ都督等遂ニ端舟ニ移ラントセシ時一同  
前後ニ纏ヒ其手或ハ衣服ニ纏リテ離別セサラントテ  
哀願セシハ實ニ愍然ナリシカ此際如何トモシ難ク決  
然本船ニ乗組ミタリ西郷ハ頗フル銳敏ナル人故ニ此  
切愛ノ愁訴ヲ聞キテ感悅少カラス彼等ノ形状甚タ粗  
暴ナルカ如キモ同氏ノ進退功勞ノ為メニハ實ニ最上  
ノ贈リ物ニシテ却テ本國ニ於テ貴顯ノ人ヨリ褒賞ヲ  
得タルヨリハ遙カニ優レリト云フ

都督ノ外地ニ在リシ間ハ凡ソ半年餘ナリシカ十二月  
七日始メテ長崎ニ皈著シ同月廿七日東京ニ入リシカ  
同氏ノ拔群ナル功勞ニ因テ大イニ世上ノ感賞ヲ得タ  
リ  
是レヨリ後チ未夕僅々ノ殘務アレ氏中ニ就テ最モ緊



要ナルハ今回ノ事跡ヲ修撰スルト又此事件ニ関涉セ  
シ人ノ功勞ヲ調査スルノミナリ明年一月中旬大隈  
重信ハ明カニ 天皇陛下ニ獻書シ ホムカ 台灣蕃地事務局ヲ  
閑鎖スヘキ用意ヲ上申セリ則チ左ニ其建言書ヲ示ス  
客年一月重信等密論ヲ奉シ討蕃ノ方略ヲ獻ス四月  
台灣蕃地事務局ヲ置カレ重信負ニ長官ニ備ハリ庶  
務ヲ統理ス五月西郷從道兵ヲ率井テ蕃地ニ赴キ兇  
ヲ殪シ順ヲ容レ屯營已ニ久シ同月全權公使柳原前  
光清國ニ駐劄シ八月全權辦理大臣大久保利通更ニ  
同國ニ使ス利通等鞠躬盡瘁能ク專對ノ任ニ堪ユ十  
月同國ト條款ヲ互換ス十一月利通等復命十二月從  
道凱旋置局ヨリ茲ニ至ル凡ソ八閱月ナリ是ニ於テ  
難民ノ冤始メテ伸コ属藩ノ名分始メテ正シク萬國

ノ航旅始メテ安穩ニ歸シ國家ノ威權隨テ立ツ夫我  
兵ノ發シテ途ニアルヤ外臣頗フル異言アリ清國政  
府粹ニ使ヲ馳セ書牘ヲ贈リ其所見大イニ相逕庭ス  
人或ハ朝旨ノ所在ヲ察セス名義ノ順逆ヲ疑フアリ  
度支ノ不給ヲ議スルアリ浮説喧傳國家ノ艱難モ亦  
極マル重信等甘ンシテ其責ニ任スト雖モ日夜遑々  
トシテ職務ヲ墜サンヲ是懼ル幸ニ 天皇陛下明  
断疑ハス廟謨愈周密軍備大イニ張リ朝野ノ人心體  
認歸嚮スル所アリテ或ハ挺身國事ニ斃レンヲ欲シ  
或ハ賞ヲ納レ軍資ヲ補ハンヲ願フ内外主掌ノ各負  
協心戮力遂ニ能ク討蕃ノ一大事業ヲ成就ス此拳ヤ  
各國ニ對シテ慙ルナク千古ニ亘テ光リアリト謂フ  
ハシ抑、浮説喧傳ノ際ニ當テ事若シ沮喪中止スル所



アラハ難冤伸ヒス属藩ノ名分正ヲ失ヒ蕃國ノ航旅  
安穩ノ期ナク宇宙間永ク一種ノ食人國ヲ建ツルニ  
至ル苟モ如此クンハ營ニ笑ヲ各國ニ貽スノミナラ  
ス國家ノ威權或ハ將ニ墜地ノ兆アラントス然ラハ  
即チ討蕃ノ拳其關係豈ニ淺尠ナランヤ伏シテ願ク  
ハ 天皇陛下競業詳思往ヲ推シ來ヲ慮リ益聖業  
ヲ擴充セララル、モノ蓋シ此討蕃ノ拳ニ止ラサラン  
トヲ重信謹テ請フ臺灣蕃地事務局ノ名ヲ停メ長官  
ノ稱ヲ解キ本職ヲ守ルヲ得ント若シ夫局内ノ書類  
ヲ修整シ費用ヲ勘査スルカ如キハ之レヲ從前ノ人  
員ニ委シ旬月ノ後置局以來ノ處務順序ヲ併セ詳細  
具陳セントス謹テ奏ス  
目今百事盡シ整頓シタル時ニ當テ此ニ又外國公使ノ

了解シ難キ旨ヲ異論スルノ一事發起セシハ甚夕憂フ  
ヘキトナリ但シ決シテ驚クヘキ程ノ事ニハ非ス其次  
弟ハ則チ前キニ記載セシ建言書中明カニ外國ニ涉リ  
タル引説アリ且之レヲバ政府ノ方向ニ就テ起リタル  
数多ノ妨碍ノ一證トシテ公言セシヲ以テノ故ナリ蓋  
シ嚮キニ外國公使ノ異論アリシトハ衆人ノ能ク知ル  
處ニシテ中ニモ或ル一公使ハ殊更ニ異論發セシトア  
リキ然ルニ公使等ハ此引證ヲ以テ批評ヲ下スノ一問  
題トナシ敢テ其辨解ヲ請求セリ若シ其望ミノ如ク引  
證ノ趣意ヲ充分ニ明示セシナラハ却テ公使等ハ耻辱  
ヲ被リ面目ヲ失フヘキトナリシ  
是レヨリ後数日ヲ經テ大隈ハ左ノ書面ヲ太政大臣三  
條ヘ呈セラレタリ曰ク



予ノ建言中「夫我兵ノ發シテ途ニアルヤ外臣頗フル  
異言アリト」ノ一句ニ付外國公使ノ請求アル旨ヲ以  
テ閣下ヨリ予ニ其辨解ヲ望マレタリ因テ左ノ答辨  
ヲ呈ス素ヨリ外國公使ハ日本國ノ兵ヲ台灣ニ發出  
スルニ就キ少シモ異論ナシ然レモ或ル公使ノ説ニ  
「我國ハ支那國ト交際ノ條約アルニ付今度征臺ノ為  
メニ我國ノ汽船或ハ市民ヲ雇ハルハ全ク支那國  
ニ敵對センカ為メカ或ハ然ラサルカノ理判然タル  
マテハ敢テ抗論セサル可ラスト」トヲ言ハレシト  
ニヨルナリ  
抑、今回ノ事件ニ就キ日本ノ處置ト支那ニ於テ執行セ  
シ處置トノ間ニハ甚ク著シク反對セシトアリ先ツ第  
一ニ北京應接ノ間支那政府ニ於テハ其審議ノ始末

ノ世上ニ流布センヲ防カン為メ大イニカラテ盡シ  
是ヲ以テ從前政府ノ官報者タル「北京ガゼット」新聞モ  
此時ニ當テハ何等ノ目途ニ回テ日本ハ征臺ヲ行フカ  
又如何ナル事アツテ支那ハ國權ノ問題ニ就テ譴責ヲ  
受タルカノヲモ探知シ得ス漸ク紛議落著シ日本兵  
ノ台島ヲ退去セシ後チニ至テ始メテ了解セシ程ナリ  
シ加之支那皇帝陛下ニ於テハ此事件ニ就テ少シモ聞  
知セシトナク總理衛門ニ於テ如何ナル處置ヲ施セシ  
カ更ニ知ルヲナク千八百七十五年ノ始メニ崩セラレ  
タリ如此クノ状態ナレハ大久保ノ歸國ト西郷ノ凱旋  
トノ如キ事終ルト齊シク忽チ國中ニ傳呼シ「日本ハ全  
ク其罪ニ服シタルヲ以テ支那政府ハ夥多ノ貢金ヲ納  
レントヲ約シタリト」ノ評説ヲナセシハ實ニ相傳ヘテ



確實ナル如クナリシ蓋シ此訛言ハ去ル九月中即チ日本政府ニ於テ在留支那人ノ保護ヲ告諭シタル時ニ當テ行ヒタリシ詭計ニ背カザラントラ欲スルガ故ニシテ其實國中ノ異議ヲ恐ル、ノ怯懦心ニ曰ルカ若クハ日、支兩國間ノ通商ヲ妨ゲサランヲ願フカ為メニ出ルカ支那官吏ヨリ言ヒ出セシ事ナルハ疑ヒナキナリ十二月下旬琉球ノ商船福州ニ著セシニ該州ノ官吏ハ其船長及ヒ水夫ヲシテ同港ノ税関ニ於テ服從ノ禮ヲ行ハシメ再ヒ琉球ヲ管領スルノ權ヲ擴充スヘキトニ注意セサリシ旨ヲ以テ罰ヲ受ケタリ日本ニテハ之ヲ聞キ決シテ支那政府ノ承諾ス可キトニ非ルハ知ルトハ雖モ先ツ試ミ之レヲ推問シ其事故ノ辦解ヲ請求セリ又此事ニ係リタル琉球人ハ千八百七十五年四月

出府ノ命ヲ蒙リシカ目今未タ糾問中ナリト云フ餘テ支那人ハ日本兵ノ屯營セシ地ヲ所有シタル上ハ速カニ其遺跡ヲ悉皆破却シテ聊カ得ル所アラントスルノ形状ハ既ニ前回ニ辨明セシ如クナリシガ其後千八百七十五年一月中速カニ該地ノ處置ニ着手シ從前放棄シテ顧ミサリシ地方ハ實産ノ大氣ヲ及ボサントシ盡カセシハ是迄ノ状態ニ比スレハ頗フル快活ナルヲ覺ヘタリ但シ支那人ハ西海岸ノ地方ヘハ輕々ニ來往スレト甚タ戒心ノ状アリテ敢テ内地ヘハ近寄ラザリシ又沈葆楨ハ頃日ノ實驗ニ由テ少シク利益アルヘキノ證據ヲ知得セシヲ以テ即チ皇帝陛下ニ建言シテ曰ク「台湾ハ今後政府ニ於テ之レヲ統轄スヘシ而シテ該地ノ位置ト其所要トニ照準シテ簡易ノ方法ヲ設ク



ヘシト加之同氏ハ又福建總督ニホルモサハ要地ナル  
ヲ以テ總督ノ居所ヲ該地ニ移サンコトヲ計レリ目今此  
地ニ總督ノ居所ヲ置クハ蓋シ同氏ノ意見ニ起レリ  
是レヨリ後々愈々管轄ノ權ヲ擴充セシカ為メ瑯嶠灣ヨ  
リ少シク北方ノ一村ナルホニカンヘ少許ノ兵負テ派  
送シ同所ハ蕃民ノ攻撃ヲ受クルノ患ヒナシトシテ皆  
一同安堵シ居タリ然ルニ一月下旬ノ頃士官二名偶南  
方ノ道ヲ通行セシニ蕃民等此ニ埋伏スル者アリテ遂  
ニ兩人ヲ虐殺セリ之ニ曰テ報讎ノ征討ヲナサンコトヲ  
決シ二月十三日兵卒二百人ヲ發シテ夫ノ暴徒ノ來リ  
シト覺ユル村落ヲ圍マシム此進軍ノ途中一事ノ妨害  
ナクシテ該村ニ達セシガ老人婦女女子ノミ在リテ一向  
男子ノ影迹ヲ見サルヲ以テ其殘レル者ヲ一人モ余ク

ス誅戮シ又其家屋ヲ盡ク破却シ終カニ其事業ヲ終リ  
タルノ思ヒヲナシテ徐々歩ヲ飯シ未夕幾許モ進マサ  
ルニ忽焉トシテ四方ノ山上或ハ林藪ノ間ヨリ蕃民等  
突出シ勢ヒ甚夕強ナリシモ當時支那兵ノ指令官一名  
ハ聊カ屈スル色ナク頗フル剛勇ノ拳動ヲナセシカ其  
他ノ隨兵ハ皆ナ悉ク周章狼狽シテ其紛乱譬ルニモノ  
ナカリシ蕃民等ハ最初銃砲及ヒ弓矢ヲ用ヒシカ中頃  
ハ恰モ殆兒國ノ兵事ノ如ク山上ヨリ烈シク巖石ヲ投  
下シ終ニ劍鎗ヲ揮テ支那兵中ニ侵入セリ此戰爭ニテ  
支那人ノ死者其長官ト共ニ九十餘名ニテ蕃民ヲ殺ス  
コト稍々三十人ニ過キス而シテ折角ホルモサ蕃民ヲ管  
轄スルノ權ヲ擴充セントシタル支那政府ノ事業モ唯  
一度ニテ事終レリ



其書第三十七回

蕃地事務局ノ閉鎖 ○ 後來ノ事件 ○ 日本人才能ノ證  
○ 歐洲人ハ關係ナク又知ラサル事 ○ 各國欽差ノ習  
慣ノ拳動 ○ 外國人ヨリ日本ヲ制スル事 ○ 進歩ノ真  
ノ敵手 ○ 日本ハ公道ヲ待ツ事

千八百七十五年四月ニ至リ蕃地征討ニ就テノ事件全  
ク終成シ次テ一ヶ年前是等ノ事務處分ノ為メニ設ケ  
タル官局ヲ閉鎖ス如此クナレハ最早此事ニ就テノ事  
件ハ決シテ再發スルノ患ヒアルマジク若シ萬一事ノ  
發スルアラハ夫レコソ日支兩國間ノ交際新タニ破ル  
、ノ兆ニシテ其時ハ新タニ事ヲ定ムルノ一點ニ因テ  
考定セサル可ラス儲テ是迄ノ事件ハ日本政府ニ於テ

太  
文  
官



モ逐一ニ書記シ且諸件ニ就テ執行セシ方法ノ完全ナル記録ト又東京ノ諸執政家ニ於テ確定セシ意見等ヲ保存スベキ為メノ文書トヲ作り後世全備シタル官撰ノ歴史ヲ編纂セラル、ナラント信スルナリ是ヲ以テ此書ニ載スル處ノ断々タル筆記モ全ク二條ノ要件ノ参考ニ供センガ為メニ編纂セシモノニシテ當亜細亞帝國ニ於テ今回ノ事件ニ就キ發覺スル處アラントスルノ補ヒナキニ非サルナリ

抑日本ハ嘗ニ其國內ノ義務ノミニ非ラスニテ廣ク外國ノ鴻益ニ関シタル一大緊要ノ公論ヲ起シ不羈獨立ノ勢カヲ以テ其請求ヲ固守シ又勇氣ト才能トヲ以テ其貴重ノ意見ヲ執行シテ或ル國民ノ粗忽ナル事件ヲ行ハントスル者ヲ壓倒シ而メ最モ聰明ナル經驗ニ因

テ進歩セントスルニ堪タル才能アルヲ余ハ最モ初メニ於テ之レヲ説明センヨ欲シタルヲナリ是故ニホルモサ征討ノ拳ハ始メハ人情ノ善良ナル感覺ニ因テ鼓動セラレシモノニシテ遂ニ堅忍不拔ノ決心ト又時機ニ從テ謹慎ノ裁量トヲ以テ充分ニ功ヲ遂ケタルモノナリ蓋シ近世各國ノ諸事件ヲ通覽スルニ格別ノ大事ニ非ラサル外ハ其處置ノ詳細ナル處ニ至テハ決シテ前件ノ上ニ出テサルナリ然ルニ歐洲各國ニ於テハ却テ之レヲ好ミセサルノミナラス該件ハ公明正大ナル意見或ハ各國ノ鴻益ノ為メニスルノ意見ヲ以テ充分ナル成果ヲ得タル次第ヲ明知セサルカ如シ然リト雖モ斯ク成果セシ事業ハ外交ノ度量ト治國ノ才トノ卓越タル一證トナスベク又外國ト事ヲ處置スルノ任



ニ堪ヘタル政府ノ功績ト認ムヘキコトニシテ既ニ如此  
キ證迹ノ起リタルハ從來一度ヤ二度ノ事ニ非ラサル  
ナリ然ルニ又外國ニ於テ之レヲ認可セサルハ何故ナ  
ルカ則テ此ノ二條ヲ以テ辨明スヘシ第一歐洲政府ハ  
日本人ノ性質勇氣及ヒ大志ニ就テ少シモ知ル處ナキ  
ガ故ナリ第二日本ニ代理タル欽差ニ於テ其本國ノ利  
益ト考定センコトヲ報知スルニ當リ或ル時ハ無害ノ誤  
見モアリテ又或ル時ハ有害ノ誤見モアレバ歐洲政府  
ハ唯其報知スル處ニノミ拘泥シテ日本政府ノ所為ヲ  
誤解スルニ起レリ是レヲ以テ通常日本ノ所為ハ浮氣  
ノ遊戯又ハ偶然妄想ノ議論又ハ事理ニ疎キ頑愚ナル  
意趣ニシテ時トシテハ姑息ニ愛スヘキコトナキニ非ラ  
サレバ決シテ正確ナル證跡或ハ端正ノ同情ヲ以テ親

近スベキニ非ラス等ノ妄評ヲ下シ日本ヲ見ルコト小兒  
ノ如ク玩弄物ノ如ク唯ニ戯ニ開化ノ事業ヲ模擬スル  
玩弄國ト見倣セシニ似タリ蓋シ歐洲政府預テ日本  
ニ對シ懇懇ナル心情ニテアリシナラハ今回ノ如ク日  
本ニ於テ其國家ノ弊害ヲ一掃セシ時ナトニハ均シク  
日本ノ背ヲ撫シ世人他ノ賀スベキコトアル時ハ其人ノ  
背ヲ叩キテ戯ルコトアリ則チ其事ニ  
テ去ル六年間辛苦シタル大事業ニ就テモ其目途ノ如  
何ヲ真實ニ認識スベキ程ノ動作モナク又實心勸解ノ  
一語モ非サリシ故畢竟其レカ為メニ歐洲ノ政府モ誤  
認シ或ハ輕蔑スル處トナリタルナリ然リ而シテ此反  
響ヨリ折角大事業ヲ仕遂タリシ當國モ遂ニハ他ノ之  
レヲ助クル者ナキ孤獨ノ身トナルノミナラス萬一疲



弊困難ノ時ニ至テモ最モ主トシテ懇情ヲ盡スヘキ者  
ヨリ却テ妨碍ヲ受クルノ場合ニ至ランハ甚々哀シム  
ベキ事ナラスヤ

外國政府ノ日本ノ進歩ニ関涉セサルノ主意ハ大抵如  
此シ然リ而シテ其関涉セザルヨリシテ遂ニ日本國ノ  
威名ヲ顯ハスヲ悦ハザル諸公使ヲシテ日本ヲ妨害ス  
ベキ機會ヲ得セシムルニ至ル是ヲ以テ前ニ説明シタ  
リシ日本ノ進歩ヲ妨害スヘキ第二條ノ事實モ又此理  
ヨリ起リシ事ニテ稍、今回ノホルモサ事件ニ就テ以テ  
之レヲ明示スルヲ得タリ蓋シ此事ハ外國公使等カ抑  
壓ヲ以テ他國ノ事ニ関涉スルノ一法ニシテ誰レ彼レ  
ノ差別ナク互ニ同心シテ行ラ慶ナレハ今更ニ彼等ガ  
國權ヲ妄用スル趣キヲ公言スルニ畢竟悖戾ノ議論ヲ

招クノミニシテ決シテ合意ノ方法ハ得難カルヘシ縱  
令モ又此事ニ力ヲ盡シ敢テ充分ノ審議ヲ為シ得タリ  
ト却テ之ガ為メニ日本國ノ不都合ナル事ヲ醸スニ至  
ラン愚モ甚シキト云テベキナリ

日本ニ於テ今ヨリ十五年以前始メテ外國トノ交際ヲ  
開キシ時ノ方法ハ頗ル不便ヲ極メ恰モ頸械ヲ纏ヒ  
タル如キノ形状ナリシ故(縱令ヒ其頃難義ヲ洞見スベ  
キ識力ナキニモセヨ)遂ニ外國人ヲシテ日本ノ活動ノ  
機柄ヲ掌握セシムルニ至リ再ヒ之ヲ脱セントスルモ  
既ニ及ハス是ヲ以テ日本ハ疾クニ其獨立國ノ權利ノ  
一部ヲ外國人ニ渡セシモノニシテ又外國公使ハ日本  
ヲシテ永ク之ヲ恢復セシメザランコトヲ決スルニ至レ  
リ蓋シ思フニ如此キ說ハ果シテ後人ニハ信ゼラレザ



ルモ此ニ納得シ易キ明カナル證據アリ第一日本ニ於  
テハ些々タル内國ノ政法モ安シテ公告スルヲ得サレ  
ハ況ンヤ外國人ニ關係スル法度ニ於テハ決シテ安意  
スルヲ得ス是他ナシ外國ノ切問又ハ議論又ハ諫言  
或ハ凡テ日本ノ方法ヲ覆ヘスベキ企テアラシク恐ル  
カ為メニテ則チ權利ノ幾部ヲ失フノ明證ナリ此理  
ヲ以テ百般ノ要件實ニ之レヲ成就スベキノ機會ヲ得  
ルニ至ルマテハ多ク之ヲ曖昧秘密ニ飯ス然レモ又其  
秘隱スルハ却テ新タニ誹謗論議等ヲ受クルノ根本ト  
ナルヲアルナリ既ニホルモサ事件ニ就テ合衆國公使  
ノ所為ノ如キ現今世人ノ能ク熟知スル所ニシテ則チ  
日本人ノ所行ハ多少外國人ノ論抗ヲ受クル事ナルヲ  
推知スルニ足レリ但シ此事件ニ就キ以テ妨碍ヲナセ

シハ同公使一人ノミト思フ可カラス同氏ハ唯、今回ノ  
事ノ為メニ陽ニ其意向ヲ表ハセシヲ以テ他ノ公使ニ  
比スレハ遠慮ナキノミナレモ却テ他ノ公使輩ヲ至テ  
ハ若シ事アルノ時ハ甚タ薄情ナル貪心ヲ逞フセント  
スルノ實證アリ直白ニ之レヲ言ヘハ日本ハ外國公使  
ノ黨ニテ管轄スベシトノ事ヲ有カ國ノ欽差ハ恒ニ其  
心ニ決スルヲ以テナリ蓋シ其如此クナラザルモ既往  
ノ事情ヲ熟視スレハ日本ハ既ニ外國ノ管轄ヲ受ケタ  
リト云モ敢テ虚ナラザルノ形勢ナリ畢竟最初ノ條約  
書タル不幸ノ約ヲ結ビ遂ニ外國公使ヲシテ其威權ヲ  
掌握シ其隨意ニ之レヲ使用セシムルニ至リ之ヲ挽回  
セント欲スルトモ彼等固ク之レヲ許ス可カラザルハ  
其常ニ唱フル所ノ口實ヲ以テ知ルヘシ蓋シ又彼等如



何ニカヲ竭シテ支フルモ其之レヲ恢復スルハ難キニ  
アラサレ其結果ニ至ルノ以前日本ハ頗フル思慮ヲ  
苦シメラレ又夥多ノ損失ヲ被ルヲ免レ難カラシ加  
之現今彼等ハ益其特權ヲ擴充シテ大イニ掌握スル處  
アランヲ欲スルノ念日一日ヨリ甚ク又外國社會ノ中  
ニ之レヲ助クル者アリテ勉メテ彼等ヲ獎勵セリ既ニ  
頃日公告セシ諸事ノ手續キ(日本政府ノ處置舉動トモ  
前以テ之レヲ外國公使ニ告知セシモノニ非サレハ決  
シテ正理トナス可ラストノ申合セナリ)ヲ以テ前狀ヲ  
察スルニ足レリ  
如此キ形勢ハ永續スベキ事ニ非サルハ勿論ナレトモ少  
シモ早ク此風ヲ除去スルハ(極メテ充分ノ點ニ至ラス  
レ)萬國適宜ノ利益タル所ナリ頃日論者ノ説ニ日本ハ

退歩ノ狀ヲ顯ハシタリト云ヒ或ハ日本ハ自由ヲ得ベ  
キ企テヲ為スヲ好マスト云ヒ或ハ近頃外國ノ請求地  
旅行其外種々ヲ拒メリト云フ如キノ痛言漸ク聞コユ  
レト是等ハ總テ矇昧ノ見ニシテ固ヨリ採ルニ足ラス  
豈ニ日本ハ進歩スルヲ好マザルノ理アラシヤ然レト  
此上益進歩セントスルニハ先ツ其以前ニ自由ノ權ヲ  
得ザル可ラス若シ然ラシテ唯、妄リニ外國ノ請求ス  
ル處ノミヲ許シ少シモ日本ニ益スル處ナク恰モ十年  
以來ノ景況ノ如キハ日本ノ為メニ決シテ願ハザルノ  
事ナリ  
然ルニ日本ハ條約ノ改正ヲ為ス可ラザルノ旨ニ定メ  
タリト而シテ其事實ヲ聞クニ條約改正ハ全ク同權ノ  
地位ニ至ラザレバ唯新タニ彼ヨリ准許スルノミノ事



ニ止マリ其詮ナキトノ趣キ日本滞在ノ公使ニ於テハ  
考フルガ故ニ明カニ此事ヲ執行スルヲ得ザル旨ヲ以  
テ日本ヘ向ヒ決答セラレタリト是ニ因テ之ヲ見レハ  
歐洲各國ノ公使ハ眞ニ日本ノ妨害ヲ為ス者ニシテ夫  
ノ條約改正ヲ許容セサランコトヲ其本國政府ヘ請求シ  
自カラ墻壁トナリテ交際ノ自由ヲ得ントスルヲ妨ケ  
タルナリ若シ日本ニ於テ明日ニモ一國ノ權利ヲ恢復  
スルヲ得タラハ其時ニ當テハ外國人ノ内地通行ヲモ  
速カニ免許スルハ固ヨリ論ナシ彼等ノ猶ホ之レヲ悦  
バサルヲ見レハ彼等ノ希望スル所ハ畢竟此點ニ止ル  
ニアラスシテ何處マテモ日本ノ不運ニシテ彼等ノ幸  
福ナル制限ナキ特權ヲ固守セントスルニアルナリ蓋  
シ外國政府ノ中ニモ(始メヨリ其通商ヲ神速ニ擴充ス

ルヲ專一トスルカ如キハ別シテ)是等ノ事ヲ能ク洞見  
シテ永ク變更セサランヲ欲スル有モ有レハ中ニハ是  
等ノ考ヘナク粗暴ニ拒ミタルモアルナリ到底各國ノ  
公使ナル者ハ不時ノ大事件ニ非ラザル他ハ一切其獨  
裁ヲ以テ處分スルノ權アルカ故ニ稍、撻取ルベキ事業  
モ彼等ガ為メニ障ヘラレシモ最早如此キ事ヲ永續ス  
ルヲ得ス又之ヲ永續スルガ如キハ其國民ノ耻辱ナレ  
氏未タ其終リトスベキ期限ノ目途アラザルナリ  
然ルモ又此ホルモサ問罪ノ一撃ニ就テハ日本ノ為メ  
ニ如何ナル利益アルカ又如何ナル弊害アルカノ事跡  
ヲ充分ニ説明スルコトヲ得タリ  
合衆國ノ公使ハ前ニ同國民ハ勿論他ノ外國人マデモ  
兇害ヲ受ケタル復讐トシテ企テタル公道仁慈ノ事業



(此事業ハ東方一帝國ノ圖策ニシテ大ニ合衆國ノ為メニセシ處アルヲ後チニ發見シタレド)ニ就テ頗フル異議ヲ起シタレド幸ニシテ日本ノ所為ヲ制止スルヲ得ザリキ是ヲ以テ見レハ此勇敢ナル小國ハ現今其國ニ被ル處ノ憂悶苦慮ノ反動ハ如何ナル成績ヲ發スベキマ得テ考フヘシ若シ又此上知覺大イニ進歩シ外國ノ公論自ラ其待遇ヲ一變スルニ至リ仮令中ニハ永ク抑壓シテ利益ヲ得ントスル者アルニモセヨ勇進シテ自由社會ノ中ニ列スルニ至リシラハ當國ニ於テハ如何ナル成績ヲ遂グヘキカハ執拗ノ心ナキ以上ハ何者ヲ論セス之レヲ推測スルヲ得ヘシ

附言

此書ハ素ヨリ倉卒ニ編纂セシ紀事ナルヲ以テ日本ト琉球トノ關係ノ如キ敢テ充分ナル明證ヲ示スニ至ラス若シ此明證ヲ必用スルトナラハ數百年來隸屬國タリシ事情ヲ説明セシハ最モ容易ナルヲナリ然レド支那人トテモ自カラ不公平ノ事從前外國人ハ此事ヲ信用シタレドモトシテ諸ノ請求ヲ廢絶シタル程ナレハ最早此問題ニ就テハ殊更ニ推究スルヲ要セス

口

支那ノホルモサ蕃地ニ政權ヲ施サル事ハ素ヨリ明白ナルヲ以テ殊更ニ同國ヨリ其明證ヲ需用スルニ及バサリシトノ事ヲ辯解セン為メ前使節副使島氏隨行ノ



一頁タル人後チニ左ノ比諭ヲ説ケリ

近世マテ英國ノ君主ハ世自カラ佛國帝ト稱シ且ツ  
佛國ノ百合花ヲ其徽號トセリ是支那ニ於テ台湾ヲ  
所有セリト云フヨリハ一層名目アル事件ナリ然レ  
モ若シ事アルノ時ニ當リ外國ノ使節英國ニ赴キ英  
國ハ佛國ヲ管領セヌト云フ慥カナル明證ヲ與フベ  
シトノ事ヲ請求セシナラハ果シテ此使節ハ嘲笑ヲ  
受クルナルハシ故ニ如此ク明白ナル事件ハ勿論口  
演ヲ以テ審議シ文書ノ明證ヲ望マザリシナルヘシ  
ハ  
チャーレヴリアド、メーラ氏ノ記録其他諸書ニ十七年紀ノ  
初世日本人<sup>ホルモヤ</sup>台湾ヲ管轄セン<sup>ト</sup>ノ明證アリ中ニモ前記  
録ノ記者ハ當時日本人武勇ノ證跡ヲ詳細ニ掲載シ又

其レヨリ漸次衰亡ニ至ルノ次第ヲモ説明セリ

ゼネラルルジャンドル氏ノ始メテ南方<sup>台湾</sup>ノ内部ニ巡  
行セシ始末ノ傳記ハ千八百六十八年合衆國外交報告  
書ノ中ニ記載シ且ツ普通ノ始末書ノ如キ曖昧ナルモ  
ノトハ全ク變リ頗フル明瞭詳細ナリ

ホ

琉球航客ノ兇害ニ遭遇セシノ事ハ最初日本ヨリ支那  
政府へ報告セザリシ蓋シ北京政府ニテハ此事件ガ東  
京施政家ノ耳ニ達セシヨリ餘程以前既ニ承知セシ<sup>ト</sup>  
ニテ緩々鄰國ノ處置ヲ待タス充分之レヲ辨理スベキ  
ノ間暇アリシ然ルニ皇帝陛下ヨリハ其事實ヲ糾明ス  
ベキノ命アリタレモ慢リニ之レヲモ中止シテ唯無益

大  
文  
五



ノ告示トナシ置キシヲ以テ總理衙門ニ於テモ終ニ防  
キ難キ程ノ一大事件ニ成リ行キシナリ

へ

近年日本ニ於テ執行シタル政體變更ノ最初ノ處置ハ  
舊時ノ封建制ヲ再分シテ藩制ヲ設ケ従前ノ領主ヲシ  
テ之ガ知事タラシメシガ幾許モナク再度ノ改革アリ  
テ即チ藩制ヲ廢シ地方官ヲ置テ之レヲ縣トナシ中央  
行政官ニ於テ撰任シタル官負ヲシテ之レヲ管轄セシ  
メ従前ノ如ク諸侯ノ帝國內各所ニ於テ政權ヲ施スヲ  
廢セリ

ト

千八百六十七年中ゼネラルルジャンドル氏ト懇親ナリ  
シ蕃民ノ首長常ニ云ヘル事アリ「或ル一國ヲ除クノ外

他ノ外國人ハ故意ヲ以テ殘忍ノ待遇セシコナシト此  
一國トハ即チ支那人ヲ云フコナリ蕃民ハ如何程平安ノ  
保證アルニ支那人種ノ關係スル所ニ其身ヲ寄スルコ  
ヲ好マズト

チ

ビンハム氏ノ議論ハ合衆國政府ニ於テモ公告スルニ  
足ルベキモノト見做セシ故該事件ニ就テ同氏ノ報告  
セシ諸書ハ悉皆千八百七十四年外交報告書中ニ掲載  
セリ

リ

日本人ノ習慣ノ方略ト支那人ノ古風ノ方法トハ甚ク  
懸隔ノ相違アリ其一例ハ既ニ柳原西郷ノ両氏ト沈潘  
兩氏トノ處置ニ付テ見ルベシ夫ノ支那ノ兩氏ハ已レ



等ヨリハ高等ノ位階ヲ保チタル日本官吏ト勤メテ親睦ナラントスルノ方法ヲ施シ而シテ如此クスル時ハ果シテ莫大ノ利益アリ又之ガ為メニ必ス外交ノ勝利ヲ得ルコトアルベシトノ望ミヲ抱ケリ又日本官吏ノ一人柳原ヲ云フハ支那應接中已レヨリハ劣等ノ者ニ對スルノ形状ヲ示シ又自カラ本分ヨリハ高等ノ地位ヲ保チテ其對論者ヲ輕侮セントセリ斯ル景況ナレハ始終盡カノ功ナカリシ柳原西郷ノ兩氏カ藩爵ニ會セシ時ノ如キハ同人ノ演フル所ヲ盡ク聞キ又其意見ヲモ承知シタル上ニテ「卿ハ余輩カ共ニ事ヲ計ルベキノ人ニ非ズ」ト言ヒタリ其後沈氏自カラ兩氏ヲ訪ヒシ時ハ稍少シク應接ノ步ヲ進メシガ其時スラ最後ノ決定ハ同氏ヨリ高官ノ人ニ會シテ高議スベシト定メタリキ

ハウス氏征臺紀事



Blank page with faint vertical lines and ghosting of text from the reverse side.

太  
正  
官



